

---

# 魔導戦記リリカルなのはWARS—GENERATION

アル・トライア

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔導戦記リリカルなのはWARSIGENERATION

### 【Nコード】

N4674S

### 【作者名】

アル・トライア

### 【あらすじ】

なのは×ガンダムの二次創作

交わるはずのない2つの世界。魔導師と機兵、戦いの終焉は新たな世界を生み出し、結びつける。英雄と女神、空白の時間に生きていく有るはずの無い歴史。

魔導戦記リリカルなのはWARSIGENERATION

君は歴史の立会人になる…

この小説は二次創作です。実際のなのは、ガンダムには一切関係ありません。

御意見、御感想や修正点の指摘など沢山の応援やメッセージをお待ちしています。

イラスト等もございましたら是非投稿していただけると嬉しいです

## プロローグ（前書き）

こちら別サイトで投稿していた小説を再編集し、投稿したものです。

色々の不具合が有る可能性がございますので、コメント等に書いて頂けると修正が楽で助かります。

それではどうぞご覧下さい。

## プロローグ

一つの世界で戦いは終焉を告げた

そして、二つの世界が交錯するとき機神達の新たな運命が始まる

世界を救うのは機神か女神か……

戦争の歴史（WAR S I G E N E R A T I O N）は止められない……

UC（宇宙世紀）0093 アクシズ宙域

「アムロの搜索を急がせる！」

ロンド・ベルの指揮官“ブライト・ノア”の声が戦艦“ラー・カイラム”の艦内に響いていた

『こちら63小隊、周囲に機影は見当たりません』

虚しい報告がブリッジには届いていた、それは姿を消した部隊の間“アムロ・レイ”の行方が一向に掴めないというものだった

「どうということなんだ。アムロだけでなく機体まで見当たらないなんて」

報告を受けたブライトはこの状況に一つの疑問を感じていた

『反応……ロストしました!』

アクシズに取り付いたアムロの乗機“ガンダム”の機体反応まで  
が消えてしまっていたのだ

新暦0076年 機動六課

ここ、第一管理世界ミッドチルダの森では模擬戦が行われていた

「ヤアアアア!!!」

少年は斬り掛かり

「ウイングロード!!!」

少女は駆けていた

「行くよ!!!」

己の憧れた人に認めてもらうために

「クロスシフト +! 今度は成功させるわよ。もうあの時みたい  
にはならない!」

「うん。私も失敗で終わるのはいやだ!」

2人の少女、“スバル・ナカジマ”と“ティアナ・ランスター”は  
自分達の憧れの人であり師匠である“高町なのは”と戦っていた

「ティアナ、攻撃が正確になったね。私も負けていられないな！」

2人の攻撃を受けながらもなのはは動いていた

「（全方位からのティアナの攻撃……止まって防げるけど……止まるとスバルの攻撃が来る！！よく考えたな、こんな作戦を……でも、空戦魔導師には通じないよ！！）」

そう確信したなのはは空高く上昇した

「今よ！！！」

その瞬間ティアナの声が響いた

「え……？ ……嘘ッ!？」

気付いた時には遅かった、ティアナの幻影が周囲を囲み何本ものウイング・ロードの上を何人ものスバルがなのはに向かって駆けていた

「でえええい！」

本物のスバルがなのはに肉薄し一撃を加えようとした

「（勝てる……なのはさんに、初めて勝てる！！）」

その瞬間、世界は爆音とともに大地が揺れた

「な、なんや？」

「地震？」

爆音に一同が驚いた

『はやてちゃん』

シヤマルの念話がはやてに届いた

『ミッドチルダの各地で大規模な次元震が起こっています。しかも数ヶ所では次元断層も発生しています』

「なんやて!!！」

彼女は突然の念話に我を忘れて驚いた

「はやて、どうしたの？」

慌てている友人、“八神はやて”に向かって“フェイト・T・ハラウオン”は尋ねた

「フェイトちゃん、落ち着いて聞いてな。今の爆音はこの世界で次元震が起きたことによる影響らしくてな。しかも数ヶ所では次元断層も発生して本部も混乱しているみたいなんや」

『皆さん、模擬戦は中止です。地上本部から事態の收拾に向かうようにと連絡が入りました。』

また、はやて隊長はすぐに管制室に戻って下さい。こちらも非常に混乱していて統制がとれません』



グリフィスが慌てた様子はやてに連絡をいれてきた

「わかった。私もすぐ戻ります」

『了解！』

はやてが指示を飛ばし、通信は途切れた

「なのはちゃん、フェイトちゃん、スバル、ティアナ。急いで現場に向かってくれろ？ 座標はロングアーチから送ってもらって」

「了解！」

「はい！」

「わかりました」

「任せて」

一つの世界で物語が終わるとき、新たな世界が生まれる  
世界は必然で結びついた

— E N D —

## 第一話 機神と女神

「ん……ここは……どこだ？」

周囲を木々に囲まれた森の中で一人の青年……“アムロ・レイ”は目を覚ました

「これは……重力があるな、ここはコロニー、いや地球か？　しかし俺はアクシズを押し返そうとしていたはずだ……それにガンダムも見当たらない」

そこでアムロは周囲と自身を見て、違和感に気が付いた

「軍服？　俺はパイロットスーツを着ていたはずだが……」

アムロは自分が現在置かれている状況に非常に困惑していた…

「ここは……一体、何がどうなっている？」

とあるビルのなかで“ヒイロ・ユイ”は目を覚ました

「なんだ……これは！」

彼は自分の居場所を確認しようと窓から外を眺め、空を見て驚愕した

「太陽が……2つだと……!!」

異変に困惑していたが、他の違和感を解決するために調査を継続した

「見たところ、地球のようだな、この廃ビル……形状からして日本か？」

さらに情報を集めるために周囲を確認すると自分の近くに2人の男が倒れていることに気がついた

「脈はある、生きてはいるな。心音も安定している。すぐに目覚める心配は無いだらう」

しかし、男達の脈を確認したヒイロは問題無いと判断し、彼らをそのまま放置しておくことにした

「これは……足音……2人分か……」

そのとき、ヒイロは足音に気が付いた

「来るな……、作戦変更情報収集の方法を現場調査から現地人からの聞き取りに変更する。ならば……この男達は残すべきだな」

彼は情報を集めるため、自身の身の安全を確保するために男達を利用することにした

一方、とある草原では2人の青年が自分の今の状況に混乱していた

「なんで僕はこんなところに？ ……それに、ここは一体？」

二人のうちの一人、茶色がかった髪を持つ顔立ちの整った青年……  
“キラ・ヤマト”は自分が置かれた状況に疑問を感じていた

「確か僕はシャトルに乗って、事故に遭って……それから……。あなたは何か知っていますか」

自分の最後の記憶と現在の状況が一致しなかったキラはその場にあった褐色肌の青年、“ロラン・セアック”に質問した

「僕も訳が分かりません。ディアナ様はどこへ？ ホワイトドールはどこにいった？」

しかし、ロランも周囲の見慣れない景色にかなり混乱しており、現在の状況についての答えを得ることはできなかった

「とりあえず落ち着いて下さい……それじゃあ貴方も気付いたらここに？」

「……はい、もしかして僕達は死んだのでしょうか？」

「それは分かりません……！ 向こうに誰か倒れています。行ってみましょう」

「はい」

現在の状況についてロランと話していたキラはパイロットスーツの男に気が付いた

「……………ッ！！ 待って下さい、空から何か来ます」

そのとき、ロランは空中から降ってくる影を見つけた

「（あれは……まさかMS？）」「

2人は自分達の頭の中から最悪の状況、巨大な機械の体を持つ敵、通称MSが降りてくることを予想して身構えた

「ここは危険です。とりあえずどこかに身を隠しましょう」

「そうですね、僕もそれが最善だと思います」

ロランの提案にキラは賛成し、倒れていた男を連れて隠れることにした

「ここかな、次元断層があつた場所つて？」

高町なのはは都市から離れた森に来ていた

『はい。この地域には自然公園しかないので人的被害は無いと思われませんが、念のために周囲の搜索を続けてください』

シャーリーは通信で答えていた

「了解」

なのはは通信を切って搜索を開始しようとした

「すまないが、ここがどこなのか教えてくれないか？」

「ッ！ 誰？」

不意に後ろから声をかけられたのは杖の先を向けながら振り返ると、そこには見たことのない軍服を纏った男が立っていた

「すまない、驚かせてしまったようだね。俺は地球連邦軍外郭新興部隊<sup>ベル</sup>所属、アムロ・レイ大尉だ」

「（地球連邦軍……じゃあ地球からの漂流者！？でもミッド語話しているし……それに、連邦軍なんて私は知らないし……）」

アムロの言葉になのは困惑していたが、場所を訪ねられていたので質問に答えることにした

「私は時空管理局戦技教導隊所属の高町なのは一等空尉です。ここはミッドチルダ北部の自然公園です」

「ミッドチルダ、聞いたことの無い地名だな。それに時空管理局なんて俺は知らない。……もしかして、ここは地球じゃないのか？ それならばこの状況にも説明が付く……」

「そうです、ここは地球ではありません。先程も言ったとおりここはミッドチルダという次元世界です」

なのはが説明した

「そして貴方はおそらく次元漂流者です。私は貴方を保護したいと思っています」

続けてなのは自身の仕事を説明した

「そうか、だったらお願いしよう」

アムロが依頼すると、突然どこからか声が聞こえた

《マスター、彼を保護するのは良いのですが他にも二つほど生体反応があります》

「ええっ！ 嘘!？」

なのはは困惑しながらも辺りを確認していた

「確かに二人ほど気配を感じる。……一つは……カミーユか？ もう一つも感じたことがある。しかし何故気が付かなかったんだ？ それに、この声はどこから？」

アムロは混乱していたせいか2人に気が付かなかったことと、どこからか声がしたことに非常に困惑していた

「声については後で説明します。それよりも誰かがいることが分かるんですか？」

「ああ、どうやら一人は俺の知り合いらしい」

「お知り合いですか……」

《マスター、お話の前に早急に彼らを保護したほうが良いのでは？》

なのはの質問にアムロが答えたとき、先ほどの声が再び響いた

「……そうだね、“レイジング・ハート”」

そう言ってなのはは搜索を開始した

「……」

「やっぱり……」

スバルとティアナは先のJ・S事件ジェイル・スカリエッティで最も被害を受け、今は廃墟と  
なっているエリアに来ていた

《相棒パティ、ビルの中から生命反応があります。数は3》

「わかった、行くよ！」

スバルは愛機からの報告を受けて反応のあったビルの中に一人で突  
っ込んでしまった

「スバル、ちよつと待ちなさいよ！……ああ、もう！」

それを見たティアナも追いかけながら入っていった

「ティア、ちよつと来て」

スバルとティアナがビルの一室に入ると2人の男が倒れていた



「気絶しているわね、生きているみたい。とりあえず保護しないと」  
こうして、スバルが男達を保護しようとしたとき、何か落ちてくるような物音がした

「貴様達は何者だ？ 知っていることを全て話して貰おうか」  
突然背後にヒイロが現れた

「話せば危害は加えない……話さないなら……」

ヒイロは突然現れた人物を警戒し、情報を得るためにティアナに銃を突き付けた

「まず銃を下ろして」

ティアナは落ち着いていた

「下ろさないのなら？」

ヒイロもその態度に気圧されることなく、淡々と会話にならない会話を続けた

「無理矢理にでも拘束する！」

ティアナがそう言った瞬間、ヒイロが手に持った銃を撃った

「ホログラム立体映像！？」

しかしティアナは銃弾が当たった瞬間に霧散し消えた

「私の幻影を甘くみないで!!」  
ミラーシユ

「ティア!」

スバルもティアナに加勢して本格的な戦闘が始まった

「ティア、伏せて」

「チツ!!」

「せえええい!!」

スバルがヒロの一撃をかわし攻撃をしようとしたときにそれは起きた

「え?」

「女とはいえ、2対1は卑怯だぞ。このタッグマッチ、俺が預かった」

倒れていたはずの1人の男“ドモン・カッシュ”がスバルの攻撃を受け止めヒロに加勢したのだ

「…………あれ…………」  
「……は…………? ティファ…………?」

一方、戦いの中で3人目の少年、“ガロード・ラン”は目を覚ました

「え……どうなってんの？」

ガロードは自分の状況と目の前の戦闘に混乱を覚えた

「とりあえず、逃げた方がいいよな。」

その激しい戦闘にガロードは自分も巻き込まれる前に逃げようとした

「リボルバー……ナックル!!」

「……無駄だツ……せいっ！」

「え？ キヤア！」

その時、ドモンと対峙していたスバルは自身の必殺技を放とうとしたが、逆に彼の一撃を喰らい吹き飛ばされた

「うわぁ……モロに喰らったよ痛そう……って……危なっ！ 人の  
目の前に吹き飛ばす奴が何処にいるんだよ!! ……あ……  
……」

戦闘の様子を伺いつつ逃げていたガロードの目の前の壁に吹き飛ばされたスバルがぶつかった

「ッ……ガハッ!!」

そのため、ガロードが叫んでしまい全員の注目が集まってしまった

「何してんの、逃げないで。今保護しようとしているんだから」

「保護……?」

凍りついた空気の中、ティアナが発した言葉に疑問を感じたのはヒイロだった

「そうよ、次元漂流者の可能性のあるあなた達を保護するのが私達の目的だったの。」

「ならばすぐに手に持っている銃を下ろせ……」

「人に物を頼むときは自分からよ」

「そうか……」

「えっと……話が見えないのは……俺だけ?」

ティアナの一言で全ての誤解が解けたため、ヒイロとドモンはとっぴあえず戦闘を中止し、ガロードは逃げることを諦めた

「バルディッシュ、生命反応があったのってここだよな」

《そうです、数は3。全員が集まっています》

フェイトはミッドチルダ西部の草原地帯に来ていた

「え?」

そこでフェイトは一つの異変に気づいた

「……人の気配がしない？（おかしい……生命反応はあるのに人の姿がどこにも見えない。）」

彼女はその異変を気にしながらも搜索を続けていた

「やっぱりおかしい……生命反応は誤認だったのかな……？」

「あの……」

「ッ！？」

探索を続けていたフェイトが突然聞こえてきた声のほうに顔を向けると草陰から2人の男が出てきた

「私は時空管理局執務官のフェイト・T・ハラオウンですお二人は何故このような場所に？」

「分かりません、気付いたらここに……」

尋ねるとキラがその質問に答えた

「次元漂流者か……」

《おそらくその判断で間違いないかと》

「あの……次元漂流者って何ですか？」

フェイトがキラの答えと状況から推測すると、ロランが質問した

「現在のあなた達のような人のことです。詳しくは後で説明します。あなた方の他に人は居ませんでしたか？」

「はい。男性が1人、気絶しています」

キラが答えた

「わかりました、ここにいる全員を保護します」

フェイトは3人を保護することにした

女神達の導きで機神は集う……  
めぐりあうその先に宇宙そらは無い

— E N D —

## 第二話 魔法の世界

「…………あれ、ここは？」

少年………… “カミーユ・ビダン” はへりの音と振動で目を覚ました

「僕はシロツコと戦ってそれから……………」

少しだるい体を起こしてみると、隣ではアムロが見知らぬ女性と話していた

「…………つまり、この世界では魔法は俺達の世界での科学のように発展している。これでいいのかな？」

「はい、その通りです。あ、アムロさん、知り合いの方が目を覚ましましたよ」

アムロはなのはの一言で気が付いた

「カミーユ、大丈夫か」

「アムロさん、ここはどこですか、確かさっきまで僕は…………それに僕の隣にいる彼は誰ですか？ 見たところエウーゴのパイロットスーツをカスタムしているみたいですが……………」

「彼はジュードー、君の言った通りエウーゴのパイロットだ。それよりももう少し休んだ方がいい。着いたら起こす」

アムロはジュードのことや現在の状況についての説明は後でする事を告げ、休むことを促した

「わかりました、休ませていただきます（アムロ大尉、雰囲気変わったな……僕が知っているの大尉とは違うのかも……）」

カミーユは再び目を閉じた

「……それで貴様達は管理局と言う組織の人間で俺達は別世界から来たと言うわけか」

「そうね、ついでに言うとなんた達の世界に帰る手段は今は見つかってないわ。珍しいわね、話しても信じない人の方が多いのに……」

「そうか、これだけ不可解なことが連続して起こるならば信じざるおえない……（リリーナ……どうやら俺は、厄介事に巻き込まれたらしい……）」

ヒイロ、ガロード、ドモンは2人の少女、スバルとティアナと共に護送車の中にいた

「あのさ、これ解いてくれない？ 背中が痒くて……」

「そうね……もう車から飛び降りようとしないうら解いてもいいわよ」

「お前、袖の隠しポケットに針金を一本、襟の陰に吹き矢、左胸の内ポケットの下にナイフをまだ持っているな」



「うっ！」

「アンタ、なんでそんな事がわかるのよ……」

「調べてみればわかる……」

「嘘ッ！？ 本当に入ってる！」

ガロードは何度か脱走を試みたらしく、手をバインドで固定されさらに持っている道具を全て押収されていた

「いやぁ……だって魔法とか異世界とか信じらんないし……（それに……もし本当にここが異世界だとしたらティファも来ているかも知れない……もしそうなら、探しに行かなきゃ！）」

ガロードはただ逃げようとしていたワケではなかった

「おい、お前……」

突然、ドモンが口を開いた

「貴様が何に焦っているかは知らん……とりあえず落ち着け。何かを成し遂げたいならば目の前の壁を乗り越えろ。しかし、今は彼女達の指示に従うべきだろう。全ては自分が動けるようになってからだ。」

「……そうか、そうだよな。とりあえず今はこの世界の情報を集めなきゃ！」

ガロードの表情は急に明るくなり何かを自覚したようだった

「フ、どうやら、何をすべきか分かったようだな。」

「はい！兄貴！」

「あ、兄貴……？」

ドモンは自分に掛けられた言葉に困惑した

現在、“刹那・F・セイエイ”は起きることが出来ずにいた。数え切れない程にタイミングはあったのだが全て逃がしてしまったのだ

「あの…大丈夫ですか？」

不意に1人の男が刹那を起こそうとした

「…う……………ん……………」

これをチャンスだと思った刹那は目覚めた振りをした

「あれ？ここは…どこですか？あなた達は…誰？それになんなんですかこの状況は。」

刹那は何も分からないかのように、弱々しく質問を始めた

「僕はキラ・ヤマト。僕が先程聞いたことをまとめて話しますね。」

「えっと…はい……………」

「それと…もう演技をする必要は無いと思いますよ。」

刹那がキラから情報を得ようとした時、キラの放った言葉に刹那は戦慄した

「ッ！いつから気付いていた？（ミッション中の不足事態………F3からD6に変更するか……）」

キラは刹那が演技をしていたことを見抜いていたのだ

「最初からです。普通なら反応するようなことをしてもあなたは起きませんでしたし、起きてから発した質問が余りに不自然だったからです。」

「不自然……？」

「はい。あなたは起きてから僕に3つの質問をしましたが、質問の順番がおかしかったです。それは、普通なら一番最初に状況の確認をするはずなのにあなたはそうせずに、逆に周囲を警戒して僕達の正体を聞いた。」

「………そうか（問題ない………現状を維持する）」

キラの洞察力に刹那は驚きながらも自分の正体がばれていないことに安心した

「とりあえず、今まで説明されたことを教えてくれ………」

「わかりました。まず魔法は聞いていて分かると思いますですがそれを

使うためにはデバイスというもので操作の補助をします。その他に  
…」

刹那は状況を理解するためにキラからデバイスや魔法のことを聞いていた

隊舎では今後のことについて様々な対応に追われていた

現地に向かった4人からの通信で彼等が次元漂流者だということがわかったため、彼らを保護するための準備が進められたのだ

しかし、彼らの保護に関しては3つの大きな問題があった

1つは言語、もし言葉が通じなければ文化レベルを調査することもできず、漂流者も混乱してしまう

しかしこれは全員が会話できているという報告からクリアとなった

2つ目は外見の違いである

明らかに外見が違っていると保護したとしても、周囲にとけ込むことが出来ないために、まともな生活を過ごせないからだこれも報告から外見は一般の人間と変わらないということで問題なしとなった。

しかし、3つ目が一番の問題であった

それは疫病や感染症の問題である

向こうの世界ではごく当たり前なウイルスであってもこちらの世界では免疫がなく、バイオハザードに発展する可能性もある

そのため、もしそのような物があつたならば即冷凍封印、又は魔力による圧縮による処分の後に虚数空間に放り込むといった対応を取

らなければならなくなる

もちろん、最悪の場合であり彼女達はこのような事はしたくないようだが……

しかし、これには精密機器が必要となるため、漂流者が来るまで一時保留となった

しばらくして、彼等が到着したため。部屋を各自に割り振り検査を待ってもらったことになった

「検査が終わるまではこの部屋からは出ないで下さいね。」

その後、検査の準備が整い、検査が始まった

「………検査は終了です。この部屋で待機して下さい。私達もここにいるので分からないことがあったら呼んで下さい。」

「ありがとう、君は……」

「ティアナ・ランスターです。こっちが相棒のスバル・ナカジマです。」

「よろしくお願いします。」

「そうか、俺はアムロ・レイだ」

検査の後、初めて全員が顔を合わせた

「あなたも次元漂流者ですか？」

茶髪の青年、キラがアムロに話しかけてきた

「そつらしいな。」

「僕はキラ・ヤマトっていいいます。」

「キラか、俺はアムロ・レイだ。もとの世界では軍人をやっていた」

アムロは自分自身の世界での経歴を話した

「軍人…じゃあ戦闘機か何かに乗っていたのですか？」

キラはアムロが前線にでていたのかを確認した

「いや、俺とカミーユ、ジユドーはMSという人型の機動兵器に乗っていた。」

「MS…あなたの世界にもあるんですか？」

「ああ、“あなたの”ってことは君の世界にもあるんだね、そこで俺はガンダムというMSに乗っていた。」

全員が一つの単語に反応した。そう…“ガンダム”という機動兵器の名前に…

「ガンダム…だと…」

その空気の中で刹那は自身の心酔する機体の名を呟いた

ガンダム  
機神の名は世界に鳴り響く

星光の輝きに導かれ鼓動は愛の旋律を唱う

— E N D —

### 第三話 機神再誕

「…はい、わかりました。みなさん、検査の結果が出たそうです。これから案内いたしますのでついてきて下さい。」

スバルとティアナに案内され9人の漂流者達は隊長室に向かうことになった

「ティアナ・ランスターです。次元漂流者の方を連れて参りました。」

「開いているから入ってええよ。」

はやての許可で部屋に入るとそこにはなのは、フェイト、はやて、エリオ、キャロそして守護騎士とリインフォース？がいた

「はじめまして、私がこの部隊の隊長、八神はやてと言います。まず、検査の結果ですけど…全員問題なし、処分とかは無いので安心して下さい。」

一同はとりあえず安心したがただ一人刹那だけは心中穏やかではなかった

理由は目の前にいる2人の少年少女のせいだった

「……………（あの子ども達、着ているのは制服か？……………まさか、この世界も歪んでいるのか？）すまないが、ここにいる全員の名前を確認したい。自己紹介をしてくれないか。」

刹那は自身に芽生えた疑問を解決するために会話で誘導する事にした



「わかりました。さつきも言った通り私は機動六課隊長八神はやて二等空佐です。」

はやてから順番に自己紹介が始まった

「私は高町なのは一等空尉です。」

「フェイト・T・ハラOWN執務官です」

「ヴォルケンリッター守護騎士、烈火の将シグナム一等空尉。」

「同じくヴィータ二等空尉だ」

「シャマル医務官です。」

「……………」

「この子はザフィーラ、一応は喋れるで。」

ザフィーラが話そうとしなかったのではやてが代わりに説明した

「先程も言いましたが機動六課FWメンバー、ティアナ・ランスタ  
ー一等陸士です。」

「同じくスバル・ナカジマー等陸士です。」

二人に続いてやや緊張しながら

「同じくエリオ・モンディアル三士であります。」

「キ、キャロル・ルシエです。この子はフリードリヒって言いま  
す。」

「（最前線にいるのか？やはりこの世界は…しかし、まだそうだと  
決まった訳ではない。）」

グイータ、エリオとキャロが自分達を前線のFWメンバーと言った  
時に刹那は強い怒りと不快感を感じた

「（経過を確認する、もし何かあったら……）」

しかし、保護されている身で銃を向けるわけにもいかなかったので  
一時的に疑問を保留することにした

彼女達の自己紹介の後に彼等漂流者達も自己紹介を続けた

「アムロ・レイだ。元の世界では軍人だった。」

「カミーユ・ビダンです」

「俺、ジユドー・アーシタ」

「ロラン・セアックです」

「俺の名前はガロード・ランだ、よろしくー！」

「キラ・ヤマトです。キラって呼んでください。」

「ドモン・カッシュだ」

「ヒロ・ユイと呼ばれている、ヒロでいい」

「……刹那・F・セイエイ」

「これで全員かな？」

はやてが確認した

「ちょっと待つて下さい！リインがまだですよ」

「あーゴメンゴメン、この子はうち家族なのでユニゾンデバイスのリインフォース？いいいます。」

「リインフォース？陸曹です。」

「で、俺達を呼んだ目的は何だい？まさか結果を言うためだけここに連れてきた訳じゃ無いだろう？」

和やかな空気が流れていたがアムロの一言で空気が変わった

「気付いていましたか。なら、単刀直入に言います。あなた方の力を貸していただきたいんです。」

それは、管理局に入らないかという誘いだった

「先程の検査はウイルスの検査の他に魔力資質の検査でもありまし

た。結果、あなた方には魔力資質がある。その力を私達に貸して欲しいんです。」

はやてが頭を下げた

「……………」

「……………」

「……………」

しかし未だに正体の分からない組織に誰も入りたいと言いだすものはいなかった

「やはり、簡単に答えは出してくれませんか……………でしたら、ちょっとこちらの映像を見て下さい。」

そこではやては大型のディスプレイを出し、映像を出力した

「これは……………」

誰が声に出したのかは分からないが全員が驚愕の表情をしていた

「これは、先日謎の新型に攻撃を受けた管理世界の常駐局員が記録した映像です」

そこに映っていたのは大きさこそ人並みだが自分達の世界にいた人型の兵器“MS”が街を、人を蹂躪している姿だった

「うっ……………ヒ、ヒドイよ。こんなので……………」

「キャラ！？」

この映像をみて大きなショックを受けたキャラは倒れてしまった

「大変！！医務室に連れていかないと。」

「シャル先生、僕も行きます。」

「俺も行く、その子が心配だから……。」

エリオと刹那、シャルがキャラを医務室に連れて行くために退室した。

## 医務室

「キャラちゃんは軽い精神的ショックを受けたみたいね、少し休めば良くなるわ。」

「そうですか……よかった……」

シャルの診断にエリオは安心した

「エリオ、この世界では子供までもが前線に駆り出されるのか？  
もし、無理矢理前に出されているなら……」

刹那はエリオに戦う理由と働いている理由を尋ねた

「違います！管理局は慢性的に人員不足なので子供であっても能力があれば雇ってくれます。……でも、僕とキヤロは親代わりの人……フェイトさんに恩返しをしたいと思って自分達の意志でここにいます。」

「……そうか。」

その答えは刹那を十分に納得させるものであった

「おまえの意志ならば止める理由はない……。ただ……戦うならば、お前の力で傷つく人間がいることを忘れるな」

「……ハイツ」

「先に戻る……彼女の所においてやれ……」

「ええっ！彼女って、そんな関係じゃありません！」

慌てるエリオを余所に刹那は医務室を出て行った

隊長室

「すまない、勝手に出て行ってしまった。」

刹那が隊長室に戻ってきた

「キャラ口は大丈夫なの？」

フェイトが尋ねた

「ああ、少し休めば良くなるらしい。」

「よかった〜」

フェイトが安堵の声を出した

「刹那、君はどうするの？僕達は全員が戦うってことになったけど。」

キラが聞いてきた

「この世界には戦いの火種が有る。俺はそれをただひたすらに破壊する。」

刹那は自分の言葉で答えた

「わかりました。あなたがたはこれから時空管理局の職員として働いてもらいます。もちろん、階級もありますし、専用のデバイスも用意します。」

しかもはやてはそこで更に階級と専用のデバイスまで付けると言い出した

これは彼等には有り難い条件だった。階級が高ければ管理局側での待遇が良くなるし、専用のデバイスは自分達が即戦力になるために必要だった

「でも、専用のデバイスってそんなに簡単に作れるものなんですか？」

カミーユが質問した

彼が質問するのも無理はない

本来、専用のものは本人の適正に合わせて何回もの試作やシミュレートを繰り返し、月や年単位の時間をかけて作るものだ、それを9人分も同時に作るとなれば疑問にもなる

「大丈夫です。うちには優秀なデバイスマスターがいますから」

はやては自信と難題をシャーリーに丸投げした

「とりあえず作ってほしいデバイスの形状をCGグラフィックで表して私のところに持ってきて、パソコンが部屋にあるはずだからそれを使ってね。全員が集まったら私から渡しておくから。」

なのはが付け加えた

「すまない、俺はパソコンを使えないぞ。」

ドモンがパソコンを使えないことを口にした

「じゃあ……ティアナ、手伝ってあげて。」

「わかりました。」

「言葉がわからないがどうすればいい？」



アムロが言った

彼の言うことはもつともである

彼らは何故か言葉は話せる

しかし、書けるわけでは無いのだ

「じゃあ、フェイトちゃん？英語に変換できる？」

「少し時間が掛かるけどできるよ。」

「英語なら問題はないな。」

全員がデザインを決めるために部屋に戻っていった

その夜、シャーリーは一人でデバイスを作成していた

「はやてさん…いくらなんでも、いきなり9人分は無茶ですよ……」

シャーリーはそういいながらもしっかりと作業を進めていた

「GNソードって言われても分かるはず無いじゃない……」。

しかし、彼女は刹那のデバイスの形状に戸惑っていた、他の人は銃や剣、籠手などの比較的簡単なものであり既に完成したのだが彼のデバイスのデザインは、銃と剣が一体となった特殊な形状のものが、たために知識のない彼女には困難な作業だったのだ

「ちょっと休憩、休まないと身がもたないわ。」

シャーリーが一息つこうと席を外そうとしたときに彼はやってきた

「すみません、入って大丈夫ですか？」

キラがデバイスがどのように出来るかを見にやって来たのだ

「どうぞ。」

「こんな所でデバイスって作るんですか。」

「そうですね、先程渡されたデザインを下に材質を決定して、変形などの機構を取り入れます。」

「これは……刹那のですか？GNソード？変わった形の剣ですね……。でも、この形状なら多分……。」

「そうですね。ちょっと機構が複雑ですけど、刀身を折りたためば銃としても使えるらしいんですよ……ってキラさん？」

「だからといって魔力負荷を無視すると体が保たないし、この武器の運動性は削れない。………だったら。」

何か独り言を呟いたと思ったら突然、キラはパネルを叩き出し一瞬でプログラムを完成させてしまった

「すごい……これだけのものを一瞬で……キラさんはここに来る前はプログラムが何かの仕事をなされていたんですか？」

シャーリーはキラから確かな才能のようなものを感じていた

「違います。プログラミングを趣味でやっていただけですよ。あとGNソードについてですが、形状的には腕に取り付けて使うような物ですよ。」

「でしたら、刃は余り大きくしてしまうといけませんね。」

「ですが、刹那のシールドとの左右バランスを考えると少し大きめに造った方が良いと思いますよ。」

「そうですね………でしたら、これでどうですか？」

「大丈夫だと思います」

キラの助言を受けつつデバイスは完成した

「あの…もしよろしければ起動実験を手伝ってもらっても良いですか？」

シャーリーは起動実験にも付き合ってもらおう事にした

「わかりました、僕のつてどれですか？」

キラは二つ返事で承諾した

「えっと…これです。デバイスに名前をつけないといけないので一度起動して下さい。」

「わかりました。…って、どうやって起動するんですか？」

「あ！ごめんなさい、デバイスを持ってセットアップで起動します。」

「わかりました。セットアップ！……………あれ？起動しませんよ。」

《ERROR、起動できません。ミッドチルダ式の魔力で再起動を行って下さい》

しかし、起動はうまくいかなかった

「ちょっと待って下さいね……………これは……………どうやら皆さんの魔力の形態が普通の物とはかなり違うようですので調整し直します。キラさん、もう少し手伝ってもらってもいいですか？」

原因は彼等の魔力形態の違いである

汎用性と射撃に特化したミッドチルダ式

近距離戦闘と火力の広範囲魔法に特化したベルカ式

9人の漂流者達はこのどちらにも当てはまらなかったのだ

「わかりました、完成するまで協力しますよ。……………女性一人だと大変でしょうから。」

「あ、ありがとうございます。」

シャーリーは問題を解決するために再びキラの力を借りることにした

「これも駄目ですね……………」

「じゃあ、運動系を改善すれば……………」

「それとも……」

その日、デバイスルームには、一晩中2人の声が響きわたっていた

機神達の新たな力は蘇った自身の力

女神に誘われ導かれる

そこは楽園などではない……

— E N D —

## 第四話 白い悪魔

「できた」

「お疲れ様です。」

翌朝、デバイスはついに完成した

「全員分を調整し直すのは、時間が掛かりましたね。」

「でもキラさんがいなかったら、あと半日はかかっていたよ。」

キラとシャーリーは互いに労いの言葉を掛け合った

「キラさん、後は私に任せて休んでいて良いですよ。」

「わかりました。でも無理しないで下さいね。あなたは女性なんだからもつと体に気をつけないと。」

「……はい。」

キラはシャーリーの好意に甘えて午後の召集まで休憩することにした。

そのときのシャーリーはキラの顔を見て薄赤く頬を染めていた

その日の午後、彼等漂流者達に正式に辞令が下された

「では、一人ずつ言っていけますね。まずは…アムロ・レイ二等空佐」

「高っ!!」

スバルの一言と共にはやて以外の全員が驚いた

「いいのかい？そんなに高い階級を与えて……君と同じ階級だろ？」

驚くのも無理はない二等空佐とは中佐相当、アムロの以前の階級、大尉よりも2つ上の階級なのだ

「ああ、それと……皆さんのように高い魔力資質を持つ人がいきなり同時に入局すると不自然なので提督方や騎士カリムの力を借りて以前から管理局に所属していたようにデータベースに細工を施しました」

はやては彼等を自分達の部隊に入れるために三提督や騎士カリム、リンディ提督に協力してもらったことを告げた

「それって犯罪なんじゃ……」

なのはただ苦笑いするだけだった

「気にせんとして、ほな続けます。」

はやてはなのはの言ったことを受け流し続けた。

「ドモン・カッシュ陸曹

ガロード・ラン一等陸士

ヒイロ・ユイ三等空尉  
ジユドー・アーシター一等空士  
カミィユ・ビダン三等空尉  
キラ・ヤマト一等空尉  
ロラン・セアツク空曹  
刹那・F・セイエイ陸曹長。  
以上9名はこれから設立される新部隊に配属となります。」

「その辞令、確かに受領した。」

アムロが連邦式の敬礼をして、はやてが管理局式の敬礼で返した

「えっと…じゃあデバイスも完成したみたいだし、早速魔法の練習しようか。」

なのはの一言で彼等は訓練場に行くことになった

## 訓練場

アムロ達は訓練のためにFWメンバーと訓練場に来ていた

「えっと…これが皆さんのデバイスです。」

シャーリーから1人ずつデバイスを受け取っていた

「まずはこの子達デバイスに名前をつけてあげて下さい。あ！キラさんののは今日の朝のうちに終わっていますからそのままで大丈夫ですよ。」



「分かりました。それじゃあ皆さん、デバイスをセットアップで起動して名前を登録、認証して下さい。……ちなみに僕のデバイスはストライク、僕の世界のガンダムの名前です。」

「名前は自由に決めて良いのか？」

ヒロがキラに質問した

「僕は自分が最初に乗ったガンダムの名前を付けました。装備もその機体のものを再現したので。」

キラが説明した

「そうか……。ならば俺のはウイングだ。ウイング、セットアップ！」

《All light! My Master! Wing: Set Up》

ヒロは自分のデバイスにウイングと名付け、起動した。彼の再現した武器はバスターライフル、元の世界での彼の愛機“ウイングガンダム”の武器だった

「そうだな……。俺のデバイスは（ニュー）：RXI、セットアップ！」

《Yes Sar! RXI Set Up!》

アムロも自身の愛機、“ガンダム”の名前を付けた。

他の漂流者達も次々にデバイスを起動し、各々が共に戦場を駆けた  
愛機の名前をつけていった

「じゃあ、私達の使う魔法を説明しますね」

デバイスを全員が起動した所でなのはが魔法の説明に入った

「えっと……皆さんの魔力は私達の使っているものとかかなり違います。私達の魔法は体内で魔力を組み上げて放出します。でも皆さんの魔法はデバイスに魔力を流し込んで放出するみたいですね」

「それに僕達はバインドや障壁といった補助魔法の類を使用することが出来ません。防御の際はシールドを取り出して展開するしか無いですね。」

なのはの説明に作成に携わったキラが付け加えた

「あと、皆さんのデバイスには複数の武器が搭載されているので状況に応じて使い分けて下さい。」

シャーリーが最後に付け足した

「（ターンエー）、ライフルの残弾は？」

《おおよそ37です。しかし、残弾数には気をつけて下さい。》

「ええっ！？バルカンは撃てないの？」

《そう設定したのはマスターです。ダブルゼータZZの武装は3種類のみです》  
各々がデバイスと話しながら使い方を学んでいた

一時間後

「……使い方はこんなかんじです。皆さん飲み込みが良いですね。」  
なのはは全員の適応力の高さに驚いていた

「アムロさん、最後に私と模擬戦をしてくれませんか？シャリー  
がデバイスの実戦での性能を確かめたいと言っていたので。」

「わかった。俺も実戦での使い方や君達魔導師の実力や戦い方を見  
てみたいしね。」

アムロとなのはが模擬戦を行うことになった

2人が知ることはなかったが、2人は共に“白い悪魔”と呼ばれて  
いた。今、次元と世界を越えて2人の“白い悪魔”の戦いが始まった

……ヒュッ……

「なかなかやるな……」

「アムロさんこそ……」

戦いの始まりは均衡からだった

パリーンッ！！

突然2人の魔力がぶつかり合いはじけた

「いけるか？」

そこからの動きは一瞬だった

「アクセルシューター…シュート！」

《All Light Axelshooter!》

なのはが8つの光球を創り出しアムロに打ち出した

「誘導弾か。」

しかしアムロはそれに動じずに最低限の動きだけでそれをかわした

「このっ！」

すると今度はアムロがお返しと言わんばかりにライフルを撃ちながらなのはに接近した

「防御しきれない!?!…シュート!」

しかし、なのはもそこにとどまる愚を避け、光球を撃つて上に離脱した

「かかった!」

アムロの狙いはそこにあった

“空中”

つまり彼の得意としている宙間戦闘の環境を作り出すために誘導したのだ

「なのはさんは空戦魔導師よ。空中戦で負けるはずは無いじゃない。

」

スバルは逆にアムロが誘い込まれたと言った

「ここなら見通しがいいかな?全力で行くよ!」

確かになのはにとっても空中での戦闘は最も得意とする環境であった

「様子見でワンショット、行くよ!」

《All light》

なのはが牽制のためにアムロに光線を打ち込んだ

「止まらないの!?!」

しかし、それを気にせず突っ込んでくるアムロを見てなのはは驚愕した

「嘘ッ、ビット!?!」

突撃してくるアムロの周りには6つの光球が浮遊していたのだ

「いけっ!フィン・ファンネル!」

《Fin Funnel!》

「光線!?!かわしきれない。」

なのははフィン・ファンネルから放出される魔力弾に翻弄されていた

「そこっ!?!」

「かわしきれない!?!」

アムロは光球と自身の技術でなのはを追い詰めていった

「この勝負、アムロさんの勝ちだな。」

カミーユが呟いた

「でも、こんな簡単に戦いは終わらないわよ。なのはさんは管理局のエース・オブ・エースで“白い悪魔”なんだから。」

そう、ティアナの言った通り彼女は先の事件で活躍した管理局の“白い悪魔”であり“エース・オブ・エース”である

「デivainシューター!…シュート!」

《Divine shooter》

「チイツ!」

なのはは誘導弾を撃ちだしアムロのファンネルを3つ打ち消したしかし、アムロは落ち着いていた

「年下のしかも女の子には負けたくないな。俺だって男だ」

アムロは逆転されるほど弱くもなく、何よりもプライドがある

「アムロさんだって、僕達の世界の一年戦争の時の英雄ですし、敵からは“白い悪魔”って呼ばれていましたから。」

カミーユが言った通り彼は一年戦争の英雄であり、連邦軍の“白い悪魔”でもあった

「ライフルを収納。ビームサーベル!!」

《Yes Sar!》

アムロはライフルをしまい、サーベルを取り出し接近した

「あの男、接近戦もできるのか!？」

シグナムが驚き尋ねた

「僕達はガンダムパイロットですよ。彼女のように砲撃戦専門ではないですから近距離での接近戦が苦手と言うわけではないんです。」

カミーユが説明した

「うおおお!！」

アムロはフィン・ファンネルから多数の光線をだしながらなのは肉薄しようとした

「っ!弾幕!！」

《Axelshooter………!Protection》

なのはは弾幕を張りながら離脱しようとした

「遅い!!!！」

しかし、回避が間に合わずレイジング・ハートの機転により障壁が張られたが、威力を殺しきれずにビルに突撃し、あたり一面は粉煙に包まれた

「どつちが勝った?」

「なのはさんよ!!!！」



「いや、まだわからない……」

戦闘終了時間まで

あと4分27秒

時間を越え世界を越えて白い悪魔はぶつかった……

狂った歯車は噛み合い新たな音楽を奏でる……

— E N D —

## 第五話 カートリッジシステム

「勝負ありだな……」

粉煙が晴れるとアムロはなのはにサーベルを突き付けていた

「それは…どうかな？」

しかし、なのはも臆することはなく、むしろ勝利を確信した顔をしていた

「（あれがとどけば……勝てる！！）」

なぜなら、アムロの背後から光球が迫っていたのだ  
それは、先程の弾幕の生き残りであった

「アムロさんには悪いけど、この勝負私の勝ちです！」

「甘いな……」

アムロは常に冷静だった

「え？……きゃあ！」

そして、アムロに光球が直撃し勝利が確定しようとしたとき、突然どこからか光線が飛んできて光球を撃ち落とした

「君が残していたんだ……今更卑怯だとは言えないだろ……」

アムロも警戒してファンネルのうちの一つを残していたのだ

「そこまで!」

シグナムの一言でタイマーのカウントが止まった

残り時間3分04秒

こうして、“白い悪魔”達の模擬戦はアムロの勝利で幕を閉じた

「あーあ……撃墜されちゃった。私の負けですね、アムロさん。」

「いや、君は戦死だ……実戦だったらな。」

「……え?」

「はつきり言おう。なのは……君の戦い方は甘すぎる。」

「私ที่甘い……?」

「ああ、確かに君は高い戦闘技術を持っている。魔力量も多いだろう。しかし、戦闘時における状況判断や敵の動きに対する予測が甘い。例えば先ほどの戦闘、俺がファンネルと一緒に突っ込んだ時、君は回避よりも攻撃を選択した。その結果、俺に距離を詰められビルに突っ込むことになった。極めつけは最後の攻撃だ……君は俺に

サーベルを突きつけられた時、自らの勝利を確信して防御行動をとらなかつた。そのために君は俺に負けたんだ。……実戦だつたら死んでいるぞ。」

模擬戦終了後、アムロはなのはに実戦での甘さや状況判断力の低さを指摘した

「アムロさん！それは言い過ぎじゃないですか？なのはさんは先の事件で最も戦果を挙げた人物の一人なんですよ。」

「それに……なのはさんはいつもこうやって、結果を出して来たんです！」

スバルとティアナがアムロに反論した

「……確かに、今まではそれで上手くいっていたのだろう。……だが、これから先もそうだとと言えるか？特に……不確定要素の多い戦場で……自分の判断ミスで仲間を殺したとしても同じことが言えるのか。」

「あつ……」

ヒロの一言に誰も言葉を返すことができなかつた

「俺達がああMSと戦うことになるらと必ず戦場に赴くことになる。その時に死にたくなければその甘さを棄てるんだ。」

「アムロさん……」

「別に君達が弱い訳じゃない。ただ……殺すのが怖いなら戦場に出な

方がいい。」

「アムロさん……ッ！シグナムさん!？」

なのはの言葉を遮ってシグナムが前に出てきた。

「私達は管理局員だ!!いくら甘いと言われても私達の非殺傷の理念は変わらない。確かに高町が甘いのは認める、しかし彼女が選んだ道だ。いくら上官だからといってそれ以上の罵倒は止めてもらいたい。」

「失礼した、君達の理念を汚したい訳じゃない。ただ…その甘さが自分も仲間も殺す、それだけは覚悟してくれ。」

アムロはそう言うつと訓練場を去った。

「彼の言ったことは正しい。俺も知っている、戦わなければ世界は変わらない……」

刹那は呟くようになるのはに言った

「でも…話し合いで解決できることだって……」

「その間に人は死ぬ」

「だからって…そんな極論で決めつけなくても」

「高町なのは……戦え、おまえ自身の戦いで……」

刹那は自身の世界にいた女性と彼女の姿を重ねていた。

「（マリナ…おまえと似た人間は別の世界にいる。お前は正しいはずだ、そのまま戦い続けてくれ）」

「フフフ…良いわ、良いわ…データが集まる…これでもっと良いデバイスに…研究の価値があるわ…」

……一人空気を読まずにパネルと格闘している女性が我に返ったのは模擬戦が終わってから一時間以上も後のことだった……

戦闘終了後、アムロ、キラ、シャリーはデバイスルームにいた使用して気付いたデバイスの問題を改善するためである

「キラさん、アムロさん実際にデバイスを使ってみて何か感じたことはありますか？」

「僕が感じたのは、空中での姿勢制御の難しさですね。」

「確かに…空中で方向をかえる時のあの硬い動きは、今後の戦闘でネックになるだろうな……」

二人が指摘したのは機動性の問題である、地上を行動するならば問題は無いが、空中ともなるとそうはいかなくなる

魔法での飛行は直線的な飛行がメインであり、緩やかに曲がることはできても鋭角的な飛行はできない。そのため、空中での急転回は一旦停止してから加速又は極端にスピードを落としてゆっくりと曲がるの2通りしかなかったのだ

「空中での姿勢制御ですか……私達の世界ではあの飛行方法が普通なんです……お二人は何か解決するためのアイデアはありますか？」

「……そうだな。シャーリー、例えばMSの技術をデバイスで再現する事は可能かい？」

「……？はい。対象の詳細なデータさえあれば可能ですよ。」

「そうか、それだったらこういふシステムはどうだ……？」

「これって……あなたの世界にもあるんですか……」

「ああ、同じMSがあったんだ。同じシステムがあってもおかしくはないだろ。」

この問題に対してアムロが考えたのは“AMBACシステム”<sup>アンバック</sup>というMSの宙間移動技術を転用してデバイスに同じ環境を作ることだった

「ちょっと待って下さいね……これならシステムを弄れば作れますよ。」

「すぐにでも再現できます。」

このシステムにより一つの問題は解決した

しかし、問題はもう一つの問題である。それは、このデバイスの魔力使用量の多さであった。

本来であれば術者の体内で魔力を練り上げて放出するものを武器に無理矢理流し込んで放出するために一発一発に無駄が多いのである。今後戦う敵がどのような装甲を持っているのかは不明だが、雑魚を倒すために大量の魔力を使っているのはエースクラスの魔導師と戦う前に魔力切れを起こしてしまう。早急な改善が求められていた。

「そう言えば……今日の模擬戦でスバルさん達、カートリッジのよくなものを使用していましたよね？あれを応用する事って出来ないんですか？」

その時、キラが今日の訓練中にスバルがカートリッジシステムを使っていたことを思い出した。

「……それだ、キラ。カートリッジにすれば、魔力の消費量を軽減できる！！」

それを聞いてアムロはこのシステムを応用して新たなカートリッジシステムを作成することを提案した。

「えっと……説明してもらっても良いですか？」

「簡単なことさ、予め魔力を込めたカートリッジを武器のエネルギーとして使うんだ。」

それなら消費を最低限に抑えられるし、飛行やジャケットの精製に魔力を集中できるようになる。」



「でも、このままだとカートリッジがなくなった際に戦うことができなくなってしまう。それでは本末転倒ですよ？」

「それは大丈夫だ。カートリッジの採用はライフル系の武装のみにして、サーベルは自分の魔力で作れば問題はないだろ。」

「そうですね、でもドモンさんは射撃装備が無いですよ。」

キラの言うことはもっともである

ドモンのデバイスには射撃装備が無く、籠手とサーベルのみの装備になっている

「でしたら、ベルカのスタイルと戦い方が似ているので普通のカートリッジシステムを搭載することにしましょう。」

「それと、カートリッジがなくなった時には魔力を自分のリンカーコアから出力できるように調整してくれ。」

「どうしてですか？」

「念のためだ。戦っている最中に使えなくなったら不便だろう？」

「わかりました。調整は任せてください。」

元々のシステムが出来上がっていたために考案から完成までは時間がかからなかった

翌日、完成したデバイスを実装しての模擬戦をする事になった。刹那VSシグナム……二人の“剣士”による戦いが始まった

「ハアア……！」

「ウオオ……！」

キーン！

カキーン！！

辺りに金属音が響いていた

二人の戦いはアムロ達と違って接近戦が主体となった

飛行できない刹那の為に陸戦のみの戦いとなったがこの二人の戦いに、地上も空中もなかった

「刹那……と言ったか？なかなかやるな。」

「……それは、貴様もだ。」

剣士の戦いの基本は一撃必殺、二つの閃光は戦場の中心でぶつかり合い鏝迫り合いの格好になった  
その後一旦距離をとった二人は近づくこともなく離れることもなく等間隔を保っていた

「エクシア……ライフルモード！」

《OK! Rifle Mode》

刹那が武器の性能を試すためにライフルで牽制しながら一旦離れようとした

「甘いな！」

「……………チツ！」

しかし、シグナムはそれを許さなかった

不規則的な動きと巧みな剣裁きで再び刹那に詰め寄ったのだ。また罅迫り合いの格好になった

「どうした？貴様はこの程度か……………刹那！」

「……………ッ！舐めるなあ！！！」

《GN Dagger》

「…な、何？貴様、その左手の剣は一体なんだ？」

しばらく二人の力は均衡していたが突然シグナムがよろけた。理由は刹那が左手に持っていた短剣である

「この剣か……………この剣は俺のデバイス“エクシア”に装備されたセブンスードの内の一本だ……………」

「セブンスード……………ソード？」

「ああ……………その名の通り、七本の剣を使いミッションをこなす、それが俺の戦い方だ……………！！！」

「フ……おもしろい！」

刹那のデバイス、エクシアは元々刹那の乗っていたガンダムを基にして作成したものである。エクシアの開発コードは“ガンダムセブンスソード”と言う

そのため、デバイスのエクシアにも複数の剣が装備されていたのだ

「ハアア！」

キィーン！

シグナムが突っ込み切り上げると、刹那の手から短剣がこぼれ落ちた

「なかなかやるな。……だが！」

《GN Long Blade& Short Blade  
……Down Load》

「行くぞ……！」

刹那は大小二つの剣を取り出しシグナムに突っ込んでいった

「クツ……手数が多すぎる！一体何本……ッしまった！！」

不意に刹那が小さい方の剣を投げつけた

興奮していたシグナムは避けきれず、腹に直撃した

刹那は近接武器の数でシグナムを圧倒していた。直撃を受けたシグナムだったが致命傷にはならず膝をつくことはなかった

「面白い……面白いぞ、この愉快的気分は久しぶりだ！！  
久しぶりに全力で戦える！」

そう言うと彼女は自身の愛剣レヴァンティンにある指示を出した

「カートリッジロード」

《jawohl! cartridge load》

彼女がそう呟いた瞬間に剣から葉莢が飛び出した  
刀身から炎が噴き出し魔力が増大した

「この勝負は俺の勝ちだ。素直に負けを認める」

「ほう？……これが負けている人間の顔に見えるのか……」

彼女が立っているのは最早自分の意志ではなくなっていた

「あゝあ、シグナムのスイッチが入っちゃったよ」

「ああなったら誰も止められないもんね。」

それは、自身の体に流れるバトルマニヤ戦闘狂の血が倒れることを許さなかった  
のだ。

「……それがお前の本気か？」

「ああ……。だが、覚悟するのだな……私を本気にさせたことを！  
！」

シグナムが刹那から離れた距離で構えた

「喰らえ!!」

「な……速い!」

刹那の隣をシグナムが横切った

「……ッ! 掠っただけで、この威力だと……?」

「まだまだ行くぞ!!」

「……チイツ!」

カートリッジを吐き出し炎を纏った剣の威力は絶大だった。

「グハツ!」

斬り結んだだけで刹那のジャケットは焼け焦げ、鏝迫り合いの格好を維持するだけで精一杯だった

「どうした? おまえの本気はそんなものか?」

しかし、そこで予期していない事が起きた

『Time up』

「何ッ!」

「……………」

……二人の前に表示されたのは時間切れを表す画面だった

「時間切れか…面白かったぞ、また手合わせを願いたい。」

「考えておく。」

刹那とシグナムは互いに一言ずつ声を掛け合い、その場を去った

「うーん、デバイス自体の性能は問題ないみたいだけど……もう少し、射撃戦のデータが欲しいかな？」

そのような結果が出たためにシャーリーは問題の改善のために再びデバイスルームにこもってしまった

その日の夕方、なのは、フェイト、アムロの3人は隊長室に呼び出されていた

「高町なのはは一等空尉です。」

「フェイト・T・ハラOWN執務官です。」

「アムロ・レイ二等空佐だ。」

「入ってええよ。」

「どうしたの、はやてちゃん？」

「実はな……新部隊についてのこと何やけど……」

「どうした？何か不都合なことでもあったのか？」

「いや、そうじゃなくてな……。もし良かったらやけど、ここに呼んだ3人に部隊の小隊長をやって欲しいんよ。」

「小隊長？別に私はいいけど……なのは達はどつするの？」

最初に答えたのは、フェイトだった。

「俺は別にかまわないが……」

「私も良いよ！」

「ほんまに！……ありがとうな……。では、3人には後ほど正式に辞令を出します。……そんなワケで今日はこれで解散！」

内容は新部隊の設立の件、これは三者三様の答えだったが全員が小隊長の職に就いても言いというものだった

新部隊設立までの僅かな時間だが、戦士達に休息が訪れた



新たな誓いは過去との決別を……  
新たな結末は未来への道標……

I E N D I

## 第六話 機神出撃

翌日、ヒイロはパソコンの画面と格闘していた

《エラー、魔力接続に問題発生》

「ム、これも駄目か……ならばこれで……」

《エラー、神経接続系に問題発生》

「これもか……」

自分のデバイスであるウイングに“ある機能”を搭載するためであるそれは、“領域化及び情動域欠落化システム”通称「ゼロシステム」彼は、かつての愛機に搭載されていたシステムを自身のデバイスで再現しようとしていたのだ

《マスター、一度終了しましょう。これ以上はマスターの戦闘に支障が起きます。》

パソコンに向かってから数時間、それまでに作成したプログラムのパターンは全部で106通り、しかし結果は全てエラー  
現時点でヒイロは自らの考えついたプログラムを全て出し切ってしまった

「……やはり、現時点ではゼロシステムの再現は無理か……。ならば、今はデバイスの最適化を最優先事項とする……」

《ですから……勝手にして下さい。》

ヒイロは新たな問題について考えるよりも目の前に迫っている問題を解決する方が先と判断し自身のデバイスの最適化をするように努めた

一方、ドモンはデバイスに搭載されたベルカ式カートリッジシステムの稼働実験をするためにシミュレーターを使用してガジェットと戦っていた

「ハアア……！トオオリヤアア……！」

彼は、なのはとフェイトの監修の下で目の前にいるガジェットを次々と破壊していった

バーンッ！！

「次！」

ドーンッ！！

「甘いッ……！」

「……… 凄い！カートリッジを使わないで拳だけで………」

「ドモンさん……… 強い………」

ドモンは肘打ち、裏拳、正拳といった通常の格闘技のみでガジェット達と立ち回っていた

彼の戦闘力は圧倒的すぎた

「でも……あれじゃあ実験にならないわよ……」

「そうだね……じゃあ、“アレ”出しちゃう？フェイトちゃん……」

「そう……だね……なのは。」

そう判断した2人は“あの機体”を投入する事にした

「ほう……どうやら、漸く骨のあるやつが出て来たようだな。」

“ガジェットドローン？型”

かつての事件でFWメンバーの前に立ち塞がった巨大な機兵

「ハッ……」

『……………』

しかし、通常の格闘では傷一つつかず魔力弾もAMFで防がれてしまふ

「クッ……流石に固いな！……ならば！」

《All Light………Cartridge Load!》

この機体を前にして、ドモンはようやくカートリッジをロードした

「俺のこの手が光って唸る！貴様を倒せと輝き叫ぶ……！」

その瞬間、ドモンの右手から魔力が溢れ出し、彼の手が光り輝いた

「…何……あの光？」

「必いいつ殺！シャアアアイニング……フィンガアアー！！」

「……………！！」

……………ドッカーン！！

ドモンは自身の愛機の必殺技である“シャイニングフィンガー”をガジェットにぶつけたのだ

《Finish!》

その一撃の負荷に耐えきれなくなったガジェットはいとも簡単に爆散した

「どうした？もう終わりか？」

「……………なのは」

「うん……………凄いね……………フェイトちゃん……………」

ドモンの格闘戦の強さに2人はただ驚くだけだった……………

「……………何処だ？」

「こういつ時は、地図……！……………読めない……………」

その頃、ガロードとジュードは市街地で道に迷っていた  
二人の目的地は同じだったのだが、彼らに土地勘などあるはずもなく、また支給された地図も文字が読めないので二人が迷うのは必然だった

「とりあえず…………ガロード、あっちに行ってみようぜ！」

「仕方ない…………か。分かったよジュード！」

気楽な二人だった

「あれ？ジュードとガロード？」

「……………何してんのよ？あんた達」

二人が必死になって道を探していると偶然、ティアナとスバルに出会った

「ちょうど良かった……………2人に連れて行って欲しい所があるんだ！」

「……………はあ？なんであたし達が……………」

「頼むよティファ……じゃなかったティアナ！」

「ティファ？」

「良いじゃん。連れて行ってあげようよティア……。」

「ちょっとスバル……。……分かったわよ、連れて行ってあげれば良いんでしょ……。」

「「ヤッター!!」」

「はあ……。」

4人は歩きながら話していた

「で？なんで地図も読めないのに歩いているのよ……。」

「それは……。」

「それが俺の生き方だからさ。」

「格好いいじゃん!!」

「ガロードがバカだってことは良くわかったわ。ほら……着いたわよ。」

二人の案内で彼らは目的地……ジャンク屋に着くことができた

「ここで良いんだよね？」

「ああ、2人共ありがとう。」

「おーい……早く来いよガロード！」

「分かった、今行く！……それじゃあ、ありがとうな……」

「いらっしゃいー！」

「こんちわ！、何か良いものない？」

「おおッ、お客さん達この店は初めてだな？」

「沢山買っからさ、まけてくれよ？」

二人の目的はジャンク屋の店長と仲良くなり、独自の情報網を作るという全く同じものであった

「また来いよ！」

「ありがとな、バンダナの兄ちゃん！」

「ふう……なんとか、目的は達したな……。」



「ああ……此処まで来るのに色々あったからな……」

「でも、俺は意外と楽しかったな……」

「俺もだぜ、ガロード……」

似たようなことを考え、辛い道中を共にしてきた二人には友情が芽生えていた

「じゃあ……帰るか。」

「そうだな、ジュード……。ッ!?何だ?」

二人が隊舎に帰ろうとしていた時、不意にアラートが鳴り響いた  
部隊から全体通信が入ったのだ

「こちらロングアーチ、ミッドチルダ東部地域に機影多数。現地の  
局員が応戦しています。」

内容は自分達に関係する可能性のあるものであった

「急ぐぞ、ガロード!」

「おう!」

二人は急いで隊舎に戻った

隊舎 司令部

「今、戻ったぜ!!」

「俺達はどこにいけばいい。」

急いで隊舎に戻った二人だが

「あゝ、二人は待機してて。出撃の必要は無いから。」

「「は?」」

二人は暫く固まっていた

「は、はやてさん?こんな時に冗談じゃないよね?」

「私は戦闘中に冗談は言わないで。とりあえずそこに座って待機」

「……………はい?」

もう二人に考える気力は残っていなかった

「とりあえず座りな」

「あ、カミーユさん…」

「アムロさんの判断だ。勝手に動くとも部隊が危険になるからな。」  
「なるほど……」

落ち着きを取り戻した二人はとりあえず椅子に腰掛けた

現場にはなのは、アムロ、刹那の三人が向かうことになった

「こちら、高町なのは。目的地点に到着しました。」

三人が現場に到着すると、案の定MSがいた

「あれは……ザク？」

その姿を見たアムロは驚愕した

目の前にいたのは一年戦争の時の機動兵器、“ザク”だったのだ

「あんなに沢山いるなんて……」

「少なく見積もって20機……」

「一人最低6機落とせば良いだけだ……行くぞ!!」

「了解した、刹那・F・セイエイ、目標を……っ!!」

三人がそれぞれの武器を構えザクに向かおうとしたとき、黒い閃光が突然、刹那を連れ去った

「…………刹那!!」

「刹那君!」

二人はすぐに刹那の援護に向かおうとしたが目の前にいるMS達によつて阻まれてしまった

「クツ…………邪魔だ!」

「待つててね…………刹那君」

二人は刹那を助けるためにMSを全滅させることを優先させた

刹那は平原地帯に連れてこられていた

「11のっ!…………離せ!!」

「……………!!」

「ちっ…………早く戻らなければ…………ツ!？」

拘束を振りほどき、仲間の下に戻ろうとしたが、目の前に現れた敵をみて足が止まってしまった

「馬鹿な…………なぜ、貴様が?」

「久しぶりだな少年!!私に気が付かなかったのか?そんな事はど

うでも良い……私と一曲踊ってもらうぞ。」

彼の前には赤い閃光を放ったサーベル状のデバイス、サキガケを左手に持ち、顔に仮面を付けた金髪の男、Mr・ブシドーことグラハム・エーカーが立っていたのだ。

「クツ……刹那・F・セイエイ、目標を駆逐する!!」

剣を交わし、心を交わし、人は前へ進む

銃を撃ち、信念を撃ち、人は世界を巻き戻す……

過去か未来か……関係無い……

— E N D —

## 第七話 武神襲来

「クツ、敵の数が多い。ツ！危ない……！」

「え……きゃあ！」

アムロはなのはの真上に光線を放った

「……………！」

光線の先にいた機体は爆散した

「……………危なかったな！」

「あ、ありがとうございますアムロさん」

「気を付ける……。まだ敵はいるからな。」

「はい！」

刹那がグラハムに連れて行かれた後、アムロとなのはは周囲を囲む大量のザクと戦っていた

「このっ……！」

アムロはライフルを連射し、なのはの元に敵が近付かないように攻撃を続けていた

「行くよ！レイジングハート！」

《All right!!》

なのははアムロの援護を受けながら、ディバインバスターで敵を一掃しようとしていた

「まだいるのか、無駄な戦いだってことが何故わからない。」

しかし、敵とこちらの間で実力差はあったが数が多いために二人は苦戦していた

「レイジングハート、全力全開で一気に行くよ！」

刹那を助けなければいけない

その気持ちがあるのはを焦らせていた

《マスター、あなたの体では危険すぎます。未だに本調子ではないのに全力を出したらマスターの体は今度こそ壊れてしまいます》

普段であれば彼女と共に無駄をするレイジングハートでさえも止めようとしていた

それほどに彼女の体は傷ついていた

「なのは、無駄はするな。こいつら程度ならば俺一人でも十分だ。」

「でも…そんな事言っていたら刹那君を助けられません!!」

「ならば命令だ、無駄に力を使うな。」

「……………了解……………」

アムロの命令になのはは従わざるを得なかった

「（しかし……………妙だな、こちらを潰すにしては戦力が少なすぎる…）」

アムロは戦術的な違和感を感じていた

戦いは果てしなく続くというのに……………

「そこだっ！」

「甘い!!」

一方、刹那はグラハムと斬り結んでいた

「どうした少年？太刀筋が乱れているぞ!!私との闘いに集中したまえ!!」

「クッ……………そんなことをしている場合じゃない!……………俺の邪魔をするな……………」

本来、二人の実力は互角だったが、刹那は負けていた

「そうだ、これこそが闘い!敗北し、生き恥をさらし、世界を越えてまで君を追いかけてきた甲斐があった。」



なぜなら、グラハムは純粹にガンダムとの“闘い”を楽しみ、刹那と斬り結ぶことだけを考えていた

「クツ……GNダガー！」

《All right、GN Dagger》

「そのような付け焼き刃で……」

しかし、刹那は仲間の下に戻ろうとしていたが為に勝利を焦り技が大振りになってしまっていたのだ

「これで終わりか少年……？」

グラハムが刹那を少しずつ追い詰め、止めを指そうとした

ヒュッ…

「魔力弾！？……なるほど管理局員か……」

そのとき、二人の前に三人の局員が現れた

「我等の舞踏会を土足で踏みに行るとは……命まではとらんが……しばし、眠っているオ……」

「なに……？うわああ……」

近付いてきた一人を受け流し

「何だと……このっ！」

「遅いなー!!」

「グハツ……」

後ろに回り込んだ一人を袈裟懸けに斬り伏せ

「後ろがから空きだ！」

「私の殺気を感じられないとは……未熟だな！」

「ぎゃああ……」

返す刀で最後の一人を斬り捨てた

「この世界の人間はこんなものか……これならば本気を出すまでもない。」

闘いの邪魔をされたグラハムは局員を次々に圧倒していった。

「今だッ!」

《魔力を全面に散布します》

「逃げるのか!? 少年! ……」

「貴様の相手をしている暇はない。」

しかし、僅かだが隙を生み出してしまい、その隙をついた刹那はグ

ラハムを振り切った

「フツ……まあいい、これで確信した彼と私はやはり運命の赤い糸で結ばれている。」

グラハムはこちらの世界に彼が……刹那が来ていたことに歓喜し狂喜の笑みを浮かべていた

「このっ……ふう……もう敵はいないな。」

「でしたら、早く刹那君の所に行きましょう。」

一方、アムロとなのは最後の機を倒し、すぐさま、刹那の元に行こうとしていた

《待つて下さい、敵の反応です》

《………正確な数、不明………来ます。》

しかし、敵がそれを許す筈が無かった。突然10機程のザクが魔法陣から現れたのだ

《数機、先程とは別の機体反応》

その中にはアムロが見たことのないトサカの付いたMS、“ジン”が混ざっていた

「新型…あの敵もアムロさんの世界の機体ですか？」

「いや……違う。一体どんな機体なんだ？」

『アムロさん、なのはさん聞こえますか？』

見た事の無い敵を前にして困惑している二人の下にキラから通信が入った

「キラくん、どうしたの？」

『その敵は僕の世界の機体でジンという量産機です。』

「そうか……それでキラ、あいつの特性は、武装は？」

『あの機体は射撃武器の他に接近戦用の重斬刀という刀を携帯しています。それに機動力も高いので、接近戦に気を付けて下さい。』

「接近戦か……厄介だな。」

「でしたら、僕もそちらに向かいます！」

「了解した！頼むぞ。」

キラがジンのことを説明し、現状を確認した結果、彼が援護に来ることになった

しかし、安心する事はできなかった

敵の増援はさらに増え続け数は50を超えていたのだ。このままでは埒があかない

「あの……アムロさん、キラくん聞いて下さい。一つだけ作戦があります……」

なのはある作戦を考えた

「……………というのですが……」

それは至って簡単なものであり、敵を中央に集めスターライト・ブレイカーを叩き込むと言うものだった

「そうか…それなら確かに現状を打破できるな。」

しかしそれはお世辞にも作戦とはいえないものだった

しかし、簡単な物だけに威力も高く確実であり、それ以上に有効な作戦は考えられなかった

『ですが、僕がそちらに到着するまでどんなに急いでも3分ほど掛かります。その間、なのはさんのチャージまでの時間はどうやって稼ぐんですか？』

「なに、簡単なことさ……俺が少し頑張ればいい。」

なのははアムロとキラに作戦を伝え、アムロはキラが援護として到着するまでの3分間、なのはの護衛として一人で戦うことになった

「クソっ……………急いで戻らなくては……………」

一方で刹那はグラハムを振り切りなのは達の下に戻ろうとしていた

《マイスター、敵の反応来ます》

「クソッ、こんなときに…」

《シルエット照合、MS……ザクです》

しかし、敵も簡単に通してはくれなかった。刹那の前にもMS、“ザク”が5機向かってきたのだ

「……………」

「俺の……邪魔をするな!!」

刹那は仲間の下に向かうため、刃を向けた

「GNビームサーベル!!」

《OK GN Beam Saber》

一機のザクが刹那に向かい、残りの四機も後から魔力弾と実体弾の混合したマシンガンを撃ち、援護していた

「…………甘い…」

刹那はマシンガンの弾幕をかいくぐり、先行したザクをサーベルで両断した

「後ろに下がる……………時間稼ぎか!!」

残りの四機は明らかに時間稼ぎをするように周囲を囲み刹那を追いつめていった

「……………しかし、無駄だ!!」

しかし、刹那はザク一機の方に突っ込み

「セブンスード……………エクシア!!」

実体剣で切断し

「まだまだ!!」

振り向きざまに短剣を投げ一機を行動停止に追い込み

「これで……………終わりだ!!」

最後の二機に大小二つの剣で切りかかりザクを全機破壊した

「ハアツ……………ハアツ……………エクシア、増援は？」

《ありません》

「了解した、急ぐぞ」

刹那は仲間の援護に行くためになのは達の下へ急いで向かった

剣を交えし戦士達は新たな力に恐怖する

刃は死を喚ぶ光を放ち続ける……

— E N D —



## 第八話 単眼の機兵（サイクロプス）

一方、元・六課隊舎でキラがアムロに通信を入れているときにそれは起こった。

「この反応は……！はやて隊長、新たな敵の反応が確認されました！」

別地点でまた敵が観測されたのだ。

「……！？ほんまか？それで……数は？」

「それが……多すぎてハッキリとした数が分からないんです……」

「……そうか。なら仕方ないな……ティアナ、スバル、エリオ、キヤロ、危険だけ行ってくれるか？」

「分かりました！」

「ええっ！！また俺達じゃないの？」

「ジウドー君、あんたは少し落ち着きを覚えた方がええで。」

情報が錯綜しているなか、はやては元・機動六課FWメンバーを観測地点に向かわせることにした。

「（とはいえ……彼女達だけで大丈夫やるか……一応、手は打つといたほうがええな）」

「君、アンタも出撃や。」

「何をすればいい？」

「あの子たちを手伝ってあげて。」

「……………了解した」

そう言うと　は出て行った。

観測地点に向かうとその光景はまさに地獄だった。

「うっ……………！こ、こんなので……………」

目の前に散らばる“モノ”はついさっきまで人間だったのがわからないくらいに無残なものに姿を変え、今はもうただの肉塊となっていた。

「ヒ、ヒドいよ……………！」

血の匂いが充満しているために嗅覚は麻痺し、耐性のないキャラは立っているのがやっとだった。

「しっかりしなさい……………！スバル、キャラー！！」

「だけど……………ティア……………」

「バカ！……私達がすっかりしないともつと被害が大きくなるのよ！！」

「ッ……！！分かったよ……ティア」

しかし、立ち止まっているわけにはいかなかった。

「ティアナさん……敵が動き出しました！」

「分かったわ……エリオ。それじゃあみんな……まずは敵の出方を見つつ、データを集めましょう。」

目の前には単眼の兵器達、ザク、ジン、リーオーが60機以上いたのだ。

「お前たちが……お前たちがこんなひどいことを……」

「ちよつ、ちよつと……待ちなさいスバル！」

「絶対に許さない！！」

ティアナが作戦を考える前にスバルは先行してしまった。

「マツハキヤリバー！！」

《OK！！ cartridge load！》

スバルの目は普段の緑色から戦闘機人の黄色へと変化していた。

「砕ける！リボルバー……ナツクル！！」

「……………！？」

バチツ……………バチバチ……………ドカーン！

スバルがりボルバーナツクルで機体を叩くと鋼の体はいつも簡単に砕け散った……………

「……………そうか！スバルの攻撃なら、相手にダメージが与えられるのね」

「ハアア……………！もう一撃！！」

スバルのIS、インシュレイトスキル“振動爆砕”は機械の体を持つ兵隊には有効なことが判明した。

「二人とも！スバルを援護して！！」

「了解！！」

「ハアアアアアツ！！」

スバルは足に着いたローラーで地を蹴り、敵の前に迫っていった。

「キャロ！ブースト掛けて！！このまま一気に突っ込む！」

「わかりました」

ティアナは先行するスバルを上手く操り、MSをけちらしていった。

「クツ……敵の数が多いわ……ッ！きゃあぁ……」

「危ないッー!!」

ガガガツ……ドーンッ！

「大丈夫ですか？ティアナさん。」

「ええ……ありがとう。エリオ！」

しかし、有効な一撃が分かったとはいえ敵は60機を越える大部隊。一体一体にしか攻撃できないスバルのISでは根本的な対処方法とはなっていないかった。

「面倒ね……だったら！！ライトニング！あんた達の出番よ!!」

「はい…キャロー!!、ヴォルテールでこの辺りの敵を!!」

「エリオ君……分かったよ!……ヴォルテール、お願い!!」

『いや……その必要は無い……』

「え……?」

『……撃て。』

《Yes Master! Cartridge Drive!!》

ヒューン……バァン!

一機一機に苦戦していると上空から光線が飛来した。

「ヒイロ……あなた、どうしてここに?」

「八神部隊長から……お前たちの援護をしろという任務を受けた……」

「はやく隊長が?」

「ああ……」

「そう……だったら、協力して貰うわよ!」

「任務了解……」

「そのまま一気に攪乱しなさい。」

「……了解」

ヒイロはティアナから指示を受けると下を向き、敵の中心を探し始めた

「ウイング……2発目行くぞ……」

《Yes Master……》

ヒイロはこちらに向かって来る敵の半数を一撃で破壊するとスバル達の援護を始めた。

「ターゲットロック……………排除……………開始！」

カートリッジを3つ使用してヒイロの持つ銃から放たれる光の束は向かってくる敵を完全に破壊していった。その威力はなのはの「全力全開」に匹敵するものだった。

「敵機の減少を確認……………サーベルによる単機撃破に移行する……………」

そう言うとヒイロはサーベルを取り出して突っ込んでいった。

「スバル！ヒイロが撃ち漏らした敵を墜として！。エリオ、そのまま突っ込む！キャロ、ブースト行ける？」

「了解です！！！」

「ヒイロ、聞こえる？私が敵を集めるからそのまま撃ち込んで。」

「……………作戦変更……………了解」

ヒイロの登場で戦況を一気に押し戻し始めた。

ティアナ達がヒイロの援護で形成を持ち直していた頃、アムロは苦戦していた。

「チイツ！流石に敵が多い……………ッそこだ！」

なのはの作戦を成功させるために独りで戦わねばならず長時間耐え  
きらなくてはいけないために、消費の激しいフィン・ファンネルは  
使えずカートリッジももう底を尽きそうになっていた。

「まだ来るのか!？」

「……………」

「クツ……………しまった!」

「……………!」

シュン……………ドカーン!

「……………!?!」

「……………!?!一体…何が……………」

突如、ビームがアムロの目の前のジンを貫いた。

「大丈夫ですか?アムロさん?」

「キラか……………助かった」

キラが援護にやってきた。

《機動性は良好、マスターはこの装備以外では飛行が出来ないので  
注意して下さい》



「ありがとう、ストライク」

装備はエールストライカー、こちらに向かうために機動力の一番高いこの装備で来たのだ。

「まだ行けますかアムロさん？」

「ああ……俺は大丈夫だが、カートリッジが底を尽きそうだ……」

「じゃあ……これを使って下さい。」

「良いのか？」

「はい！」

「助かった！恩に切る」

キラはアムロにカートリッジを渡し、自身も戦いに参加した。

「そこだ！！」

キラの正確な一撃で戦力を奪い

「行け！フィンファンネル……」

アムロの確実な攻撃でなのは守っていた。

「アムロさん、キラ君、チャージが終わりました。射線上から退避して下さい……」

なのはのチャージが完了し、いつでも発射できるようになった。

「了解した！行くぞキラ」

「分かりました！」

《射線上に味方機……ありません。非殺傷設定を解除》

「行くよ……レイジング・ハート！」

《All Light!》

「スターライト……ブレイカー!!」

アムロとキラが射程から離脱し、なのははスターライト・ブレイカー（破壊の星光）を撃ちだした。

「なるほど……」

「すごい……」

その威力は絶対的で、破滅的なまでの力の奔流が辺りの空間を切り裂いた。

「ふう……レイジング・ハート、敵は？」

《確認できません。全機撃墜した模様。》

魔力光が消えたときそこにはもうMSの影はなかった。

「あの……光は？」

仲間の下に向かっていた刹那は圧倒的な魔力の流れを目撃していた。

「あれほどの威力……しかし、悪意は感じられない。決して矛先を向ける相手を間違えて欲しくはないな……」

その光を見て刹那はある兵器を思い出した。

《マイスター、いかが致しましたか？》

神の鉄槌“メメントモリ”彼はあの光が敵の攻撃ではないことを祈るだけだった。

「問題ない。急ぐぞ」

《Yes Myster……》

刹那は光の正体を確認するためにも急いで戻ることにした。

全てを滅ぼす破壊の光……

星々は唱う、光の矛先を彼方に向けて……

破壊の矛先は貴方に向けて……

I  
E  
D  
I

## 第九話 堕ちた正義

「刹那君!!!」

「……刹那！大丈夫だったか？」

アムロ達と刹那は合流した。

「ああ……問題無い。それより、先程の光は？」

「なのはさんの攻撃です。」

「キラ………そうか。（とりあえず、敵の攻撃ではなかったということか……。だが、あの威力………力に溺れることがなければ良いが）」

光の奔流がなのはのものである事を確認し、敵の攻撃でないことに安堵した。

《マスター!》

「どうしたの？レイジングハート」

《急速に接近して来る反応があります………数は1》

「そんな……このタイミングで……。それに、この魔力量は………」

しかし、運命とは残酷なもので彼らの下にレイジングハートから敵

襲の言葉を告げられた。

「みんな、新手が来ます。気をつけて下さい！」

「新手……？数は……？」

「一体ですが……魔力量が今までの敵とは桁違いです！」

桁外れの力、それを驚異と見るには十分だった

「クソツ、こんなときに……」

体力も魔力も限界は近かったが戦わないわけにもいがなく、4人は再び構えた。

「き、君は……」

「どうして……お前が……キラ……」

「……………アスラン」

目の前に現れたのは、キラの親友にして幼なじみ、“アスラン・ザラ”だった。

「キラ……アイツを知っているのか？」

「はい……彼は僕の親友です……」

「そんな……」

「キラ……（アイツもこっちに来ていたのか……だが何故、アイツが“あちら側”に……）」

アスランは友に再会できた喜びと再開してしまった後悔に挟まれていた。

「キラ……悪いことは言わない。俺と共に来い！」

アスランはキラに仲間になるように言った。

「アスラン……君こそ僕達と一緒に来るんだ！」

「いいかげん目を覚ませキラ！お前が所属している組織は……管理局は腐っているんだ……だから、俺達の手で正さなければならぬ……なぜ、それがわからない！」

「アスラン……君が言うことは確かなのかもしれない……だけどそれだけで敵になるのは間違ってる！」

しかし友の誘いをキラは頑なに断った。

「クツ……言っても分からないなら、力づくで……俺が倒すしかないじゃないか！」

アスランはそう言うと銃を構えた

「…………やるのか？」

「キラ君はやらせないよ！」

アムロとなのはが構えた。

「邪魔だ…………どけええ！」

「向かってくるならば容赦はしない。」

刹那も剣を構え応戦しようとした。

「みなさんは手を出さないで下さい！彼は…………僕が止めます！」

キラは仲間に出しは無用だと告げるとアスランの方に向かった。

「キラアア…………！」

「アスラン！」

キーン！

アスランとキラの戦いが始まった。

カン！…………カン…………キーン

「クウツ…………」

ガキン！



「このっ!!」

二人は武器をぶつけ合い斬り結んだ。

「そこだ……!!」

「甘い!!」

アスランはそのままキラを横切り、ライフルを連射

「防御を!!」

《All right》

敵が突っ込んでくると分かるとキラはすぐにシールドを取り出し防御した。

「どうした？動きが鈍いぞキラ！」

最初のうちは互いに均衡していたが、キラに疲れが見えてきた。

「クツ……魔力の量が残り少ない……」

50機以上のMSを相手にした後の戦いである、疲労しているのは当然だった。

ゴォォ

一方、FWメンバーの下にも大きな魔力が近付いていた。

「ティア、何か来る！」

「……このスピードは…早い……？」

恐らく管理局最速であるフェイトの最高速を超えていた。

「……ッお前は！」

「久し振りだな……ヒロ・ユイ……」

現れたのは……

「ゼクス……マークス」

彼が目の前に立っていた。

「ゼクス!! 貴様はなぜ戦う？」

ヒロはゼクスが何故戦っているのかを聞いた

「決まっている……この世界にリリーナの望みである完全平和を実現するため……」

「完全平和だと……？」

「そつだ……だからお前来い！」

「…………断る」

「そうか…………ならば、貴様は私の敵だ！」

「…………クツ！」

ゼクスは完全平和のために戦っていると言ったが、ヒイロは気付いていた。

「（完全平和だと…………？無人兵器によって多くの無駄な血を流す…………そんなやり方をあいつが…………リリーナが望むわけがない！）」

ヒイロは早期決着を考えた。

「では、尋常に勝負！」

「…………クツ！行くぞウイング…………」

ヒイロとゼクスの戦闘はキラとアスランの戦いとは違う迫力があつた。

「ハアアアアツ！！」

「甘いぞ、ヒイロ」

二人の戦いは目で追えない

「何…………これ…………」

「見えない……」

空中での高速戦闘は

「甘い……」

“敵を死角に入れないこと”

「そこだッ!!」

“敵の死角に入ること”

「諦める……」

「変わらないな……その戦い方は……」

これが基本だ

「流石だ……ヒイロ!」

「……」

しかし、二人には関係なかった

「そこだッ」

一瞬で動作が変わる

「嘘でしょ……あんな動きじゃ体が壊れちゃう。」

動くだけにしか見えないが違う。

「早い……………ッ！！危ない！」

一瞬に見える動きでも音速に近い空間では緩慢になってしまっ。

「キャアッ！！」

ミスが死を招く

「仲間のことはお構い無しか……………」

「今は構ってられない……………」

その空間は人を寄せ付けなかった

「ついてこれるか？」

「良いだろう……………」

ヒロがゼクスを引き離そうと高機動で離脱していった。

「ヒイロッ！！」

スバルは離脱していったヒロを追いかけてようとした。

《待って下さい、この反応……………敵、来ます》

「また!？」

しかし、敵の出現が追いかけることを許さなかった。

「ティア!！」

「わかってるわよ!！」

スバルとティアナはそう言うと敵に突っ込んだ。

「ティアナさん!？」

「エリオ、キャラ!！あなた達はそこで待機、エリオがキャラを守つて、キャラはブーストで援護。」

「わかりました……行くよ、キャラ!！」

「うん!！」

それぞれの戦いを終わらせるために全員が向かっていった。

「敵の戦力の割り出し急いで!！」

「は、はい!！」

「(一体……敵の戦力はどれくらいなんや……それに、奴らの目的は……)」

その頃、管制室は情報の収集に追われていた。

「各地区で局員が応戦中」

敵対勢力の保有戦力が不明なためにまた敵が現れるとも限らないからだ。

「敵機の反応、依然増加中」

そして彼らも焦っていた。

「ちょっと……待機命令はまだ解除されないの？」

「落ち着け、ジュードー！」

「カミーユさん、だけど……!!」

援護に行きたいがその間に敵がどこかに現れるとも限らない。

「俺達が慌ててどうする？もう少し周りを見るんだ!!」

選択肢は“待機”の一択しか無かった。

「このまま戦いが終わってくれれば良いけど……」

「はやて隊長……」

彼女達の初めての戦争  
死を体験し生を感じる

初めての戦争は彼女達を成長させる……

しかし、戦争はまだ始まってなどいなかったのだ……

I E N D I



## 第十話 鳴らされた戦鐘（ゴング）

「クウツ……………」

「キラアア ……」

アスランとキラは戦い続けていた。

「まだまだ!!」

「いい加減諦めろ！これ以上は持たないだろ」

「まだまだ……………終わってなんかない!!」

既にキラは満身創痍、アスランの勝利は決まっているようなものだった。

「キラ……………これで、終わりだあ……………!!」

「……………クツ！しまっ……………」

アスランがキラにスキュラを放ち戦闘が終了しようとした。

「何ッ!？」

しかし、戦闘に予想外の事態が起きた。

「デイベイーン……………バスター!!」

「……………！？邪魔をするのか！」

「大丈夫？……………キラ君」

「……………悪いが、その男をやらせる訳にはいかない！」

なのはと刹那が戦闘に介入したのだ。

「なのはさん……………」

なのははアスランの攻撃を間一髪で防ぎ杖先を向け

「ミッションプランにお前の単独行動は入っていない」

刹那はキラとアスランの間に割って入りアスランに刃を向けた

「邪魔をするのか……………ならば！」

アスランはなのはに向けてサーベルを構え突っ込んだ。

「何ッ！？」

しかし、突然アスランの目の前を一筋の光が横切った

「アムロさん……………」

「……………」

《Fannell Stand By!》

アムロは無言でアスランに狙いを定めていた

「皆さん……………一体どうして?」

「どうして……………?そんなの仲間だからに決まってるよ!」

「それに……………俺達だけでは無い……………」

「え……………?」

「ここにいるみんなが……………私達の部隊のみんなが、キラ君の仲間だからね!」

「皆さん……………わかりました。後は任せます」

三人の突然の介入に困惑していたキラだったが、彼らの言葉を聞き彼らに戦闘を任せた……………

一方ゼクスとヒイロはもといた場所から離れたエリアに来ていた。

「ヒイロ、どこまで行く気だ!」

彼等のスピードは最早常人の域を超え、亜音速に達していた。

《マスター、これ以上のスピードは体が持たない》

「……………問題無い」

どの様な力を持った人間でも彼等のスピードを目で捉えることは不可能であり、彼等も目ではなく自身の経験を頼りに敵を追っていた

「ゼクス……………もう一度聞く……………貴様は何故戦う？」

ヒイロはもう一度戦う意味を聞いた。

「もちろん……………完全平和のためだ！！何度も言わせるな！！」

しかし、ゼクスは変わらない意志を提示した

「いい加減に決着を付けさせてもらおうぞ」

ゼクスはとどめを刺すように突っ込んできた。

「……………そうか。」

ヒイロは戦いの意思を確認した。

《Barrier jacket off……………》

すると、突然バリアジャケットを解いた。

「……………！？なんのつもりだヒイロ？」

不信に思い、停止したゼクスに一瞬だか隙ができた。

「お前も甘いな……」

《All right!…… Buster Rifle…… Sho  
Ot!!》

ヒロは一瞬の間を見逃さず、バスターライフルの一撃を叩き込んだ。

「これで戦闘力は削がれた筈だ……」

「チイツ……！今日はここまでか？……さらばだヒロ……次の機会までな……」

「次の機会だと……？」

直撃を受けたゼクスだが、決定打になっていなく、すぐに離脱した。

《マスター、彼女達の所に戻りましょう》

「任務了解……（ゼクス、貴様は何の為に戦っている）離脱する。」

「ウオオ……！」

「クウツ……」

アスランとなのは達の戦いは魔力のぶつかり合いだった。

「ハアア……！」

「シューート!!」

アスランがスキュラを撃ち込めばなのはも砲撃を撃ち返しその際に刹那が切りかかる。

「……………そこっ!」

「甘い!!そこだッ!」

しかし、ここで誰もが予想できないことが起こった。

「チイツ……………次だイージス!」

《Error……………!!》

「クツ……………魔力切れか……………」

魔力切れ、高火力の砲撃を撃ち合っていれば魔力が尽きるのは当たり前のことだった。

「もう止めるんだアスラン!」

「どうやらこちらが圧倒的に不利のようだな……………」

「わかっているなら……………投降して下さい、今なら罪は軽いはずですよ!!」

幸いこちらにはアムロのカートリッジが残っていたが、既にアスランはそれを理解し状況は自分が不利なことを悟っていた。

「それはできない!」

「そんな……」

「……キラ……もう一度だけ言う!管理局は腐っている、俺と一緒に来て世界を変えよう……」

なのはが一旦離れたとき、アスランはもう一度だけキラに言った。

「アスラン……君の言うことがたとえ真実だとしても、僕は君と行くわけには行かない……」

しかし、アスランの問いかけに対してキラも言った。

「戦いで変える未来なんて間違ってる。それに管理局には仲間が、友達がいるんだ……!」

「……クツ!キラ……」

「逃げるのか?……追撃に移る」

「止める刹那、俺達に余力はない。」

「……了解」

アスランはキラの意思を確認し、その場を離脱した。

「覚えているキラ……裁きの邪龍<sup>ファブニール</sup>は動き出した！」

「裁きの邪龍……ファブニール……帰還しましょう。ここにいる意味がありません。」

彼らが戦う言葉を最後に言い残しながら……

「キラ君………」

「いいんです。覚悟はあります、でも………」

「ならば戦え………」

「刹那………?」

「戦え……お前にしかできない、お前だけの戦いを………」

その言葉が彼らの運命を決めることを誰も知らない……

戦闘が終了し、一夜明けた。

「（ファブニール……恐らく今回の事件はヤツらとの対決は避けられへんやろな……）」



今回の戦闘ではやては特殊機動兵器を所有する大規模次元犯罪者達との全面対決になることを痛感した。

「（現在計画されている新部隊の設立を急がんと……）」  
それが彼女の出した結論だった。

「（せやけど、問題は部隊で使う次元航行艦やな……一応、駄目もとでクロノに聞いてみるか……）」

しかし、設立を早めてしまつと次元航行用の艦がない。  
新たな問題だった。

「なあ……クロノ？」

はやてはクロノに連絡を入れた。

「どうした……はやて？」

「いや……実はな……」

「どうした？歯切れが悪いな……」

「いやな……どこからか次元航行艦を調達できないか？」

「無理難題だな……」

「やっぱ流石に無理か？」

しかし、クロノの答えははやての予想を裏切るものだった。

「いや……すぐに用意しよう。」

「やっぱり無理か………は？」

「アースラに新型のエンジンを搭載し戦闘艦と同レベルまで仕上げ  
て新部隊に回す。それで良いんだろ？」

「出来るのか？」

「かなり無茶だけどね……アースラだってロートル艦だ、新型艦レ  
ベルに仕上げてても戦力には程遠いぞ」

「そんな事、構わないで。あれば何だってええ。」

「そう言ってくれれば助かる」

次元航行艦が手に入り、しかもその艦は自分達の一番愛着があるア  
ースラ、嬉しい限りだった。

「ほんまおおきに……」

「はやて……」

「ん？なんや？今なら出血大サービスで頼みを聞くで！！」

「……フェイト妹達を頼むぞ……！！」

「……ああ、任じときー！」

闘いの戦鐘は鳴り響く

始まりの時間が近づいていた……

— E N D —

## 第十一話 邪龍殺しの戦士

「よし……みんな集まったな」

数日後、前線メンバーが隊舎の会議室に集められた。

「突然みんなを集めてどうしたの、はやてちゃん？」

「実はな……前に言った新部隊が正式に稼働することが決定したんやー！」

はやてが正式に部隊が稼働することを告げた。

「それでな……部隊のコードネームは………」

「コードネームは？」

はやてが部隊名を全員に言おうとした。

「コードネームは………」

「………」

「………」

「………」

「………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「長い！…長すぎるッ！」

しかし、はやてが部隊名を言うのにもったいぶっていたために、スバルがキレた。

「……………？どうしたんですかスバルさん？」

「触れちゃダメよ……………キャロ……………」

「……………？」

「もう……………スバルはせっかちなあ……………こつというのは溜めてナンボやるっ。」

はやてが突っ込んだ。

「……………違うだろ」

「ああ……………違うな……………それに部隊名はコードネームじゃない、通称だ。」

「クツ……………正論を言われると辛い……………」

スバルに対して愚痴っていたはやてだったが、ヒイロと刹那の鋭いツッコミに一撃で沈められた

「……………ゴホン！気を取り直して……………私達の部隊の名前は“時空管理局外郭新興独立部隊……………通称“ジークフリート”や！」

「ジークフリート……………邪竜殺しの戦士か……………なるほどな……………」

部隊名は時空管理局外郭新興独立部隊

「……………アスラン」

通称“ジークフリート” 邪龍を殺す戦士、アスランの言った“ファブニール”と対をなす存在だった。

「まあ、実際に稼働するのは明日からなんやけどな……………だから、今日は1日休暇にします！」

しかし、正式に稼働するのはアースラを受領してから、そう明日からだ。

「今日はしっかり休んで明日からの準備をしっかりとりますですよ！」

「まあ、そういうことやから……………今日は解散！」

そのため、はやては明日からの本格稼働まで休暇とし、戦いに備えて貰うことにした。

「行きますよ！ヴィータさん！」

「ああ……かかって来い！」

トレーニングスペースでヴィータVSロランの戦いが行われていた。

「行くぞ、！」

珍しい組み合わせの戦いだったが二人には、ある共通点があった……

「効かねえ！」

それは、「防御力」である。

《Jacket damage……3%》

二人にとってそれは譲れない強さであり、負けられないものだった。

「ハアアア……砕ける！アイゼン」

ヴィータがハンマーを叩きつければロランがシールドで防御し

「効きません！……今度はこちらの番です……！」

《All right! Rihle Down load……》

「甘ええ……！」

ロランがライフルを撃てばヴィータがハンマーで弾き返した。

「なんだよ！なよつちいと思ったらギガ強え……」

「ホワイトドールのご加護を！」

ロランは圧倒とまでは行かないが、ヴィータを押ししていた

「まだまだ！砕ける！！」

「え？うわぁ！！」

しかし、ヴィータもその力押しスタイルで、ロランを押し返した

「クッ……キリがねえ！」

「このままではジリ貧ですか……」

しかし、攻撃は急所に入らず互いに決定打を生み出せない、時間だけが過ぎていった

そして……

《TIME UP!》

「！？」

………模擬戦の結果は“引き分け”、互いに決定打を撃ち込めず



に時間だけが過ぎてしまっていた。

「お前との勝負なかなか楽しかったぜ……また、やるうなロラン！」

「僕は遠慮したいです……」

「何だよ、減るもんじゃないなら良いだろ……」

「わ、わかりました……いつかやりましょう……」

「……つたく」

ロランとヴィータは再戦の約束を交わしトレーニングスペースを後にした。

その頃、なのはは屋上にいた。

「はあ……。」

いつもの元気な様子はなく、溜息ばかりついていた。

「私の戦い方が甘いか……」

彼女は模擬戦の際にアムロに言われた“甘さ”を気にしていたのだ。

「私、結構厳しくやっていたつもりなんだけどなあ………ハア……」

なのはは先程よりも深い溜息をついた

「なのは!」

「!」

突然、背後から声が聞こえた。

「……………!」

驚いて振り向くと、そこにはフェイトがいた。

「……………フェイトちゃん」

「どづしたの?」

「ううん、何でもない……………」

なのはは誤魔化そうと必死だった

「何でもないよ!」

「一体何を悩んでいるの……………教えて?」

フェイトはなのはが悩んでいることを見抜き、何に悩んでいるのかを聞いた。

「……………フェイトちゃんにはかなわないね……………」

なのはは正直に自身の気持ち話を話した。

「私は……甘いのかな？戦いには向いていないのかな……」

そんななのはにフェイトは優しい笑顔で答えた

「甘いつて言われても、それがなのはの戦い方なら……最後までそれを貫き通さなくちゃだめだよ。なのははそうやってみんなを守ってきたんだから。」

「……！そうだよね……ありがとう、フェイトちゃんのおかげでなんか元気だよ！」

なのはは笑みをこぼし、フェイトに感謝の意を表した。

「ううん……なのはが元気になって良かった。」

その時のなのはの表情はとても澄んでいて、決意に満ちていた。

「アムロ・レイ二等空佐だ……」

「入っていいですよ。」

「失礼する」

一方でアムロははやての所に来ていた。

「すみませんねえ……せつかくの休暇なのに呼び出してしまって……」

「いや……問題ない。俺も部隊の編成で気になることがあったからな……」

二人の会話の内容は部隊編成のことだった。漂流者が部隊に入り、はやても戦線に参加するのでどうしても部隊を再編成する必要性が出てきたのだった。

「今のところ、決まっているのは2つの中隊に部隊を分けること、その中隊長がうちとアムロさんだということです。」

「それはわかった……しかし」

「ええ……問題はその戦力バランスですね……」

「ああ……」

二人が悩んでいたのは戦力のバランスだ。

「部隊を二つに分けて、更にその中で小隊を2つに分ける。」

「戦力が一つに固まらないように編成する事は至難の業だな。」

「それと、ジークフリートは新装備でアムロさん達の“アームズデバイス”の評価実験も兼ねてます。

既存の魔法使用者との混成部隊も作らなくちゃアカンな。」

二人は小一時間悩み続けた。

「よし……これでどうや？」

「ああ……これなら大丈夫だろう」

【新部隊ジークフリート部隊表】

〔第一中隊“アルヴィト”〕

中隊長 八神はやて

アイシクル小队

小隊長 八神はやて

小隊員

シグナム

ヴィータ

シャマル

ラインフォース？（ツヴァイ）

サンダーボルト小队

小隊長 フェイト・T・ハラオウン

小隊員

エリオ・モンディアル

キャロ・ル・ルシエ

ヒイロ・ユイ

刹那・F・セイエイ

〔第二中隊“スルーズ”〕

中隊長 アムロ・レイ

ギャラクシア小队

小隊長 アムロ・レイ

小隊員

カミーユ・ビダン

ジュード・アーシタ

ドモン・カツシュ

ロラン・セアック

スターライト小队

小隊長 高町なのは

小隊員

スバル・ナカジマ

ティアナ・ランスター

ガロード・ラン

キラ・ヤマト

〔前線FW部隊〕

部隊指揮 ティアナ・ランスター

FWメンバー

ティアナ・ランスター

スバル・ナカジマ

エリオ・モンディアル

キャロル・ルシエ

ガロード・ラン

刹那・F・セイエイ

「戦力バランスは無視することになったが、とりあえず部隊を作る  
ことができたな。」

「ですね……」

「じゃあ俺は休むとするよ、何かあったら起こしてくれ」

「わかりました」

各々の僅かな休日はこうして更けていくはずだった。

『Allah t!』

「これは……?」

『大変ですはやて隊長!突然、膨大な魔力が検知されました!』

「なんやて?場所は……?」

『その……この隊舎のすぐ近くです!』

「そうか……なら、至急前線FWメンバーを向かわせて調査を!」

『了解しました!』

幸か不幸かこの隊舎の近くで感じとられたので、前線FWメンバーを向かわせることにした。

「まさかこんなに早く休日返上になるとはな……」

「ですね……」

彼らの戦いはこれから始まる。

終わりなど見えない……

終わりなど無いのかもしれない……

— E N D —



## 第十二話 「ボレタカケラ」

「……………ここは…どこ？」

少女は漆黒の闇の中を漂っていた。

「…の…む…、…を…く…の…、…の…と…の…、  
…が…に…い…を…せ。」

「……………誰？」

彼女が闇の中をさまよっていると、突然暗闇の向こうから声が聞こえた。

「…の…、世界……………せ。」

「……………」

気がつくくと少女は声の聞こえる方に歩きだしていた。

「助けて……………」

絶えず声は聞こえていたが

「ヤメテ……………」

次第に遠のき……………

「私を孤独ヒトリにしないで！」

やがて……

「そうなたら私……」

消えた

「壊れちゃう！」

少女は息も絶え絶えに何も見えない深淵の先を仰いだ

「どうして……どうして私は一人なの？……答えて、誰か教えて！」

少女は遙か彼方へ声を張りながら叫んだが、答えてくれる人は誰もいなかった。

「いやだ……独りなんてイヤ……」

「…生きる」

「え？」

すると不意に、頭の中で声が響いた……

「お前は廃棄処分になる……御役御免ってことになるな」

「何？この声」

その声はとても優しいものだった。

「…そうか、お前は意味が分からないか。」

「どこにいるの？」

それは……母親のような暖かい声で…

「ならば私から最後の命令だ、……生きる、生きて明日を見つけるんだ！」

「どこにいるの？顔を見せてー！」

少女の聞いた声は頭の中に反響し、暗い闇を少しだけ照らし……一筋の道を作った。

「…さあ、行くんだ。被験体……」

「嫌だ！……あなたも来て……」

最後に聞こえたのは厳しくも優しい父親のような声だった。

「いや…お前の名は……」

「そつだ……私は被験体D……違うー！私は……」

少女の夢は終わり、再び光を見つめた……

FWメンバーは隊舎からさほど離れていない道路沿いを歩いていた。

「ランスター陸士、この辺りはいつも静かなのか」

「ええ……」

幸いこの道は六課隊舎以外に繋がっていないために民間人に被害は出なかった。

「……ランスター、俺達はこの部隊のことや、おまえ達の戦闘スタイルのことを聞いていない……。戦術上のポジションを固定するために少し説明してくれないか？」

「ああ……それ、俺にも頼むよ！」

ガロードと刹那はティアナに質問した

「この前線FW部隊はね……何か事件があった時に最前線で対処に当たる部隊なんだよ！」

その質問にスバルが答えた。

「ちょっと、スバル！聞かれたのはアタシでしょ……」

「まあまあ、ティア……」

「まあ……いいわ。それで、さっきのスバルの説明に補足すると……って、答えになってないじゃない……アタシ達は基本的にこの4人で戦闘していたわ。ポジションはスバルとエリオが最前線で敵を迎撃、アタシが中距離から、指示を出しつつ2人を援護。そして最後方からキャロがみんなのサポートと火力支援って感じね！それと、私のことはティアナでいいわ。」

「なるほど……大体理解した。」

「サンキュー」

ティアナが補足し大体のことを確認していた。

「あのさ……？あたしも2人に聞いていい？」

「ん……？なにを？」

「2人のもといいた世界ってどんな感じなの？」

「……ッ！？」

「どんな世界………か」

スバルは反対にガロードと刹那の世界の事を聞いた。

「……すまない、今は言えない。だが、機会があったら話そう………」

「そっか……。で、ガロードは？」

刹那は答えようとしなかった。

「俺の世界では………」

「みんな、おしゃべりはそこまです………」

「何！？この魔力？」

「押しつぶされそうです……………！！皆さん、前に人が！」

「え？」

彼らの前方に見えたのは少女……………15歳にも満たないような白い肌の少女が路上に倒れていた。

「……………！！」

「（ティファ？……………違うな、雰囲気は似てるけど……………）」

その少女の神秘的な顔だちにスバル、ティアナ、キャロの三人は息をのみ、ガロードは自身の探している少女、ティファ・アディールの面影を重ねた。

「なんだ……………脳量子波が乱される……………」

刹那は自身の脳内に入って来る情報に惑わされていた

「ねえ……………ティア、もしかしてこの子……………」

「たぶんね……………というより絶対よ。」

このエリアは魔力反応の予測中心地から離れていない場所、魔力の正体はこの少女だった。

「そんなことより、この子を隊舎に連れて行こう！」

「待ちなさい、まだ現場の調査が……………」

「そうだね……………分かった、ガロード!」

「……………はあ……………わかったわ、あんた達は先に戻ってなさい。私とエリオ、キャラは現場の調査よ」

「了解!」

そう言うと3人は調査するために辺りに散らばっていった。

「シヤマル医務官、彼女は……………?」

隊舎に連れてきた少女は医務室に運ばれた。

「心配しなくても大丈夫よ。幸い、外傷もないし疲れて眠っているだけみたいだから……………」

「良かった……………」

一同が安堵の声を漏らした。

「でも、彼女の魔力は……………」

「やっぱりか……………」

しかし、安心はできなかった。なぜなら、予想した通り観測された

魔力の正体は彼女だったのだ。

「魔力量は推定SSS+。」

「それはどのくらいだ？」

刹那が質問した

「そうね……はやてちゃんはおろか、ほぼ全ての人間の魔力値を越えているわ。」

解りやすく言つと最強ね……」

「そうか……」

「（まさか、彼女は？ヴィヴィオと同じ……）」

その中ではやては彼女の最悪の可能性を予測していた。

“古代ベルカの王”

つい半年ほど前にあった事件だ、予想してしまうのも無理はない。

「（せやけど……この子の目は虹彩異色じゃあないし……それに……）」

だが、レリックはこちらの手元にあり、“ゆりかご”ももう沈んだ。

「（まさか、奴等か？……いや、決めつけるのは早いし……）」

そして考えられたのはファブニールと名乗った犯罪者集団との関連



だが、関係が見えてこなかったたので思考を切り替えた。

「（じゃあ、スカリエツティの仕業か？いや……新型が出てきた時点でフェイトちゃんを取り調べをしてるし、何よりもわかっているなら脱獄しているやる……てことは、一体誰が……ああもう！！訳が分からん！！）」

ひとまず彼女は思考の迷宮から抜け出した。

「（まあ……情報が少ない今は、考えても仕方あらへん。それよりも問題は彼女をどうするかやな……）」

問題は彼女の扱いだった。

「（彼女、13歳位やろか……報告するとあかんなあ……）」

膨大な魔力を持っているとはいえまだ少女、本来ならば結果を本部に報告し、彼女を引き渡さなくてはいけないのだが、はやてはそれを危惧していた。

膨大な魔力量

幼い少女

この二つの要素から導き出されるのは、

“実験材料”

として、投薬や魔力研究のためのモルモットにはるか……

あるいは管理局の高官に引き取られ

“慰み者”

になり、人生を終わりにさせてしまうか……

「（よし……！報告を改ざんしよう。うわぁ……うちって天才かも……）」

はやては彼女の身の安全を優先させるために報告を改ざんすることにした。

「はやてちゃんが自分に惚れているです……」

「えへ……えへへ……」

「シャマル医務官……八神二佐の頭も診てくれないか……」

「……そのうちやるわ……」

はやての緩みきった表情で医務室の緊張感は一気にほどけた。

翌朝、部隊の正式稼働の日がやってきた。

「眠い……」

「はやてちゃん報告書の偽造、お疲れ様です」

「労う位なら少しは手伝っても罰は当たらないで……」

「あゝ」

「なんや、リイン？」

「通信ですよ？」

『はやてちゃん、彼女が目を覚ましたわ！』

「はいはい………って、ほんまか？なら、すぐにそっちにいくわ！」

そこではやてにシャマルから少女が目覚めたと報告が入った。

「お待たせ！」

「はやてちゃん！」

「この子は？」

「ああキラ君。この子はな、昨日保護したんや……」

「そんな適当な……」

「お姉ちゃん、寝ほすけさんだ！」

「ヴィヴィオ、ちょっと静かにしてね？」

「はーい!!」

はやてが医務室に行くと既になのは、フェイト、ロラン、キラ、ヴィオがいた。

「……………?」

少女は困惑していた。

「私たちはあなたに何も危害を加えないから大丈夫!だから……………安心して」

「……………(コクリ)」

なのはが落ち着くように促した。

「あなたの名前……………聞いていいかな?」

少女が落ち着いたところでフェイトが名前を尋ねた。

「……………ん……………」

少女は静かに、しかし誰もが聞こえる声で呟いた。

「…ディー……………トリエル…」

未来に無いはずの彼女……………

世界は狂い始めたのか……  
それとも……最初から狂っていたのか……

— E N D —

## 第十三話 怒れる瞳

なのは達はトリエルと名乗った少女に幾つかの質問をしていた。

「ねえ、トリエルちゃんはどこから来たの？」

「……………」

「お父さん、お母さんの名前は？」

「……………」

「じゃあ、魔法って知ってる？」

「……………」

しかし、トリエルは「……………」としか話さず事情聴取にもならなかった。

「はぁ……………仕方ない、事情聴取はここまでだな」

質問を諦めはやてが終わらせようとしたとき、

“それ”は起こった。

『大変ですはやて隊長！』

「なんやー！」

「第41管理世界に新型の大軍が現れました。」

「緊急事態発生や！これからジークフリートは一切の通常任務を放棄……15分後に緊急出撃や！」

『了解！』

「……………」

「え？」

トリエルがキラの服の端を掴んだ。

「ごめんね、僕は行かなくちゃ」

「……………」

「帰って…来たらね……」

「……………」

トリエルは渋々とだが手を離し、キラはアースラに向かっていった。

「設立初日から緊急出撃か……なるべく体験したくないな……」

「アムロさん達……落ち着いてますね……」

「まあ……俺は元の世界では軍にいたからな」

アムロ達は動じていなかったが、FWの4人は緊張していた。

「ねえ……ティア……」

「何よ……こんな時に？」

「また……またあんなことが起こるのかな？」

「……」

4人の脳裏に浮かんでいたのは、MSに蹂躪された人達の光景。イメージしただけで吐き気がするようなものだった。

「君達の見た光景を忘れちゃいけない。俺達はそんな敵と戦い続けるんだ。」

「アムロさん……わかりました。」

『あと、10分で到着します。皆さんは準備をして下さい。』

「君達のカバーは全力です、だから精一杯戦って守ることだけを考えるんだ。」

「……ハイッ！」

「良い返事だ」



時空を越えるのにかかった時間は約2時間、着いてみるともうそこからは用が済んだようにMSが消えていた。

「こちら、スターライト1、周囲に敵影は……………ッ！この反応は！？」

なのは達、スターライト小隊が現場の調査をしていると突然魔力反応が現れた。

「これは……………アスラン！！」

一つは感じたことのある反応、つまりアスランだった。

《マスター、その他にあと2つ魔力反応があります》

「新手！？みんな、気を付けて！」

二つは正体不明“アンノウン”

「来た……………」

「フフ……………随分と寂しい手迎えだな……………」

「そんな……………どうして君が？それに……………あなたは……………」

敵の姿を見たとき身構えていたキラは驚愕した。

「アンタは……………何もわかっていないな！」

一人はかつての世界で分かり合えた、分かり合うことができたはずだった、赤い目で若干癖毛の男シン・アスカ。

「シン、気持ちはわかるが焦る必要はないよ……」

そして、もう一人は金髪に仮面を付けた白服の男。自らの狂気とエゴで世界を滅ぼそうとし、最期はその野望の中でキラに討たれた男……ラウ・ル・クルーゼだった。

「どうして……どうしてここにいるんですか？」

死んだ人間が生きているはずはない。

キラは若干混乱している脳をフル回転させ現実を理解しようとしていた。

「あなた達は、どうしてこんなことを……！」

キラが混乱しているなか、なのはが三人の説得をしていた。

「無論、世界を救うためさ……」

「だったら、すぐに戦闘を中止してください！今なら、罪は軽いです」

「やはり、君は何も分かっていないな……」

「え……？」

「この世界を腐らせるのが、君達管理局だと言うのに……」

「そんな……」

「まあいい……君が知ったところで何も変わらないからな……」

「もういいじゃないですか、敵対するなら倒せって言われてますし……」

「シン、話し合いの場も設けなくて戦うのは間違っているぞ。隊長も彼女達を煽るのは止めて下さい。」

しかし三人の答えは

「否」むしろ彼女に刃を向けた。

「いいですよ、管理局は俺が倒すんだ。今日、ここで……」

「アスラン……もう止めてくれ……」

「シン、アスラン君達は周囲の敵を頼むよ……私はこちらのお嬢さんの相手をさせてもらうからね！」

「了解……」

三人は分散し戦いが始まった。

「では……勝負と行こうか、お嬢さん！」

そう言うとクルーゼはサーベルで斬りつけてきた

「……………っ！」

しかし、なのはに切っ先が届くことは無かった。

「援護するぜ！なのはさん！」

「ガロード君！……………みんなは他の敵をお願い！」

「了解！」

なのは達も三つに散会して応戦した。

「行くよガロード君！」

「おう！」

なのはとガロードは仮面の男、クルーゼと戦っていた。

「おや……………君は“あの兄弟”の敵か……………」

「あの兄弟……………？まさか……………！！！」

「まあいい……………早速だが君達には墜ちてもらおう……………」

《Rifle and Dragoon Standby!》  
…Fire!》

「……………っねってー！」

「アムロさんのファンネルと同じ……………キャア！」

「なのはさん！………ウワァ！」

クルーゼはライフルとドラグーンと言うビットを駆使し二人を追い詰めていた。

「フフフ………ハハハハ………」

圧倒的な技量の差を示すかのように二人のバリアジャケットは剥がれ落ちていった。

「クソツ！コイツ………チヨロチヨロと！！」

「スバル、そっちに行ったわよ！」

「分かった！」

「お前………ふざけるなあ！！」

一方でスバルとティアナはシンと戦っていた。シンはソードシルエツトを使用し詰め寄っていた。

カンカン………ガァン！

「どうして、どうしてあなた達は戦うの？」

スバルとシンがぶつかり合ったときに、スバルがシンに戦う意味を聞いた。

「どうして……？　そんなの決まってるだろ！　アンタ達みたいなヤツを戦場に出さないためだ！」

「……え？」

「あんた達、この世界のこと本当に何も知らないんだな。」

シンは、理由を答えた。

「スバル！　一旦離れて！」

「ティア……？　分かった！」

「下がる！？……そんな子供だましに乗るかアアア！！」

シンはそう言うとティアナに向かってライフルを連射し、動きを止めようとした

「終わりだ……え？」

しかし、撃った先にティアナの姿はなくただ虚しく射撃音が木霊した

「これでも喰らえええ……！」

「なんだよ、こいつら！？」

「クロスファイア……シュート！」

「チツ！……なんで分かんないんだ、アンタ達は！！！」

キュイ　ン……パリ　ン

「……………」

「やった！」

「いいえ……まだよ!!！」

「ハアア……!!！」

「来る!!！」

シンは大剣を一つに繋げ、突き立てるように持ち替えながら迫ってきた

「え?…うわぁ!!！」

スバルは吹き飛ばされ、めくれあがった岩盤に叩きつけられた

「ガッ……ゲホッ、ゲホッ………」

「スバル!?!…この!!！」

ティアナはスバルが起き上がる時間稼ぎをするために、シンに向かって誘導弾を撃ち込んだ

「バカの一つ覚えだな!そんな攻撃………」

シンは魔力弾の隙間をくぐり、ティアナに迫りよった

「そんな……避けられた!？」

「終わらせてやる!!！」

そう言うとシンは斬りつけた

「まだよ!!！」

ティアナはシールドを張って防御したがシンの大剣は薄い板を砕くように、いとも簡単にシールドを叩き割った

「……………キャアア!!！」

覚醒したシンの実力は桁違いだった、先ほどまで互角だった実力は圧倒的にシンが上回り、ティアナの射撃はあっさりと避けられ、スバルの攻撃は容易く防がれた。

「キラアア……………!!！」

「アア スラン!!！」

一方、キラとアスランも戦っていた。

「どうして……………どうしてこんな事をするんだ!!！」

一度は分かり合えたはずなのに……



「いい加減に目を覚ませ！でないと……お前を殺すことになる！！」  
夢は同じはずなのに……

「覚悟はあるんだ！！アスランこそ、正しいことは何かは、わかっているはずだ。」

己の信念と剣をぶつけ合い銃を撃ち合っていた。

「どうして……なぜ分からないキラ？お前の所属している管理局は腐っているんだぞ！」

「アスラン、確かに君の言う通りなのかもしれない……」

「だったら！」

「だけど……僕の知っている管理局の人々は、決して腐ってなんかいなかった！それどころか……少しでも管理局を良くしようと頑張っていた！」

「だが、いくら一部の人間が動いたところで組織を変えることなど出来ない！小さな抵抗は権力という暴力で潰され、自分達の良いよくな正義を振りかざし民衆に押し付ける！！だから……俺達が外から変えるんだ！」

二人とも目のハイライトは等の昔に失っている。

「そんな事したら世界は今よりも混乱する！戦争は間違っている……でも、戦うことは間違っていないはずだ！！」

SEEDを覚醒し分かりあえないことに涙をこぼしながら戦っていた。

戦いは戦いを産む……

世界は不都合と戦いながらも新たな不都合を自ら孕ませる

— E N D —

## 第十四話 悪魔の影

スターライト小隊が戦っている地点と別の場所でも新たな敵が現れていた

それはまるで生ける屍リビングデッドのように地面の中から湧き出てきた

「馬鹿な……あいつらは！」

ドモンはその姿をみて驚愕した

グオオオオ……

目の前にいるのは金棒を構え、無限に増殖する悪魔の手先、デスアーミーだった

「グオオオオ！」

「……何！？ うおおお……」

ドモンは予想しなかった敵に、僅かに反応が遅れ、デスアーミーの群れと共に地面の中に連れ込まれてしまった

「……ドモン！」

「ドモンさん！」

「グオオオ……！」

「……クツ！ 邪魔だ！」

フェイトと刹那が助けようと手を伸ばしたが努力虚しくデスアーミ  
ー達に阻まれてしまった

『……………』

「何だつて！ アースラが……こんなときに……」

更に不幸は続いた

アースラにもデスアーミーの群れが襲ってきていたのだ

「ライトニング！……了解！」

「ギャラクシア！……了解！ ……少しだけ待っていてくれドモン  
！」

ドモンの事は気がかりだったが、敵の数が多すぎるために一時的に  
諦めることになった

時間を戻すこと少し前

「シグナム、そっちに2機行ったで！」

「主、承知しました！ 行くぞ……レヴァンティン！」

「シヤマル、周囲に他の敵は？」

「今のところは、大丈夫よはやてちゃん！」

はやて達アイシクル小隊は防御手段のないアースラの護衛をしていた

『こちらアースラ、砲門に異常なし、損害は軽微です』

アースラは魔力砲を搭載しているとはいえ元々は巡洋艦、戦力にはなるがMSに囲まれてしまったら撃沈は免れない

最悪の事態に備え、はやて達アイシクル小隊が残る事になっていた

「はやてちゃん……なんか妙じゃないですか？」

「確かにそうやないイン」

「はやて……何が妙なんだ？」

「敵の数が少な過ぎるんや。まるで、ただうちの足止めがしたいみたいにな……」

「足止めって……この状況でか？ ……確かに不自然だな……」

なのはから「魔力反応とともに敵が来た」との報告があったころからアースラの周りに敵が来るようになった

「……ッ主！」

「ああ……なんや……来るで！」

「はやてちゃん！ 周囲にたくさんの方が……」

「周囲ってどこや？」

「これは……下よ！」

グオオオ……

地響きのような声と共に大地を切り裂き、デスアーミーが現れた

「有象無象の敵など、一撃で！ 紫電……一閃！」

「流石シグナムですう！」

シグナムが敵を両断し、戦いは一瞬で終わると思われた

「アカン！ まだや！！」

「……ッ馬鹿な！？ 再生した？」

しかし、デスアーミーの能力を侮っていた

“自己再生”

両断したデスアーミーの切断口から同じ体が出てきた

「シグナム……後ろ！」

「グッ！ いつの間に……」

“自己増殖”

両断された機体は二つに、腕を潰された機体は腕から機体が再生し、新たな機体を生み出した

「キリがねえ、どんなに叩き潰しても再生しちまう……」

「（このままではあかん……）ライトニング小隊とギヤラクシア小隊は後退して、艦の直衛に回ってもらえるか？」

『ライトニング1……了解！』

『ギヤラクシア1……了解！』

このままでは沈んでしまうそう考えたはやては交戦中のスターライト小隊以外の二つ、ギヤラクシア小隊とサンダーボルト小隊をアースラの護衛にまわすことにした

「……大丈夫？ ガロード君」

「……なんとか」

「フフフ……ハハハ……まだ、持ちこたえていたとは素晴らしいな」

一方なのは達とクルーゼとの戦いに、終止符が打たれようとしていた

「大丈夫？ レイジングハート？」

《ジャケットの維持率38%。戦闘続行不可能です》

なのは達のバリアジャケットは崩壊寸前、形状を維持しているのがやっとなんた

「エース・オブ・エースと言ったかな……まあ、そんな過去の栄光に囚われていては何も出来ないだろうね……」

対するクルーゼは傷一つつかず、魔力も残っている  
2人の敗北は決まっているようなものだった

グオオオオ……

「ほう……フフフ……ハハハハハ！」

しかしクルーゼは高笑いし

「機は熟し、悪魔は蘇った……まあ、次に会う時までせいぜい生き残るのだな！ フフフ……ハハハハ」

そう告げると去っていった

「……悪魔？」

彼女に一筋の疑問と敗北感を残して……

「お前達みたいになん、何も知らないで戦う奴達がいるから……俺達が戦わなきゃいけないんだ！」



「…………グッ！」

「キヤア…………！」

シンの目は怒りで満ちていた

「ウオオオオ！！！」

近距離に詰め寄り大剣で叩き付けたかと思ったら

「ハアアアア！！！」

すぐに距離をとり、ライフルを撃ってきた

「いい加減諦めろ！ お前達はもう、終わりなんだ」

「まだよ！ まだ終われない！！！」

複数の武装を巧みに使い分け、数で有利なはずの二人を圧倒した

「こんな世界…………俺が壊してやる」

「そつはさせない！！！」

「無駄だつて言ってるだろ！」

「え？ ……………キヤアツ！！！」

「ティア！？」

ティアナはシンの攻撃を止めようと一撃を放ったが、シンは容易く受け止めた

「これで……終わりだ！」

「……！？ 逃げてティア！」

「ごめんね……ごめんね……いやだ……死にたくない……」

「こんな世界を作った自分達を怨むんだな……」

そう言いながらシンは大剣を振りかざした

「……お兄ちゃん……」

「……ッ！？」

トドメを刺そうと詰め寄った時、ティアナの兄を呼ぶ声にシンは動きが止まってしまった

「（俺は、この世界でステラみたいな子を出さないためなら、ためらわないって決めたはずだ！）喰らえ……」

『撤退する……シン、アスラン……』

『……ッ了解！』

躊躇いを殺し、再び二人にトドメを刺そうとしたときに通信が入った

「……了解（良かった）……彼女達を殺さなくて……。こんな事で安心するなんて矛盾してるな俺……」

シンは殺さずにすんだことに安堵しながらも離脱していった

一方キラとアスランの戦いはまさに死闘だった

「ウオオオ……！」

剣をぶつけ合い

「ハアア……！」

思いをぶつけ合い

「アスラン！！ もう止めるんだ！」

互いの夢をぶつけ、戦っていた

「キラ、ならお前は何で攻撃を続けるんだ！ お前が戦いを続けたり止めることなんてできない」

アスランの攻撃は容赦が無かった

「このまま押し切る……！」

避けることのできないビームの応酬にシールドが悲鳴を上げ、碎け

散った

「シールドがッー!!」

シールドを搭載していない他の装備なら既にキラはこの世にはいなかっただろう

『撤退する……シン、アスラン……』

しかし、戦いは突然終わりを告げた

「クルーゼ隊長……しかし!」

『アスラン……これは命令だよ』

「……ッ了解!」

アスランの通信が終わると周囲からデスアーミーが現れ、キラに襲いかかってきた

「グオオオ……」

「クッ……邪魔だ! アスラン……君達のやり方は多くの人をただ不幸にするだけだ!」

「……キラ」

アスランは少し悔しい顔をしながらもその場を去った

「アスラン……ッ！！ このっ！！」

キラは逃げきることを最優先にデスアーミーと戦うことにした

蘇った混沌の悪魔

究極を手に入れたその力が世界に降り注ぐ……

悪魔の手先は恐れを知らない……

— E N D —

## 第十五話 その名は東方不敗（前編）

デスアーミーに連れて行かれたドモンは地下にいた

「グオオオ！」

「ハッ！ …… タアリヤア！」

「……………グオオオ」

「ハア……………ハア……………クソっキリがない……………」

倒しても倒しても蘇る屍に、ドモンの体力は着実に消耗していった  
「俺は……………キングオブハートだ！ こんなところで負けるわけには  
いかん！」

しかし、ここで立ち止まるわけにはいかない

「ハア！ …… セイ！ …… トオリヤア！」

体力を限界まで振り絞り拳を向けた

「ハアッ！」

向かってくる一機のデスアーミーを叩き潰し

「セイツー！…！」

飛びかかってきた一機を背負い投げの要領で投げ飛ばし

「肘打ち！ 裏拳、正拳！！」

再生が追いつかないスピードで次々に倒していった

「ハア……ハア……大丈夫かシャイニング？」

あらかた周囲の敵を倒した頃にはドモンの足は立っているだけや  
つとだった

《問題ない。それより、アニキの拳の方が心配だ》

元々シャイニングは格闘戦特化の武装として作られていたが強度は  
デバイスのみでの計算となっている、つまり使用者のダメージは全  
く計算に入れられていないのだ

「俺はまだ大丈夫だ……」

《そうか、決して無理はしないでくれよ》

「ああ……分かっている」

長時間衝撃を与えれば使用者の体には確実にダメージが蓄積される、  
ドモンの手はもうすでに限界だった

「行くぞ……上で待っている奴らがいる……」

しかし、諦めることはできない。一步、また一步と歩みを進めた

歩いていると明かりのさす広い空間に出た

「グツ……見えない……」

久しぶりに見た明かりにドモンは焦点を合わせることができなかった

《見えないところ悪いが、敵がいるぞ》

「もう少しだ……」

「グオオオオツ……!!」

《データベース照合……未確認。新種のお出ました》

「……やはり！ デスアーミーが現れた時点で予想はしていたが……」

ドモンの目が光りに慣れ、目の前を見てみるとその空間には恐れていたものがあつた

「グアアアア!!」

長い首に悪魔のような牙、デスアーミーを束ねる悪魔の顔

「こいつがいるとはな……」

それは、“ガンダムヘッド”ドモンの世界を恐怖に陥れた災患の手



先だった

「どういう理由かはわからんが……この先に奴がいる！」

そう確信した彼は壊れそうになった体に鞭を打ち、再び構えた

「ガアアアッ！」

そのときガンダムヘッドの一匹がドモンに向かってきた

「チイッ！」

ドモンはその一撃を受け止め拳を打ちつけようとした

「ハアア……グッ！」

しかし蓄積されたダメージがドモンの手を襲った

「グガアアアア……！」

ドモンの一撃はガンダムヘッドを砕く事はできずよろけさせるだけで精一杯だった

「シャイニング！ カートリッジロードだ！」

《無理だ……カートリッジを使用したら、アニキの体が耐えられない！》

「クッ！」

ドモンにはベルカ式のカートリッジがあったのだが、使うことができなかった

「俺の体なら問題無い!!」

《大問題だ!!》

ベルカ式カートリッジシステムは使用者の爆発的な魔力の増加が見込めるが、体に大きな負担がかかる

身体にダメージを負った人間が使えば、使った瞬間に使用者の体が壊れてしまう

「グオオオオツ!!」

「何ツ!? ……グハア……ツ!」

ドモンは肺から息を全て吐き出してしまい、呼吸すらままならない状態だった

「カハツ……ゲホツ!」

痛みが全身を襲い動けなくなったドモンに追い打ちをかけるようにガンダムヘッドが襲いかかってきた

「クソツ……俺はここまでなのか……!?」

しかし、攻撃はドモンを襲うことはなくガンダムヘッドは爆散した

「なんだ……!?」

攻撃のあつた上方を見上げてみるとそこには白いターバンを被った男がいた

「この馬鹿弟子がア！ キングオブハートの名はそんなに軽いものなのか？」

「あ、あなたはまさか！」

「答えよ、ドモン！」

その男はドモンに叫んだ

「流派ツ！！ 東方不敗はツ！」

その声と共にデスアーミーを蹴り上げ

「王者の風よ！」

二人の拳が交わった

「全身！」

男が手刀を繰り出し

「系裂！」

肘打ちで粉碎

「天破侠乱！」

ドモンの裏拳が炸裂した

「見よ、東方は赤アアく燃えている!!」

二人の拳を交わした円舞で敵の半数が消え去った

「久しぶりだなドモンよ……」

「やはり、あなたは師匠!」

再び秩序の守り手は交わる……

不敗の伝説は終わらない……

— E N D —

第十六話 その名は東方不敗（後編）

一方のアースラではドモンの捜索が進められていた

「クツ……ドモンはまだ見つからないのか？」

『アムロさん……こちらには反応ありません！』

正体不明の屍を相手に、既に彼等の精神は限界を迎えようとしていた

『はやて……これからギャラクシア小隊が地上に降下して捜索する』

「了解しました……気をつけてください！」

『……了解した』

ギャラクシア小隊が地上に降りて捜索を開始した

「こちらギャラクシア01、周囲に反応無し……操作範囲を拡大……  
ッ……これは……」

グオオオ……

「クツ……またコイツらか！」

「邪魔だって……わかんないの!？」

しかし、彼らが足をつけると地面から一斉にデスアーミーが出てきて彼らを阻んだ

「アムロさん！ 敵の数が多すぎます……」

「邪魔だ！ ……ここから居なくなれ！」

屍の群はカミーユに群がり、襲い掛かった

「落ち着けカミーユ！」

『アムロさん……これ以上は無理です！ 一旦撤退してください』

「チイツ……了解した。ロラン脱出ルートの確保を！」

「分かりました！」

大量の機体の前に彼らは撤退するしかなかった

「ドモンの搜索方法について何かいい案がある人はおるか？」

艦内ではドモンを救出するために会議が行われていた

「はやてちゃん……地下から現れる敵を私のスターライト・ブレイカーで殲滅して、その隙にどれか一つの小隊を突入させるってのはどうか？」

一つの作戦をなのが提案した

「無策だな……」

「ヒロくん……」

「ああ……この状況では不可能やるな……下手したら、地下にいるはずのドモンまで吹き飛ばしてしまうかもしれない……」

しかしそれは何もない時の話である

「大量の敵を一度に殲滅するならば有効な策だろう……しかし、この状況で救出という策を採るならば一番の無策だ」

地下にはドモンがいるかもしれない、そんな中で強力な魔法を放ち落盤でもしたら更に状況は悪化してしまう

「じゃあそれ以外の方法で敵を倒すの？」

フェイトが質問した

「無駄だろうな……数的不利に加えて再生能力を持っている敵だ。消耗戦に持ち込まれてエースに撃墜されるのが目に見えている」

「クッ……！ 仲間一人救えないのか、俺達は……」

この状況にそこにいる全員が絶望していた

一方でドモンと東方不敗は上を目指して進んでいた

「師匠、本当に素手で大丈夫ですか？」

「何の問題がある……ドモンよ格闘家というのは己の身が最高の武器だということを忘れたか！」

「ハッ！………そうでした師匠！」

「うむ分かれば良し！では………行くぞドモンよ！」

「はい！ 師匠」

ドモンはデバイスを両手両足に展開していたが東方不敗は素手に布を持っていただけだった

「ハアア………セイ！」

「フハハ………甘いわ！」

二人は目の前に迫るデスアーミー達を倒しながら仲間と合流するために進んでいた

「師匠！ どうやら出口のようです！」

「一々言わずとも分かっておるわ！………じゃが」

「はい………奴は！」

出口らしき明かりが見えたのだが、そこには奴がいた

「グオオオン！！」



普段と変わらず一つ目、金棒を持ってはいるのだが、今までとはどこか違った

「でかいのう……」

「でかいですね……」

そう、一機だけ並の大きさを圧倒的に凌駕していた

「いくら大きかろうと所詮は雑兵！ 行くぞドモン！」

「はい師匠！」

大抵の人間は大きさに気圧されてしまいが二人は違った

「セイツ……ダアリヤアアア……」

「フハハハハ！！ 無駄の一言オ……」

周囲の雑魚ごと巨大なデスアーミーを一掃しようとした

「ハアツ！」

「グオオオオツ……」

「ならば！……セイツ……」

「グガアアア……」

しかし、大きさが違いすぎるために普段なら通用する攻撃も通ることが無かった

「ム！ やはり固い……仕方ないドモンよ“アレ”をやるぞ！」

「はい！ 分かりました師匠！」

「ハアア……！」

そう言うと彼は、自身の体を回転させ始めた

「クッ……！」

ドモンは回転した東方不敗の体を拳で打ちだそうとしたが、先ほどまでの戦闘で限界がきていた

「どうした！？ 早くせんか！！！」

「申し訳ございません……ウオオ！」

負担を軽減するためにドモンは足で蹴った

「超球！！ 霸王！！ 電影弾！」

「グオオオオ……！」

その一撃で周囲の敵は崩れ去り、爆発で道は開けた

「素晴らしい一撃！ 流石は師匠！！！」

「無駄口を叩いている暇は無いぞ！ 奴らが来る前に一刻も早く脱出するのだ！！」

「はい！！ 師匠！」

2人は今の一撃でできた風穴を進んでいった

「もう仕方あらへん！ 小隊を2つ捜索にまわすわ！」

「そんな無茶な……でも、一体どの部隊を回すの？」

「そつやな……ギャラクシア小隊とサンダーボルト小隊に行ってもらうことにするわ……」

「そんな……私達は？」

「なのはちゃんの部隊はさっきの戦闘のダメージが大きいから、うちらと後方から援護！」

「……わかったよはやてちゃん」

アースラではドモン救出に全部隊を出撃させようとしていた

『はやて隊長！ 周囲に複数の機影が……』

しかしその作戦はMSの襲来によって阻まれた

「じゃあない！ みんな、艦は私達を守るから出撃して！」

「了解!」

「じゃあ行くで、なのはちゃん!」

「分かったよはやてちゃん。行くよレイジング・ハート!」

《All right……SET UP!》

部隊の限界は近いが仲間のために出撃した

「チイツ……やはり敵が多いな……」

「アムロさん! 私達が道を作りますから……その際に!」

「……フェイト、了解した!」

『待って下さい! ……地下から何か来ます!』

「……え?」

「何……!?!」

「儂に続け! ドモンよ……」

「分かりました! ……師匠!」

ドモンが東方不敗と共にやってきたのだ

「無事だったか……ドモン」

「みんな、すまなかった！」

「それに……そちらの方は？」

「今は儂のことなどどうでもよい！」

「……そうだったな。敵は多いが撤退するぞ」

「了解！」

「では……師匠も！」

「先に行け……ドモンよ！」

「はい……？」

「儂はコイツらを片付けてから行くと言っておるのだ、この馬鹿弟子が！」

「わかりました師匠！ それでは先に行かせていただきます！」

「行ったか……では行くぞ！ 流派、東方不敗があ最終奥義！ 石破アア天響拳！」

その一喝と共に強大な力が溢れ出し辺りに轟音をばらまいた、東方不敗は魔力をさほど使用せずに敵を一掃してしまった

「……フェイト……あれは……」

「……規格外過ぎますねアムロさん……」

彼女たちはドモンの世界の住人の無茶苦茶な実力にただただ驚いた

意志砕き、天に轟くその拳……  
力の代償は人生の総て

— E N D —

## 第十七話 束の間の平穩

『只今、着艦致す!』

「はやて隊長、全員の収容を完了しました!」

「よし! アースラ発進や!」

「了解!」

ドモンと東方不敗の二人をアースラに収容し、ジークフリートはその世界を離脱した

「補給に戻るで……リン、クロノくんには作戦終了の報告や」

「はいです!」

アースラは緊急発進したために何もかも準備ができていないそんな中での出撃だったため、いったん戻って補給を受けなければいけなかった

戻る間、東方不敗の任意での聴取が行われた

「それでは……お聞きします」

「うむ!」

「……まず、あなたの名前は?」

「東方不敗と呼ぶがいい……」

「……次に、何故あの場所に？」

「儂も良くはわからんが……目が覚めたらあの場所にいたのだ」

「そうですか……じゃあ、あの技は？」

「あれは儂の流派の奥義だ！ 名を石破天響拳と言う」

「はあ……それで、あなたはこれからどうなさいますか？」

「この部隊には儂の愚弟子も居ることだ……是非とも協力しよう！  
全てに嘘偽りなく答え、東方不敗は管理局に協力すると自らの意思を示した

「師匠」

「……ドモンか」

部屋を出たところでドモンが聞いた

「師匠……いや東方不敗、何故貴様が生き返ったかは今更聞かん！」

「そうか……」

「だが……何故ヤツに敵対する？ ヤツは貴様の希望だろう」



「決まっておる……………“奴”が世界を破壊するのであれば、それは最早正義ではない。悪は倒さなくてはならないのだ！」

「そうですか……………師匠、先ほどの暴言失礼致しました……………」

「構わん、ドモンよこれから世話になるぞ！」

「分かりました師匠！」

「そつと決まれば早速修行するぞドモンよ！」

「はい！ お供します師匠！」

ドモンはその言葉に感動し、東方不敗は修行をすると言い二人は訓練所に籠もってしまった

「どうでもいいんやけど……………あの奥義は使わないでな……………壊れると直せんよ……………」

少し、財布の中身が寂しくなった部隊であった

「隊長！ミッドチルダに到着しました……………今後の指示を！」

数時間後、アースラはミッドチルダに到着し、すぐに修理と補給が始まった

「そつやな……………艦が動かん以上は待機かな、アルト……………みんなに半

舷休息を伝えといてな」

「了解！」

ジークフリートのメンバーは動くことのできる艦が無いので行動不能待機しか選択肢がなかった

「はああ……疲れたわ」

「大丈夫ですかあ？ はやてちゃん」

「うーん少し休ませてもらうわ……リン、空きドックへの連絡と補給の手配は任せるわ」

「はいですう！」

僅かな時間だが、戦士達には休息の時間が与えられた

「部隊長殿、修行できるスペースをお借りしたい。

「東方不敗さん……貸すのはええけど、訓練場を壊さないでな……」

「承知！！」

ある者は次の戦いに備え

「ティアク、アイス食べに行こう？」

「バカッ、半舷休息って隊長が言ったばかりでしょ！！」

ある者は休息を楽しみ

「まあ、そんなすぐに行動できないからみんな少しだけ外出は許可するで」

「だからって、羽目を外さないで下さいよ」

それぞれが休息を謳歌していた

「……という訳なんですよ、お願いします」

「なるほど、どうしますかアムロさん？」

「私はシャーリーの意見に賛成……後はアムロさん達の意見を聞いてからじゃないと……」

「そうだな……」

アムロ、カミーユ、なのはの三人はデバイスルームに呼ばれていた

「新型の対抗策にアームズデバイスの実用研究か……」

シャーリーが作ったデバイス、アームズデバイスの改良をするためだ  
今回の目的は本来のミッドチルダ式の魔力の形状を維持しながらア  
ームズデバイスに搭載できる武装を作成する、統率のとれた均質な  
戦力をもつ部隊を大量に用意するには必要なものだった

「お願いしますアムロさん達の協力が必要なんです……」

そこで、アムロ達の世界のMSが注目された

同じ武装を持った大量の量産型兵器、条件としては最高だった

「アムロさん、俺は協力してもいいと思いますよ」

「カミーユ……確かにそうだな。別に兵器を提供するわけじゃあない。だが……いくつか条件がある」

「条件ですか？」

アムロとカミーユは条件付きでMSの武装の情報を提供することに  
した

「まず、このデバイスにMSという名をつけないこと」

「どうしてですか？」

「これは、敵が同じ名前を付ける可能性があるからな。世間に公表  
するときに敵がMSと付けていると不信感が高まってしまう」

「それはわかりました。別名称を付けることを約束します。」

「いいだろう、もう一つは量産型だけと言うこと」

「アムロさん達のデバイスは駄目ですか？」

「ああ、強い武装やデバイスを作ったからといってその人の能力が  
高くなつた訳ではないし、武装も複雑になってしまふからな……そ

れに俺達の機体もデバイスも専用にカスタムしてある。本人が使用しないと性能を十分に発揮できないからな」

「量産型だけですか……」

「まあまあ、協力してくれるんだから。ねっ！ シャーリー」

「分かりました……それで構いませんよ……折角色々なデバイスを弄くりまわす事が出来ると思ったのに……」

シャーリーは少々不服のようだが、なのはの説得でその条件を呑んだ  
いずれこの研究が世界の運命を狂わす歯車になることを未だ誰も知  
ることはできずに……

「ふう……今日は迷わなかったな」

ジュードはガロードと再びジャンク屋に来ていた

「いや、さすがに何回も迷うかよ！ ……それより、怪我は大丈夫かガロード？」

「ああ……これ？ 包帯巻いているだけでそんな大きな怪我じゃないからさ。あんまり気にすんなよ、ジュード！」

幸いにもガロードの怪我は腕の打撲ですみ包帯を巻いてはいたが重傷にはなっていなかった

「これと……これと……あ！ 通信で伝えたけど、仕入れてくれた

「？」

「当たり前だろ、ジャンク屋を舐めんなよ！」

「まあ、俺達も同業者みたいなものだからね」

「よし！ こんなもんだろガンダム坊や達！」

「ありがとうジャンク屋の兄ちゃん！」

「それより、ガンダム坊やって何？」

「……秘密だ！」

「ふーん、まあいいや……じゃあね！」

「おう、じゃあな！」

二人は個人的に頼まれていた情報を仕入れ、隊舎に帰るところだった

「ガンダム坊や……俺達ガンダムって言葉、あの兄ちゃんの前で言  
つたっけ？」

「まあ、良いじゃん別に俺は気にしないぜ」

「そうだな。ところでガロード？」

「……ん？」

「お前の世界ってどんな感じなんだ？」

「それ、この前スバルにも聞かれたよ」

「いいじゃん、教えるよ……」

「別にいいけど、そつちも教えるよ？」

「ああ……わかった！」

二人は自身の世界のことについて教えあつた

「俺のいた世界はな、自戦争が続いていて、個人の独善で戦い続ける人がいる世界なんだ」

「なんか……酷い世界だな……」

「まあ、昔から続いていたみただけで俺達には関係なかったしな」

「俺の世界では大きな戦争があつたんだ……」

「ガロード……」

「戦争から立ち直ろうと努力しているけどね、争いは絶えないし、結構荒れていたんだぜ」

「……そつか」

「お前の世界も大変なんだな……」

「まあ……なッ!？」

「なんだ……? 地震?」

すこししんみりとした空気の中、帰り道を歩いていると突然地面が揺れだした

彼の者達は仲間を求め再び集う……  
女神の意志か、神の必然か……  
そして……再び世界は交わる

— E N D —



## 第十八話 新たなる仲間

「ここですね……カミーユさん」

地震が起きた地点にはカミーユとロランが行くことになった

「そのようだな……だけどこの感じは……（優しい……そして暖かい？）」

カミーユは近づく前から少しだけ気配を感じていた

「……！？ ロランあれを見る！」

「ええ……誰か倒れてますよ……ね！？」

「どうした、ロラン？」

「すみませんカミーユさん……先行します！」

「おい！……ロラン」

ロランが震源地付近に近付いてみると4人の人間が倒れていた

「やっぱり……ハリー隊長だ……」

ロランは一人の男に見覚えがあった

「（ふう……良かった、知り合いが来てくれた）」

銀髪の短い髪に赤いサングラス。そう彼の世界の住人、ディアナ・カウンターの隊長ハリー・オードだった

「ようやく追いついた……どうしたんだよロラン、勝手に先行して……」

「すみませんカミーユさん……それよりこの人たちを……」

「そつだな……とりあえず隊舎に運ぶか……」

「はい！」

彼は知り合いが来たということに安堵しながらも保護を進めるように思考を切り替えた

彼らが無事に搬送し、はやて達は4人が目覚めるのを待っていた

「はやてちゃん、どう？ 結果はでた？」

「もう少しやな……」

「そっか……」

念のため彼らを面会謝絶とし、精密検査の結果が出るまでは本人達の身元確認は延期となった

「で……………」

八神はやては戦闘の事後処理と報告書の作成に追われていた

「なんなんや、この書類の量はー！」

はやては書類の山の中に埋もれていた

「……………はやてちゃん、大丈夫ですか？」

「……………大……………夫……………け……………か……………」

「……………！？ はやてちゃん？」

「大丈夫なわけあるかー！ー！」

「（はやてちゃんがキレたですうー！ー！）」

報告書の量の多さに少し頭を抱えつつも何とか仕事をこなしていた  
はやてだったがついに限界を迎えた

「（何か……………何かで気を逸らさない……………）」

そのとき不意に通信が入った

「は、はやてちゃん……………通信が……………」

「ああ……………？」

「ヒイツ……………ク、クロノ提督からですよ……………」

「……このクソ忙しい時に……ククククロノやと……」

「……ヒイツ!?!」

「まあ……ええわ! ……この腹の底から沸き上がる黒い衝動をクロノにぶつけてやるわ……ククク……」

「ほどほどにするですよ」

事後処理でたまったストレスをクロノにぶつけようとはやては回線を開いた

『……はやてか?』

「ああ……そうや……で、一体何のようや? 何でもないとか言ったら切れるで」

『何をキレてるかは分からんが……新造艦が完成したぞ……』

「……ほんまか?」

『ああ……それに、補充部隊も送っておいたぞ……』

「……クロノ、おおきに! 愛してるで!」

「……ああ……それと、新造艦は今日中にそちらに着くだろう」

「(クロノくんまさかのスルー!?!?)」

新造艦が完成し補充部隊も到着する  
その一言ではやてのストレスは吹き飛んだ

「ようやく、ジークフリートが本格的な活動ができるな……」

「……ああ、頑張れよはやて」

はやては連絡する前のストレスなど感じさせずに、晴れ晴れとした表情と決意がにじみ出していた

「お……終わった……」

「お疲れさまですう」

2人は何とか報告書の作成を終了し机に突っ伏していた

「また通信か……」

「はやてちゃん、検査の結果が出たわよ！」

精密検査の結果が出たとシャマルからはやてのもとに通信が入った

『ほんまかシャマル！ それで……結果は？』

「全員、問題はないわ……でも……」

シャマルは全員に問題が無いことを告げた

『…………でも？』

「まだ、目が覚めてないの…………」

『…………そうか。なら、身元確認は後回しやな…………』

しかし、まだ一人も目覚めていないために彼らへの面会はまだできなかつた

数時間後

新たに保護した4人が目を覚ました  
それを聞いてロランは急いで医務室に向かつた

「シャマルせんせい医師彼らが目を覚ましたって本当ですか！」

「ロラン君、少し静かにしないと……………ここは医務室だよ？」

「え？……………なのはさん……………！？ そうでしたね、すみません」

医務室に向かうとシャマルとなのはがいた

「ム！……………何だ……………この状況は？」

ハリーは周りの環境に少し戸惑っていた

「女性しかいない……………殿方はいないのか？」

医務室にいたのはハリー以外全員女性だったからだ

「ハリー隊長！」

「……ロランか？」

「はい！」

「そうか……ならば説明してもらおうか」

「はい、実は……」

ロランはハリーに現状の説明をした

「……と言っわけなんです」

「なるほど、ならば私も協力しよう！」

「本当ですか！？」

「ああ……元の世界に戻る為にはそれが得策のようだからな」

「でも……協力って言ってもはやてちゃんの許可が必要よ」

「だったら私がお願いしてみるよ」

「なのはさん……」

「有り難い」

ハリーは環境に困惑していたが、状況を理解し帰るためにジークフ

リートに協力することにした

「ハア……ハア……」

「おい、ジュードー！ 待てって！」

ジュードーとガロードは急いで隊舎に戻ってきていた

「この感じ……ニュータイプの波動……誰だ？ 誰が来たんだ！？」

「だから急ぐなって！」

そう考えたジュードーはガロードを引き離すように医務室に向かって  
いた

「ハア……ハア……なのはさん、新しい漂流者の人って……？」

「ジュードー君？ ……そこに居る人達だけど」

「嘘でしょ！？ 他には来ていないの？」

「うん、ここにいる人達で全員だよ」

「そんな……」

しかし、医務室に駆け込んでみても知り合いの顔は見えなかった

「はあ……知り合いじゃなかったか……」



「あ…………あ…………」

しかし、ジュードの隣でガロードが息を呑んでいた

「どうした？ ガロード」

「……………ティファ？」

ガロードの視線の先にいたのは彼女が探していた少女、“ティファ・アディール”だったからだ

「ティファ！」

「ガロード…………？」

「ティファ！ また会えて良かった…………でも、どうしてここに？」

「わからない…………ガロードを探していて気づいたらここに…………」

「そっか…………でも、無事で良かった！」

「私も会えて嬉しい…………」

ガロードとティファは再開を喜び二人がなぜここにいるのかを聞いて互いの無事を確かめ合った

「あーみんなを隊長室に連れていこうか」

「私もお仕事お仕事…………」

なのはとシヤマルは気を遣ったのか部屋を出て行った

「さてと……それじゃあ、皆さんを隊長室まで案内しますね」

「じゃあ僕は、ガロードと話している女の子を読んで来ます！」

「ロラン君、空気を読もうよ……今は2人だけにしてあげて……」

「……？ 分かりました、なのはさん」

「じゃあ、改めて私に着いて来てください」

ガロードとティファが無事を確かめあっているなか、なのは、ロランはハリーと二人の女性を隊長室に案内していた

217

「そういえば自己紹介がまだでしたね、私は高町なのは一等空尉です。この部隊では、小隊長を務めています」

「僕はロラン・セアックといいます。元々はそこにいらっしやるハリー隊長と同じ世界の間人です」

「ならば、私も名乗らせてもらおう。私はハリー・オード。元の世界では、軍に所属し女王の警護をしていた……」

「私はリリーナ・ドーリアンと申します。私達の元の世界はA・Cアフターコロニーと呼ばれていました」

「最後は私ね……私はレイン・ミカムラ。ある人を探していたら気

「がっいたらここに……」

隊長室に向かうまでの間に互いに自己紹介をした

「分かりました、ハリーさんにリリーナさん、レインさんですね。

……ところで、レインさんはどなたを探してるんですか？」

「私が探しているのは、ドモンという格闘家です。つり目で無愛想な顔……あと、赤いバンダナをしています」

レインは自分の探し人の事を聞いた

「それなら、ここにいますよ」

「それは本当ですか？ ……それで、ドモンは今どこに？」

「ええ……と、多分訓練所に居ると思いますけど……」

「そうですか……すいませんが失礼します！」

「え……！？ ……行っちゃった、場所……分かるのかな……？」

「「「……」」」

なのはが訓練所にいることを告げるとレインは詳しい場所も聞かずにどこかにいってしまった。残された一同は不安を残しながらも隊長室に向かうことにした

「……と、いうわけでここにいる2人とちょっとトラブルがあ

「ただけど他2名の漂流者には問題はなかったよはやてちゃん」

「ふう……良かったわ」

「あの、はやてさん……ここにいるハリー隊長がジークフリートに協力したいそうなんですけど……」

「ハリー隊長？」

「ああ、ハリーさんはロランくんと同じ世界の人らしいよ、元軍人だって言うし力になってくれると思うんだ」

「私からもお願いする」

ロランがハリーがジークフリートに協力したいことを告げ、なのはとハリーも頼んだ

「ん……？ 別にええで」

「へ……？ なんか軽くないですかあ？」

「だって、元軍人なら戦力になってくれそうやし、本人もやる気っぽいしな」

はやては戦力になるならばと許可をし、部隊の一員として迎え入れることにした

「さて……今日も書類の改ざんを……」

「失礼する、報告書が完成した……ぞ!？」

「……? どないしたんやヒロくん？」

ヒロが室内を見回してみるとある人物に目が止まった

「ヒロ……?」

「リリーナ……」

ヒロが目にしたのは彼の世界の住人の女性、リリーナ・ドーリアンだった

「何故、貴様がここにいる……」

「それは……私の言葉よ……」

二人は偶然の再開に驚いた

その頃、ガロードとティファはジユードとスバル、ティアナに戦争のこと、自分達の世界のこと、そしてニュータイプのことを話していた

「俺達の世界では……かつて、戦争があっただ……」

「戦争……」

「ああ、コロニーが世界中に落ちてもう駄目になるかもしれない」

「コロニー落とし、アレをする奴らが他にもいるのかよ……」

「まあ、戦争がそれで終わって……俺とティファが出会ったんだ」

「私達、ニュータイプは実験材料にされていました。世界を変えるための……」

「俺はさっきも聞いたけど……世界が違えばニュータイプの意味も違うんだよな……」

「大変だったのね……あなた達は」

「……うえっ……ヒック……みんな偉いよね、そんな世界で生きていけるなんて」

ジウドーは世界が違くとニュータイプの定義が違うことを知り、ティアナは別の世界では争いが絶えないということに悲しみを覚えたスバルに至っては涙をこぼし、顔を歪めていた

「みんな、そんな複雑そうな顔しないでよ……そこまでひどい世界じゃなかったからさ！」

「……ガロードの言う通り、いい世界……」

2人は笑って答えていた

「うむ、こんなものか……」

「お疲れ様です、師匠」

一方、ドモンと東方不敗は訓練所での修行を終えて体を休ませていた  
「やっと見つけたわよ！」

すると、突然聞き覚えのある声が聞こえた

「ん……！？レ、レイン！ どうしてここに？」

振り返ってみるとそこにはレイン・ミカムラが立っていた

「どうして？ それはこっちの台詞よ！ ……突然ドモンがいなくなるから探してたんでしよう！」

「す、すまんレイン！」

「それに……どうして、あの人が生きてるの？」

「ああ……それは……」

レインは東方不敗に警戒をしながらもドモンと話をしていた

「……というわけなんだ……」

「そう……だったの……。なら、私もあなた達に協力するわ！」

「な……馬鹿なことを言うな！ 危険だぞ」

「まあ、良いではないか」

「し、師匠まで」

「大丈夫よ戦いには参加しないって約束する」

「はあ、仕方ない。俺も聞いてはみるが駄目だったら諦めるよ」

「わかっているわ」

レインはこの世界のことや東方不敗のことを聞いて部隊に協力することを決めた

『Allah t』

「……ッ！ はやてちゃん！」

しかし、休息は長くはなかった

「はあ、当分は休日返上やな」

「もう！ 呑気に言っている場合じゃないですよ」

新しい仲間との再開や喜びに浸っている中、突然警鐘が鳴った

「そつやな……ジークフリートの諸君、25分後にアースラは発進やー！」

『了解！』



アースラの整備と補給も終了しいつでも発進できる状態であったため、はやて達は出撃する事にした

混沌の世界は破壊と共にやって来る……

未来を壊し、新たな世界が生み出される

破壊は悪か、創造は正義なのか………

I E N D I

## 第十九話 楽園からの追放者

「はやく隊長、目的地に到着しました！ 指示をお願いします」

「分かった。……クツ……これは……」

アースラは管理世界内でも技術が遥かに進歩した世界に来ていた

「ヒ、ヒドい！」

「こんなのって……やり過ぎよ！」

しかし、進歩した世界は見る影もなく同員共々蹂躪されていた

「クツ……ウダウダ言っている暇はあらへん！ アイシクル小隊以外の全部隊は出撃や！ ……なんとしてもこれ以上の被害を食い止めるんや！」

『了解！』

今回は急いで出撃せずに準備を整えてから発進したことが仇となった

「久しぶりだな、こんな戦場も……」

「アムロさん……」

「行くぞ、話しているならばこの戦場を早く何とかするんだ」

「わかりました」

後悔しながらも、出撃の準備を進めアイシクル小隊以外の全部隊が戦闘に向かった

「これは……」

「ビドゥ……」

サンダーボルト小隊とスターライト小隊が現場に向かってみると予想よりも更に酷い状況だった

「何で……こんな……」

建物は全て破壊され技術の欠片も残さず焼き尽くされていた

「フェイトちゃん！ ……あれ！」

さらに目の前には恐ろしい敵がいた

「うん……多分、あれがこの世界を破壊した兵器だよ……」

身の丈を遥かに超える体に全方位に砲門を搭載した傘

「なんで……この機体が……」

その巨体は見るもの全てを震わせた

「何……あの大きさ……」

そう、その名は

「デストロイ……」

キラ達の世界で破壊の限りを尽くし混沌に陥れた兵器だ

「みんな、これ以上好きにはさせない……迎撃するよ！」

「了解！」

彼らはこれ以上の被害を出さないために応戦した

「行くよ、ヒロくん」

「任務……了解……」

「デイバーーン……バスター！」

「撃て……ウイング！」

ズドーーオン！！

「……やったか？」

キューーン……

「いや、まだです！」

「ならば、接近戦を仕掛ける……行くぞエクシア！」

《All right!》

「……！ 危ない、刹那！」

「……何？ ……チイツ！」

刹那が迎撃しようとしたがMSに阻まれ、無駄に終わってしまった

「これは……皆さん、アイツの射線上から急いで退避して下さい！」

「どうしたのキラ君？」

「いいから、早く！」

「え？ ……キャアツ！！」

キュイーン……ズドーン！

「嘘……こんな威力……」

何もしないと強力な魔力砲が飛んでくる  
なのは達にはなす術が無かった

「……離れば高火力の砲撃、近づけば敵の集中砲火か……最適な  
作戦だな」

「でも、私達は諦めるわけにはいかないよ！ みんな、もう少し頑  
張ろう！」

だからといって何もしないわけにはいかない  
その思いだけで

「みんな、攻撃を集中して！」

彼らは破壊の名を持つ兵器に立ち向かって行った

「……………ほう、彼女達も立ち向かうか……………」

その戦いが誰かの描いた軌跡レールの上を通っていることを誰も知らない  
……………

一方、ギャラクシア小隊は見たこともない敵と交戦しようとしていた

「アムロさん……………あれは……………」

「ああ、何だ……………あの姿は？」

白銀の体に天使を思わせる純白の羽、天使の輪を身に纏った身の丈  
ほどの大剣、見るもの全てを魅了するその顔からは一つ目モノアイが覗いて  
いた。

「ヤツが何者でも構わん！ 敵ならば、ただ打ち砕くのみ！」

「ドモン！ ……仕方ない、総員攻撃開始！」

「了解」

戦いはこちらが有利だった

「ハアア……！ セイツ！」

ドモンが真正面から敵を攻撃し

「やるぞ、ジュードー！」

「わかったよ、カミーユさん！」

カミーユとジュードーが動きを牽制する

「アムロさん、今です！」

「了解したロラン……行け、フィン・ファンネル！」

ロランが全体の動きをカバーし、敵が近付こうとしてもアムロのフィン・ファンネルが阻み攻撃を許さない

「……………」

敵の表情はこちらからは隠れて見えないが明らかに焦っているようだった

「何だ？ 手応えがないな？ 手を抜くとは、敵も余裕だな」

「違います、僕達が勝っているんです。さあ、このまま押し切りましょう！」

「応！」

今回はカートリッジに余裕がありすぎる

「（何だ……この違和感は何か嫌な感じがする）」

しかし、アムロだけはこの圧倒的な戦いの中で違和感を感じていた

「学習項目の修正該当箇所、7件……」

そう、これはまるで敗北に進む戦いのように……

管理局地上本部では今後の対応のために会議が行われていた

「一体、奴らの目的は何なのだ!？」

「今は敵の目的よりも、敵に対する対策の方が重要だろうが!」

「そうだ!我々の安全のために早急な対策を取るべきだ……」

「第一、全ての局員は、私だけを守っていればよいのだ!」

しかし、高官達は自分の身の保身のためにしか局員を動かそうとせず財産や自分の家族を守ろうとしかなかった

「陸戦部隊のエースを自分の警護につかせる!」

「ならば航空隊は自分の家の上空に配置しろ」

高官達は自分勝手な態度をとっていた



「（……老害共が！ ふざけるなよ……）」

そんな高官達の態度にクロノの怒りは我慢の限界を迎えていた

「（駄目よクロノ……今は堪えなさい！ ……今はまだ……ね）」

しかし、リンディは何か策が有るようでも落ち着いていた

「いいな！ この通りに部隊を配置しろ」

「……了解」

しかし2人の立場は彼らよりも圧倒的に下、指示を聞くことしか出来なかった

「これは……ッ！ 隊長、こちらに一機、高魔力反応が向かってきています」

「何やて！…！」

「エンカウントまで30秒！…！」

「仕方無い……アイシクル小隊は出撃や！！ アースラをやらせる訳にはいかんで！」

「了解！」「」

そう言うとアイシクル小隊は出撃した

「はやてちゃん……無理はしないで……あなたは接近戦はできないんだから」

「わかってる。だから、前線はシグナムとヴィータにおまかせや」

「かしこまりました」

「おうー!」

「来ます!」

「リイン……行くで!」

「はいです!」

「ユニゾン……インツ!」

2人は遭遇の瞬間にユニゾンし淡く光り始めた。

「ほう……今回の相手は“夜天の王”か」

彼女達の目の前に現れたのは

「何でその名を知っているの!？」

今まで何度も彼女達を苦しめてきた

「君は有名人だからね。情報なんてどこにでもある」

ラウ・ル・クルーゼだった

「我が主を……侮辱するな!!」

シグナムは剣を抜くと、クルーゼに切りかかった

「ほう？ 君が“烈火の将”か」

「何ッ!？」

「フッフ、ハハハハ……どうした？ 動きが鈍いぞ……」

「チイツ……!」

しかし、クルーゼは容易く受け止め、シグナムは後ろに下がらざるおえなくなった

「クツ……行くぞアイゼン!」

「おやおや、そんな簡単に振り回して良いものではないよ」

「嘘だろ!？」

ヴィータが大槌を振り回してクルーゼを攻撃したが、容易く防がれ無防備な自分を晒してしまった

「つ、強ええ……」

「弱音を吐くな!!」

「2人とも離れて！」

「主!!！」

「いくで!! 響け、終焉の笛……」

「無駄だよ」

しかし、はやてが広範囲魔法を撃ち出そうとするとドラグーンが邪魔をしこちらの攻撃が届かない

「フフフ……ハハハハ……」

こちらの攻撃が全く通らない事に彼女達は苛立ちを覚えていた

この戦いを彼方で見つめる者がいた……

「いいのかよ？ あいつらピンチだぜ？」

そこにいたのは

「まだまだよ、もう少し後に行った方が……」

5人の男女

「なんだって言うんだよ？」

長髪の青年が皆を纏めているようだ

「ヒーローっぽいじゃないか」

「隊長の考えがわからない……」

「わかる必要なんてないさ。お前達はお前達の考えをもてばいい」

「じゃあ行っちゃまおうぜ？」

「それは許さない」

《職権濫用ですよ？》

「お前も言うようになったな」

《恐れ入ります》

『おい、お前達！ ボサつとしてないで少しは働け！！ 坊主から早く救援に迎えって通信が入った！！』

「チツ……あいつの命令なら仕方無い。いくぞ！！」

1人の青年の掛け声と共にそこにいた5人は戦場に赴いた

時空<sup>トキ</sup>を渡る旅人達は異なる世界で巡り会う……

見つけた居場所は本物なのか……

マホロシ  
悪夢に捕らわれた可哀想な破壊神

破滅の唄を歌うのは女神かもしれない

- E N D -

## 第二十話 悪夢（前書き）

これで第一章は終了です。

見ていて矛盾等が見つかったら連絡を下さい

## 第二十話 悪夢

「ハア……ハア……」

「グッ……！……ハア……」

「シグナム、ヴィータ……！」

はやて達アイシクル小隊も限界を向かえていた

「はや……て……」

「主……」

騎士甲冑は所々焼け焦げ、接近戦をしていたシグナムとヴィータにいたっては魔力も尽き、立っているだけでやっとの状態だった

「ククク……そちらのお嬢さん方も限界のようだ。いい加減に首を討たせて貰おうか……そうだな……止めはこのライフルでいいだろう……」

クルーゼはそう言うとはやてに狙いを定め、銃口を向けた  
はやて達が知ることは無かったが、クルーゼのライフルの名はユー  
キディウム、“審判”の名の下に彼は断罪を下そうとしていた

「……主！？」

「……逃げる！ はやてー！」



「わかつとる!!」

「フッフ……逃がしはしないさ」

「嘘ッ!!」

クルーゼは銃を下ろし、代わりにドラグーンが審判の一撃を放った

「はやて!!」

「はやてちゃん!!」

「主……!!」

「（あかん、避けられへん……みんな、ゴメンな……）」

はやては不意の攻撃に抵抗できずに身を固め目をつぶった

……

……

……

一瞬が、永遠のように感じた

「（……あれ?おかしいな……攻撃が来ない?）」

しかし、いつまで経っても攻撃は届くことは無かった

「いつまで、目を閉じてるんだ？」

「え……？」

はやてが声の聞こえた方を見ると、5つの影があった

「奴等は一体？」

「こちらは、管理局特殊部隊“Generations”隊長のマーク・ギルダー一等空尉だ、これよりそちらを援護する！」

「……………ッ!？」

彼が名乗ったその瞬間クルーゼとの間を割るように光線が横切った

「艦砲射撃か？」

更に新造艦ツアイベルがアースラに接近していた

「いいか、お前たちGenerationsの力をジークフリートの奴らに見せてやれ！」

「了解した……エリス、ラナ、ヤツをアースラから引き剥がす！」

「了解しましたマーク隊長！」

「任しときな！」

「ジュナスとレイチエルは艦の援護を！」

「了解！」

『アースラ、聞こえるか？ こちら巡洋艦ツアイベル艦長のゼノン・ディーゲル二等空佐だ！ これよりジークフリートに合流する！』

艦長のゼノン・ディーゲルがジークフリートに通信を入れた

彼らはその男の一言とマークの指示で攻撃を開始した

「……ほう……流石に数が集まると避けきれないか……」

それは光の雨、力の塊、クルーゼは盾で防いでいたが、全てを防ぐことはできずに攻撃があたり始めた

「どうした……もう限界か？」

「そうだな……限界のようだ……流石に、これ以上は分が悪いか……だが、せめて一撃は加えさせて貰おうか！」

『キヤアア……！』

「マーク隊長、アースラが！」

「……しまった！」

アースラに一筋の光が延びたが、アースラを仕留めることはできず

砲台を挟むのみで終わった

「チツ……仕留めそこなつたか……まあいい、攻撃も防御もできない無力な艦をいつまで守りきれるかな？ ……フッフ……ハハハハハ……」

クルーゼは再び笑みを浮かべ言葉を残しその場を去った

「アースラ！？ 大丈夫か？」

『機関部に多少の異常がありますが、航行には問題ありません』

『そうか……アースラはツアイベルの後ろに着け。いつやられるかわからないぞ』

『了解！』

「よし、俺達もこのオンボロ艦の護衛にまわる」

マークの一声で残りの4人も動き始めた

「桃色髪のねーちゃんとちびっ子は戻って休んでな」

「何だと！」

「文句を言うな。了解した、その代わりに主を守ってほしい」

シェイドの一言が余程気に食わなかったのか、ヴィータは反抗したがシグナムに止められた

「任せて」

エリスの一言で全員が散らばっていった

「リイン、ユニゾンアウトや。広域的に解析して全員に報告」

「はいですー!」

はやてはユニゾンを解き無事だったシャマル、艦の護衛で戦闘をしていなかったザフィーラと共に艦の直衛を始めた

「ウオツ……!」

「無駄です、その攻撃は“覚えました”」

「ドモン! ……動きが良くなっている……?」

ギャラクシア小隊は圧され追い詰められていた。

「ならば、フィン・ファンネル!!」

「そこです……」

攻撃を読まれてしまったために、組み立てた戦術は全て潰されてしまう

「学習項目の追加…… 3件…… 修正箇所、 1件……」

最初は有利だった状況も次第に攻撃は届かなくなり、巨大な大砲の攻撃が当たるようになった

「墜ちるよ……」のっ！」

「効きません……その攻撃は“覚えています”」

かろうじて攻撃を当てても全て防がれ天使シニガミの体には傷を付けることは出来なかった

「ここには欠片はありませんね、仕方ありません。撤退します…

……」

「………なんだ？ 撤退していく？」

しかし、それは“欠片”がないことを確かめると、何事も無かったかのように飛び去ってしまった

「コボレタカケラはいずれ役目を思い出します」

「何だったんだ……奴は……」

最後に聞こえたのは無機質な少女の声だった

「……ハア……ハア……このっ！」

「……！ クツ……邪魔だ！！」

サンダーボルト小隊とスターライト小隊は焦っていた

《カートリッジ残弾3本、マスターの戦術ではこれ以上射撃戦は不可能です》

「クッ……限界か……」

いくら攻撃しても有効打が通らない

「そんな……ヒロくんの射撃が効かないなんて……」

何度かキラとなのはも砲撃を当てたが防がれてしまった

《マスター》

「どうしたの？ レイジングハート？」

《上方に魔力反応です。それもかなりの》

突然デストロイの上部の砲身に魔力光が集まり始めた

《予測着弾地点……アースラです》

「そんな……」

その攻撃は明らかにアースラを狙っていた……

「何とかしないと……」

「体力的に皆さん限界です」

なす術が無い

そこにいた全員があきらめていた

「まだだ…まだ負けてない！」

しかし彼だけは希望を失っていないかった。月光を撃ち放つ少年だけは……

「アースラは……ティファはやらせない!!！」

ガロードのデバイスは形状を変え甲高い音が辺りに響いた

「……ガロード君？」

デストロイの砲身から魔力光が放たれようとしたとき、その前に一人の少年が立ちふさがった

その名はガロード・ラン

「こいつには、秘密兵器が搭載されているんだ!!！」

射抜いたその視線には覚悟と決意が宿っていた

「行くぞ、エックス!!！」

《共にどこまでも……》

ガロードは自信の愛機にある指示を出した

「サテライトキャノン！ スタンバイ!!！」



《Yes master》

その瞬間、ガロードの魔力が集中し、彼の前に巨大な魔法陣が出現した

「行けエエ！ サテライトキャノン……」

《Error……駄目です、マスター1人の魔力では出力が足りません》

「だったらカートリッジだ！ カートリッジフルドライブ！！」

《……まだです、まだ足りません。現在値60%》

しかし全てのカートリッジを使用してもガロード一人だけでは魔力が足りなかった

「だったら！ みんなの力を借りるだけだ……」

《理論上は可能ですが……危険です。マスターの疲労はピークに達しています。これ以上の酷使は危険です》

「そんな事は百も承知！ ……みんな、俺に魔力を集中させてくれ！」

「……え？ 何を言っているのガロード君、そんなの危険だよ？」

「無理は承知！！」

ガロードの目には決意と覚悟の炎が宿っていた

「……分かったよ！ レイジング・ハート……」

「死ぬなよ……ウイング！ カートリッジも使え……」

「絶対に成功させなさいよ……クロスミラージュー！」

「頑張つてガロード！ ……マツハキャリバー！」

「魔力……来たー！！」

《……出力100%、マスター！ 現在の出力なら行けます！》

「よっしゃー！ サテライトキャノン行けエエ！」

その瞬間、ガロードとデストロイから同時に魔力光が放たれた

ゴオオーー！

「ガロード………無茶苦茶だこんな魔力量は……皆さん、僕の後ろに下がって！」

キラは自身の傷ついた体を盾にして全員を守ろうとした

「手伝う……」

「刹那……」

刹那も自分自身を守るだけで精一杯な小さな盾を目の前に構えキラと共に守ろうとした

「クッ……!!」

「刹那くん!!」

「高町なのは……お前は下がれ……」

「でも……」

「援護する力が僕達にはありません。だからなのはさんは下がって  
いてください」

「わかった……ありがとう」

「待つて！ ガロード君が」

「グッ……このオー……!!」

放たれた魔力は互角だった

《これ以上は限界です。骨折等はありませんがこのままでは危険で  
す》

しかし、ボロボロの体に鞭を打って攻撃を放ったガロードの方が次  
第に押され始めて行った

「負けられないんだ……絶対に……」

「……ガロード！」

「ティファ……？」

「ガロード……あなたに、力を！」

《Over drive》

完全にガロードが押し負けそうになった時、ガロードの頭にティファの声が響いた

《出力リミッター解除……現在出力120%》

「撃ち抜けエエ……！」

その光は相手の魔力光ごとデストロイを飲み込んだ

「ハア……ハア……敵……は？」

爆炎が止むとそこには、何もなく静寂と暁の空が無音の空間を強調した

「やった……勝ったよ……ティ……ファ……」

しかし……既にガロードも限界を超えてしまっていた

「ガロード？」

「ガロード君？」

彼のデバイスは砕け、彼自身も破壊の跡が残る地上へと落下していった……

「ガロード……？ ……ガロードー！」

暁の空には、少女の悲痛な声だけが響いていた……

悪夢は灯す、絶望の炎を……

世界に訪れた静寂は始まりなのか……

しかし……終わらない夢など無い……

目覚めよ……勝利を齎す戦場の女神達よ

∴  
T  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## 第二十話 悪夢（後書き）

とりあえず第一章はこれで完結しました。

いかがでしたでしょうか？

多分、滅茶苦茶な文章だったと思います。

これからは第二章に突入していきます。

新たなキャラクターや予想外の展開など盛りだくさんになる予定です。

ぜひ見て下さい。

飽きないでくださいね？

## 追記

これからは更新頻度が遅くなります

5日で2話だったのが、一週間で一話のペースになります。

絶対に更新するので飽きないで見ていてください。

それでは一週間後に会いましょう。

## 第二十一話 少女の涙と蘇る力

「きゃああああー!!」

「何だ!? この魔力は?」

衝突した二つの大きな魔力の余波は遙か遠くアースラまで届いた

「チツ……外に出ている奴は退避だ!! 吹き飛ばされたくないなら艦に避難しろ!!」

「そりゃな、でも……」

「アースラ、推力低下! ……このままじゃ……」

衝撃波だけで周囲の建造物は吹き飛び、アースラも耐えられなくなり次第に墜ちていった

「総員、ツアイベルに避難しろ!」

「でも……このままじゃアースラが……」

「死にたいのか!?!」

「ゼノンさんの言う通りや、早く避難しないと死ぬで!」

「ッ了解!」

「大変だ! あんたらの仲間がガードってガキが墜ちたらしい!」



「なんやて!？」

「キラと刹那って奴も仲間を庇って大怪我だ」

「そんな……」

「俺達の負けだ………完全にな……」

相手にはデストロイの消滅以外大した被害が無く、自分達は何人もの怪我人と大量の死者

「生きているだけ幸いものや……」

負けを意味するその言葉に誰一人答えられなかった

ジークフリートは一度ミッドチルダに戻る事になった

「急いで!! 手の空いている人は聖王教会に連絡!」

隊舎に戻りガロードは医務室に搬送された

「シャマル、ガロードは大丈夫なのか？」

「ええ、身体には大きな怪我はないわ。でも、魔力は尽きかけているし、それに……」

「それに？」

「リンカーコアに異常なまでの負荷がかかっていたの。しばらくは絶対安静ね」

「そうか……」

一同は安堵の息を漏らした、しかし誰一人として安心する者はいなかった

「キラと刹那はどうなんだ？」

「二人の怪我は深刻よ。キラくんは頭を切っちゃって出血が酷いし、刹那くんは左腕を骨折しているわ。治癒魔法をかければすぐに治るけど……無理をされても困るからしばらくは使えないわ」

「……わかった」

さらに悪夢は続いた

「隊長……もう一つ、悪い知らせです……」

「なんや？」

「交戦中に管理局地上本部が襲撃を受けました」

「嘘や……」

「幸いに高官の方に死者は出ませんでした。戦闘に出た武装局員達に多数の死傷者が出ました」

「待って！ 今日はお兄ちゃんが……クロノ提督が地上本部で会議

に参加するって……」

フェイトの最悪の予想は的中した

「はい……クロノ提督は戦闘に参加されました。幸い亡くなってはいませんが、全治まで3ヶ月は掛かるそうです」

「そんな……」

地上本部は機能できないほどに破壊されてしまった。管理局は完全に敗北した

「……とにかく体を動かすんだ、いつまでも過ぎたことを気にしている暇はない」

「アムロさん……」

アムロの言うとおり後悔している暇はなかった。いつまた敵が地上本部を攻撃するかわからない

「私達も黙って待っている訳にはいかへんで……動ける連中は周囲の警護や、ただし二人以上でペアを組んでカバーしあうこと」

「了解」

彼女達は今為すべき事を再確認し、散らばっていった

ティファは中庭にいた

「ガロード……」

自分がガロードを傷つけてしまった……  
敗北に導いてしまった……

少女の心はそんな後悔とあったかもしれないifの選択肢で埋め尽くされていた……

「どうしたんだお嬢ちゃん？ そんな死んだような顔をして」

「……………ッ！？」

しかし運命は彼女に後悔と懺悔の時間すら与えようとしなかった

「……………ッこの反応は！？ 大変ですはやて隊長！」

「どないしたんや？」

「敵が……敵が隊舎を囲んでいます！」

「数は！？？」

「それ程多くはないですが……………一つだけ別方向から向かって……………嘘ッ！……」

「何や！？？」

「何で……………？ 何であの子が……………」

「誰かおるのか？」

「……ガロードと一緒にいた子……ティファ・アディールがいます」

「ッ！！ 急いで誰かを向かわせて！」

「無理です！！ 他所でもMSが現れて攻撃を開始しています。皆さんが応戦していて人員を割くことができません」

「すみません、自分が出撃します」

通信に出たのは だった

「君だけじゃ無理や。そんな状態で……」

「お願いします。出撃の許可を」

「わかった。ただし、も連れていくこと。後は2人とも怪我人だから無茶をしないこと」

「はい！！」

そう言って は通信を切った

「イ、イヤッ……こないで！」

襲ってきたMSの中に一人の男の影があった

「いいねえその表情、そそるねえ、死ぬ前の顔だ……ま、今から殺すからあまり関係ないけどなア！」

右肩から大剣を背負い無精髭をたくわえた粗野な顔付きの男、刹那を連れ去り洗脳し少年兵として扱った最凶の傭兵、“アリー・アル・サーシエス”だった

「折角来てやったんだ、少しは丁重にもてなしてくれよ」

彼は少数の機体と共にやって来た

「まあ、アポイントも無しで来ちまったんだ。仕方ねえか」

しかし、少数といえども先の戦闘で疲弊し怪我人も多く抱えているジークフリートにとって大きな脅威であることに変わりはなかった

「こないで……こないで……イヤ………」

ティファは逃げる事ができなかった

恐怖で足が動かない、一般人ならば当たり前の反応である

「おいおい、腰でも抜かしちまったか？ つまんねえな、逃げるのを追いかけながら殺すのが楽しみだったのによお！ まあいい、サクツと死んじまいなア！」

「……………イヤツ!？」

ヒュンツ……………!

「チイツ…! 誰だ邪魔しやがるのは」

サーシエスがティファに大剣を向け攻撃しようとしたとき彼女の後ろから短剣が飛んできた

「……何？」

ティファが振り返るとそこには2人の人影が立っていた

「大丈夫？」

「……なぜ、貴様が生きている？」

「あなた達は……」

そこには刹那とキラがいた、しかし刹那は左腕を包帯で固定しキラは頭に包帯を巻いており、見ているだけで痛々しさが伝わってきた。二人ともデバイスには罅が入り刹那のエクシアに至ってはGNソードの半ばで折れていた

「ハッ……誰かと思えばクルジスの兄ちゃんとスーパーコーディネーター様じゃねえか！」

「な、何で知っているんですか!？」

「まあ、クライアントからの情報だ、細けえ事は気にすんなよ」

「……アリー・アル・サーシエス、貴様だけは！」

「ハッ……来いよ！　まとめて相手してやるからよオ！　ソレスタルなんたら……いや、今はジークフリートか！」

サーシエスは敵の存在に歓喜し刃を彼等に向けた

「来る!!」

「接近戦ならば!」

2人は限界の近い体に鞭を打って詰め寄ってくるサーシエスを迎え撃とうとした

「ウオオ!」

「ハアアア……!」

「良いねエ……やっぱり戦争たたかいってのはこうじゃねえとなア!」

「……クツ、ウワア!」

「……刹那!?」

刹那は応戦しようとGNソードを向けたが刃が途中で折れているために全力を出せずに弾かれてしまった

「よそ見してる暇があんのか? 良い身分だなアスーパーコーディネーターさんよオ!」

「……グツ!」

キラも一番損傷が少ないソードストライカーで応戦したが、熟練の傭兵を倒せるほど甘くなかった



「オラオラア！！ その馬鹿でけえ大剣は飾りかよ。それとも何だあ？ コーディネーター様は手加減しているのか？」

蹴りと同時に射撃を繰り出し大剣を向けたかと思えば銃を撃ち込む、ラフファイトじみた戦術にキラと刹那は次第に追い詰められてしまった

「これで………終いだ！」

「グッ………グアアア！」

「うわっ………！」

サーシエスの一撃で2人の武装が砕け散った

「クッ、ここまでか………」

「せめて、ティファさんだけでも………」

「神様へのお祈りはすんだか？ 居るわけもねエ神様によオ！」

二人の武装は砕け戦う力も残されていない

「旦那には“好きにしている”って言われたしな」

絶体絶命の状況

「まずはスーパーコーディネーター様からあの世に行っちゃいな！」

止めを刺すかのようにサーシエスは詰め寄ってきた

ガアアアン!!

サーベルがぶつかり合う音がした

「やらせるかよ!」

「ああ、何だお前?」

傭兵の前に一人の少年が立ち塞がった

「そんなお粗末な武器で刃向かうのか? 面白いじゃねえか!」

彼はボロボロのライフルを左手に持ちサーベルで大剣を押さえつけた

「みんなは……ティファは俺が守る!」

少女のためにガロードは立ち上がった

「ハツ……ナイト様気取りってかア? いいねエ、最高だア!」

戦いが続くことにサーシエスは笑みを浮かべガロードに切りかかった

「ガロード……」

「心配しなくてもすぐに終わらせるから……ちょっとだけ待っててくれよティファ!」

本人は病み上がり、さらに頼みのサテライトキャノンも壊れていて使えない

「さあて……行くぞエックス！」

《前にも言いましたよ？ 共にどこまでも……と》

そんな状況の中でも彼には秘策があった

最初の戦闘の終了後

ガロードはデバイスルームに来ていた

「なあ頼むよ、武器を造るだけなんだからさ」

「無理です！ 私にはキラさんやアムロさんのデバイスの整備もあるんですよ！」

ガロードはシャーリーに新型武装の製作を依頼していた

「別に今じゃなくてもいいんだ。データを見てくれるだけでもいいからさ。ほら！ こんな感じの武器だよ」

ピクッ……

「し、仕方ないですね、見るだけですよ」

そう言いながらもシャーリーは知的欲求に呑まれていた

「これは……」

彼女に見せたデータに映っていたのは大砲を備えた巨大な盾

「はぁ……わかりました。時間があるときに作ります。でも、いつ完成するかはわかりませんよ」

「サンキュー！！ 期待してるぜ」

《私は反対ですよ》

「どっしてさ？」

《新型武装の変更は以前の武装データに上書きする事になります。サテライトキャノンは使えなくなってしまうので総合的な火力は減少してしまいます》

「そんな事はどうだっていい！ ティファを助ける為に、もう一度俺に力を貸してくれエックス！」

《わかりました。もちろんですよ……我が主ガロード》

しかし彼は仲間を、ティファを救う為に躊躇うことなくダウンロードロードを開始した

《ダウンロード……完了》

「よし！ 行くぜ！」

《All right!》

ダウンロードはすぐに終了しデバイスの新武装を起動した

「デバイスダー！」

現れたのは不可思議な形状の盾、なにが起こったのか理解できなかったサーシェスだったが問題ないと判断するとすぐに攻撃を再開した

「ハッ……何かと思えばただの盾じゃねえか！」

「コイツをただの盾だと思つなよ！」

「ハア……？」

「行くぜっ！」

「ハッ、やることはガキの遊びじゃねえか！ そんなんだから真つ二つにされるん………だよっ！！！」

新しいライフルを連射し弾幕を張るガロードに肉薄し大剣で両断しようとしたが目の前のガロードが視界から消えた

「消えやがった………だと？」

「だから言っただろ……… “ただの盾だと思つなつて” さ」

「馬鹿にしゃがってエ！」

「まだまだ！」

ガロードはディバイダーに付いているブースターで移動した

「（なんだ…あの機動力は？）」

予想以上の高機動がサーシエスを攪乱し、わずかだが隙が生まれた

「今だ、ディバイダー！」

《All right! Brasser mode!》

ガロードは一瞬の隙を逃さなかった

「グアアツ！ ……チツ、これだから割に合わねえ仕事は嫌なんだよ」

ディバイダーを前に掲げサーシエスに光の雨を浴びせたのだ

「……まあいいさ。目的は果たしたし次の戦いまでその命を預けてやるぜ」

形勢不利と判断したサーシエスはそのまま離脱していった

「ガロード！」

「ティファ……良かった……無事で……」

「ガロード!？」

ガロードはティファの無事に安堵すると、死んだかのように眠ってしまった

「ガロード……ありがとう……」

気を失ったガロードを自身の膝に乗せたティファは彼の頭を撫でながら涙に濡れた顔に優しい笑みを浮かべていた

どこまでも青く晴れ渡る空は、新たな力を得た少年と彼にとって勝利の女神である少女を優しく見守っていた

第二十二話 正義の意味（前編）

「クソツ……！俺達のやっていることは一体何なんだ………」

アスランは悩み続けていた

【アスラン……君達のやり方は多くの人をただ不幸にするだけだ！】

「本当は俺だつて分かっているさ……こんなやり方が正しいワケが無いことくらい………」

正義と言う大義名分のために武力を使うことが本当に正しいのか……そして何より親友と敵対してまで求める正義が本当に正義と呼べるのかを……

「……アスラン」

「……シンか？」

シンがやってきた

「一体あんたは何を悩んでるんですか？」

「悩んでないぞ………」

「そんな顔して言っても説得力無いですけど」

「………」



「ま、どうせあの人と戦っているうちに自分がやってることに疑問を感じたんでしょ？」

「……ああ、確かにそうだ。だけど、この世界が腐ってるのも事実なんだ……俺は一体どうすればいい？」

「はあ……アンタらしくもないですね。」

「何……？」

「だって、そうでしょ？ アンタは昔、自分の為に……仲間のために自分の親と戦った。この前の戦争の時だって、自分の意思に従って、俺や議長と敵対した。それなのに今のアンタは、ただ悩むだけで動こうともしない……」

「……ッ！？」

「ま、アンタがどうしようが勝手ですけど……行動を起こすなら、俺も協力させてもらいますよ“アスランさん”」

最後にアスランに言葉を残してシンはそのまま部屋を出て行った

「俺は……」

アスランの目にはもう迷いはなく、過去との決別を決意した表情だけが浮かんでいた

「クッ……敵の数が多い！ 魔力の無駄遣いだけはするなよ！」

「アンタに言われなくてもッ……！」

アスランとシンの逃亡劇は突然始まりを告げ、終わりなど見えないかのように続いていた

「シン！ 魔力は温存するんだ。ここの敵は俺がやる」

追っ手を振り切ろうと全力で飛行してはいるが数が多く敵も簡単には逃がしてくれない

「そんなこと言って……このお！」

「……ッ！ シン危ない！」

「え……？」

シュツ……ドカアアアン

数えるのを諦めたほどに敵を倒し、隙をみて逃げようとしたが、突然目の前に飛んできた光線によって目論みは阻まれた

時間を遡ること数瞬前

「チツ……思い出しても腹が立つぜエ……」

サーシエスは荒れていた

「クソツ……だからガキは嫌いなんだよ」

不意打ちとはいえ子供に負けた

「考えは馬鹿正直なくせにやることが滅茶苦茶だ」

“こちら”の世界に来てから初めての汚点だった

「ン……？ 派手にドンパチしてんなア……それにアイツらは」

その時、目の前に2つの人影が見えた

「確か……アスランとシンだったか、クルーゼの部下だろ？ 何で戦ってたんだ？」

明らかに味方である機体を破壊し逃げているように見えた

『やあ、サーシエス』

突然、思考を断つかのように通信入った

「クルーゼの旦那か？ 一体何のようだい」

『なあに、君にちよつとした依頼（頼みごと）さ……』

「頼みごとだあ？ こっちはムシヤクシヤしてんだ！ 馬鹿みてえな仕事だったらやんねえぞ！」

『なに、簡単なことさ……今君の目の前にいる2人を始末して欲しいんだよ。これなら君も憂さ晴らしが出来るし……予定を修正できる』

「始末って……良いのか旦那、一応アンタの部下だろ？」

『フフフ……別に構わないさ彼らは裏切り者だからね……まあ、やり方は君の好きにしていよいよ』

「ハッ……そういうことなら任せときな旦那ア！」

『フフフ……期待しているよサーシエス』

「こりゃあいいや………そういうワケだから、俺の憂さ晴らしのために死んじまいなア！」

狂気的笑みをを浮かべ二人に向かって大剣と言う名の銃を向けた

時間は今に戻る

「……ッ大丈夫かシン？」

「ああ、それよりアンタこそ大丈夫なのかアスラン？」

「………なんとかな」

アスランはシンを庇い、シールドが砕け散った

「ハッ………今を防ぐとは、いいねエ………最高だアもつと俺を楽しませてくれよ裏切り者さんよオ！」

「貴様は……」

「アリー・アル・サーシエス!!」

「話す余裕があんのかよ! いい身分だなアコーディネーター様はよォー!」

サーシエスがストレスを発散するかのように連撃を加えてきた

「(クツ……どうする? ヤツの強さは以上過ぎる、何か……方法は無いのか?)」

アスランは必死だった

シンを守りながら逃げきらなければいけない

「グツ……このっ!!」

サーベルで大剣を捌いてはいるが、不規則な剣裁きに次第に腕が痺れてきた

「オラオラア!! 守ってばかりじゃあ簡単に切り刻まれちまうぜえ!!」

しかし目の前にいるのは歴戦の傭兵であり、付け焼き刃な戦術や技術では通用しない

「さて、そろそろ殺しかねえと旦那に文句を言われちまう」

万事休すだった

「じゃあ……早速死んじまいなア!!」

ヒュンッ!

「……!? 何者だア?」

絶体絶命のこの状況で上空から二つの光線が降り注いだ

「お、お前達は……」

「隊長、敵の反応は依然としてこちらに向かってきています」

一方、この戦闘はジークフリートでも観測されていた

「戦っているのは誰や?」

「分かりません。ただ……管理局員では無いことは確かです」

MSの反応に交戦中と思われる魔力の流れ、さらに複数の強大な魔力、明らかにこちらに向かってくる魔力の反応に焦りを覚えた

「(このままやと市街地に侵入されるな……)よし、ヒイロ君とカミーユ君で先手をとって、アムロさん、ロラン君、ジュードー君はもしもの為に市街地の防衛を」

「了解!!」

気付かない振りをして戦況を悪化させるわけにもいかない、現場にはヒイロとカミーユを向かわせ、ロラン、アムロ、ジュードーを市街

地の護衛に行くように指示した

「お、お前達は!」

アスランが上を向くと二人の男がいた

「ああ? テメエらがなんでココにいるんだ“フロスト兄弟”?」

「フツ……愚問だなサーシェス。私達も依頼を受けたのだよ」

「だから、僕達にもやらせてもらおうよ?」

「チツ……邪魔だけはすんじゃねえぞ!」

「了解した……我々も行くぞ、オルバ!」

「分かったよ、兄さん」

二人は戦場に介入し、アスランとシンに攻撃を仕掛けてきた

「さて、最初は責様からだ……」

シャギアの向けた銃口はシンを狙っていた

「……やらせるか!」

「フツ……!」

ガガガ、ドカアアアン

「アスラアアン！」

アスランはシンを庇い二人の攻撃を受けデバイスが破壊された

「グハアツ……………」

そのまま重力に従い落ちていったが、シンが抱えて地面に激突することだけは避けられた

「ハツ……………味方を庇うとは粹なまねすんじゃないか！ けどよ……………」

「クツ……………ここまでか？」

「俺のためにサクツと、死んじまいなアアア！」

2人の息の根を止めるためにサーシエスが大剣を突き立てて詰め寄ってきた

「チツ！ ……こうなったら……………」

シンはとっさにデバイスから“赤い宝石”のようなものを取り出し、ライフルで撃ち抜いた

キュイイイイン……………ピカーーン……………ドオオオン！

「な、なんだア！？」

赤い宝石はエネルギーを爆発させるように光線を拡散させ、その場にいた全員の目を眩ませた



「……………フム、逃げられたか」

「そうだね、兄さん」

目が慣れ始め、周囲を確認すると二人の姿は見えなくなっていた

「チツ……………テメエらが来たせいで逃げられちゃまったじゃねえか！」

サーシエスはフロスト兄弟に怒りをぶつけた

「ほう？ ……自分のミスを人のせいにするとはな。 ……ここは危険だ、帰るぞオルバよ」

「わかったよ、兄さん……………サーシエス、君も早く退避した方が良いでしょう」

しかし二人は嘲笑するようにサーシエスの言葉を受け流し、その場を離脱していった

「ちよっ……………待てやコリア！ ……ふざけんなアアア！」

サーシエスは地団太を踏むかのように辺りに銃を撃ち続けていた

その戦いは彼の者の思惑が絡んでいた

「チツ……………物事はこうも上手くいかんものか……………」

仮面を被り素顔を隠していたがその仮面の下には明らかに怒りがこ

み上げているようだった

「まあいいさ、世界はこれで動き始める」

仮面の下の怒りは身を潜め、代わりに歪んだ笑みがこぼれていた

「さて、いい加減に我々の行く末を決めなくてはな……」

矛盾した2つの正義の上で哀れな道化師ビエロは踊る……数々の野望おもいを抱いて……

— E N D —

## 第二十三話 正義の意味（後編）

ある男の後ろでアスラン達の逃亡劇を見ている者がいた

「いい加減に我々の行く末を決めなくてはな……」

その男……ラウル・クルーゼの顔には狂気と歪んだ笑みが浮かんでいた

「グラハム、ゼクス……君達に新しい命令だよ……」

「ほう？ 事と次第によっては命令は踏み倒してもいいのだぞ……」

「まあ、何とでも言う方がいいさ。だが私は“新しい命令”と言ったのだが……」

「グッ……」

「まあ、君達が“自主的”に従っていてくれれば私も何もしないさ」

「分かった……従おう……」

「君達には……」

命令を聞いた彼らは憤慨していた

「馬鹿にしているのか……作戦だと？ ……なんと無意味な戦いを求めるのだ！」

自らの掲げる道に反する余りに“非道”な命令に……

「だが、我々にはどうすることもできない……（こんな私を笑うかヒイロ？）」

しかし、逃げることはできない  
敷かれたレールの上に乗ってしまったのだから……

「こんな所で何をしている？」

突然、影から声が聞こえた

「き、貴様らは……」

「もし良かったら、君達に僕達の力を貸そうか？」

「貴様等に従う道理はない」

「だが……ここで無意味に朽ち果てる道理もないだろう？」

そう言う彼等の口調は先を見据えるように、真っ直ぐで

「君達にメリットがあるとも思えんな」

「何、考えて分かるような事ならば既に防がれているだろう?」

誰かを納得させるには十分理論的で

「我々は君達の助けになりたいだけさ」

そして……どこまでも歪んでいた

「クツ! こつも敵の数が多いとは………」

「走れるか?」

「生憎、私には修羅の道しか残されていないのでな」

「奇遇だな、私もだ」

2人は 達の手引きで逃げ出したが、行く手をMSに阻まれた  
だ逃げることしか出来なかった

「ならば手段は………」

「同じ事を考えていたようだな………」

「サキガケ!」

「トールギス!」

「セツトアップ!!」

2人は戦うことを選び武器を構えた

「貴様と背中を合わせて戦えるとはな……」

「フツ……我が武士道、戦いの中に極みを見つけ出した」

2人の表情は逃げているときは全くの別人で交わす言葉の隙間からは笑みがこぼれ落ちていた

「行くぞ！」

グラハムはそう言うのと左手に持った剣を構え、敵の中突っ込んでいった

「ハアアア！」

グラハムの剣はまるで踊っているかの如く、流れるような剣裁きであった

「そうだ！！ これこそが闘い！」

迫り寄る一機を凧ぎ払い

「邪魔などは……」

余力で進路上にいた二機を切り裂き

「誰にもさせん！」

振り向き様に背後にいた一機を破壊した

「これが我が刀の力」

「ほう、ならば私も武勲を見せねばな」

その姿を見ていたゼクスも自らの剣を構えて敵の中へと向かって行った

「ハアッ……！」

ゼクスの剣には鋭さがあつた、グラハムの剣を“柔”だとするならばゼクスは“剛”であろう

元々、グラハムが“武士道”を重んじるのに対してゼクスが重んじるのは“騎士道”だからだ

「排除させて貰う……！」

目の前にいた三機をサーベルで尻ぎ払い

「距離をとつても……！」

数メートルはあつた距離を一瞬で縮め

「無駄だ！」

肩掛けの大筒から一撃を放った

「ハア……ハア……、粗方は倒したか？」

「いや……厄介なのがいるな……」

彼等が見つけたのは

「アア……チクショウ！ 今度はこいつらかよ！ もういい加減ウンザリしてきたぜ！」

気が立ちきっているサーシエスだった

「この様な輩に絡まれるとは……」

「我々もついでいな」

「まあ、あいつ等よりはマシな戦いができるか。そんな訳でさっさと構えなア！ 今の俺は紳士的だ。テメエらが構えるまで待ってやるからよオ」

「どつする？」

「戦うしか無かるっ……」

2人は先程の戦いで体力も魔力も消耗しきっていたが、表情には出さずむしる戦えることに喜びを感じているようだった

「なかなか良いツラじゃねえかア！ 久しぶりにオモシロい戦いができそうだア」



「いざ……」

ゼクスが大筒を構え

「……尋常に」

グラハムが刀を居合いに構えると

「「勝負！」」

突っ込むようにぶつかっていった

「行くぜエエエー!!」

サーシエスも迫り来る2人を迎え撃つかのようにぶつかった……

「ハハハ……彼等も従わぬか……やはり、世界を変えるのは……」

彼らの戦いは必然なのか

それとも……運命の悪戯なのか……

物事には波がある

運命にも

行動にも

そして……それは戦いにおいても変わらずに有るものだ

「ホラホラア！ さっきまでの威勢はどこに行ったんだよ！ 少しは俺を楽しませなア！」

始まりは勢いのあった2人だったが疲れや魔力の消費、精神的な摩耗ですり減った集中力  
様々な要素が重なり合って勢いは崩れさってしまった

「2対1でこうも不利になるとは……」

「しかし、まだ勝敗が決したわけではない！」

不利を悟りながらも2人は動きを休めることは無かった

「少しはやるじゃねえか……… だったら隠し玉でも使ってみるか」

そう言うサーシエスは不敵な笑みをこぼした

「何が来ようと我等は負けん！」

「だったら…… 逝っちまいなア！ ファングー！」

サーシエスが叫ぶと周囲から縦横無尽に迫り来る8つの牙が2人を襲った

「何と！？」

「ハッ！ かわせるもんならやってみな！」

ゼクスはトールギスの助けもあり、逃げきることはできたが、グラハムは囲まれ銃頭の餌食となってしまった

「ならば！」

ゼクスもデバイスから赤い宝石を取りだそうとしたが

「おっと……危ねえな」

「何ッ！？」

「止めときな。あのガキが使った手ならもう通用しないぜ」

サーシエスには作戦が見えていたようで、デバイスを弾き飛ばされてしまった

「そうだな……確かに思慮が欠けていたようだ……だが……」

「……アアン？」

「我々は“1人ではない”ことを失念していたようだな！！」

「なっ！」

気付いたサーシエスがグラハムを止めようとしたが遅かった

「ウオオオオ！」

グラハムは自身のデバイスに付いていた赤い宝石を叩き割った

キュイーン

再び金属音と共に目が潰れてしまうような強烈な光が当たりを覆った  
光が止むとそこには誰もいなかった

「クソっ……またかよ!? ああ! ……コンチクショウ!!」

サーシエスは怒りをぶつけるかのように、銃を撃ち続けた  
しかし、彼の怒りを受け止めきれぬ物は存在せずただ、辺りを破壊  
していた

「ハア……ハア……」

二人は川辺にいた

「大丈夫か……ゼクス?」

「……ああ」

「クッ……全然余裕がないではないか……」

何とかサーシエスから逃げることは出来たのだが途中で体力の限界  
を迎えてしまっていた

「グッ……」

逃げたのは良いが居く宛も無く川沿いを歩いていた

「クツ……………どうやら、ここまで……………か……………」

「……………グラハム、フツ……………どうやら私も限界だな……………」

しかし、地図もなく歩き続けた彼らの体力は既に限界に近かった

さらに先程の戦闘でデバイスを失ってしまったのが災いした

デバイスの生命維持機能が使用できず、その場で意識を手放してしまっただ

「……………ほう？ 久しぶりだな 。君も敗者となったか……………」

「そんな事を言っている場合ではありません。すぐに運びましょう」  
完全に意識を失う直前のゼクスの耳にはそんな会話が入ったが、それが夢か幻か……………それを確かめる術は彼にはなかった

は椅子に腰かけていた

「どつやら、彼らはうまく逃げられたようだね……………」

「ああ……………そのようだ」

ふと、背後から声が聞こえたので振り返ってみると　　がいた

「これで我らの計画もまた一歩進んだな……」

「そうだね」

「さて……新たな依頼だ……」

「どうするの？」

「決まっている……行くぞ」

「分かったよ」

そこで会話は途切れ、そこには椅子が静かに佇むだけだった

「ここが、指定ポイントか……」

「ああ……そうだな、ヒイロ」

ヒイロとカミーユは交戦があったと思われるポイントに来ていた

「遅かったか……」

しかし既に戦闘の反応は無く、銃痕のみが生々しく残っていた

「……誰かが下にいる」

「みたいだな……」

二人は気付いていた、下に人がいることに

「ハア……ハア……クソツ……ここまで来て、捕まってたまるかよ  
！」

シンは森の中に隠れていた、体力の尽きたアスランを抱え必死に追っ手から逃げようとしていた  
しかし、シン自身も体力の限界を向かえており敵が来ていたらあつという間に倒されているだろう

「……………ッ！ 誰がいる」

上空を誰かが飛行している、その事実がシンを焦らせていた

「……………クツ、諦めるしかない……………いや、何か方法が……………」

「そこに誰がいるのか？」

「投稿しろ……………身の安全は保証する……………」

「クソツ……………ここまでかよ……………チクシヨウ！」

シンは投降した、他に方法はなかった

「……ツァンタ達は」

両手を挙げ彼らの前に現れるとシンは自分の勘違いに気付いた

「……………（ふう、助かった）」

“奴ら”ではない

摩耗しきっていた精神は安心感により限界を迎えシンはその場に倒れた

「……………連れて帰るぞ」

「わかった」

ヒロとカミーユは2人を連れて帰ることにした

「カミーユ・ビダン……………報告を頼む……………」

「わかった……………」

投降してきた以上、身の安全を確保しなければいけなかったのだ

『……………と言っわけで、投降してきた二名の身柄を保護することになりました。引き続き警戒を続けてください』

「了解した、だが報告はもう少し簡潔になルキノ」



『はい』

アムロ達は通信を聞き安堵していたがしかし、気を抜くわけにはいかなかった

いつ、敵が来るかもわからない

「どうだったんですか？」

「ロランか、ヒイロとカミーユが2人の身柄を確保したそうだ」

「良かったですね、これで何か情報を得られるかもしれませんよ！」

「そうだな、ロラン」

「あー、もう戦闘はこりこりだよ」

「気持ちはわかるが俺達の仕事は残っている、気を抜くなよジユド」

「わかってるって!」

「……………（だが、一体何だ？ この胸騒ぎは）」

ジユドとロランは安心しきっていたがアムロは警戒していた

「……………」

その光景は上空から覗かれていた  
白い翼を身に纏い背中から虹色の光をばらまいていた

「項目修正……」

その姿は幻想的で魅惑的

「検索……該当無し……」

そして、恐ろしいほどに狂气的であった

「……学習完了、離脱します」

“ソレ”は用が済むと、何事も無かったかのようにどこかに去って  
いった

道化師達は矛盾に踊らされながらも歯車を壊し続ける……  
壊れた歯車は止まることなく動き続ける

- END -

## 第二十四話 自由と正義の衝撃

「ここは……一体？」

シンは気がつくくと白い空間にいた

「あつたかい……」

そこはとても暖かく常に何かに包まれているような感覚があった

「俺……死んだのかな？ ……え!？」

突然目の前に柔らかい光が降り注ぎ声が聞こえた

「シン……起きて……」

「き、君は……俺は死んだからここにいるんじゃない」

「うっん……シン……まだ、生きてる……だから、あっちにいっちゃダメ……」

その声はそう告げると、少しずつシンから遠ざかっていった

「待って……なんでここに……」

「待ってるから……」

シンは重い体を必死に動かしてその声に近づこうとした

「行かないでくれ……ステ……ッ!？」

手を伸ばして声の主を掴もうとしたが

「……………え？」

シンが掴んだのは白衣の裾だった

「……………大丈夫？ 酷くうなされてたけど」

シャマルはシンがおこした突然の行動に驚いていた

「あ、あなたは？ (アイツじゃない……か)」

「私はシャマル、医務官……簡単に言えば医者よ」

「医者……それじゃここは病院？」

シンは声の主が夢の住人だったことに肩を落としながらも、場所を  
尋ねた

「いいえ……ここはジークフリートよ……熱は無いわね、汗かいて  
いるみたいだけどタオルはある？」

「お願いします……じゃあ、ここがあの人達の部隊」

「はやてちゃん？ うん、あの子が目を覚ましたわ。はい、はい。  
ええ、わかりました」

「あの……アスラ……もう一人は？」

「まだ隣で寝ているわ」

「そうですか……」

シヤマルは聞かれたことに的確に答えながらも、適切に処置を施していった

「どうだい、何か分かったかなシャーリー？」

「ええ……わかったと言うよりも、いくつか気になることがあるんですよ」

「気になること？」

デバイスルームではシャーリーとアムロがシンと呼ばれていた少年のデバイスを解析していた

「はい、彼のデバイスは通常のものよりもむしろ……アムロさん達のARM・Sデバイスに近いんです」

「起動もしないでわかるのかい？」

「ええ、本体の表面に付着した残留魔力とプログラムの形状からその判断できました」

「なるほど、俺達のデバイスに近いか……それだけなら別に不思議ではないんじゃないか？ 彼はキラと同じ世界の間人……次元漂流者らしいからね」

「ですが……一つだけ大きな違いがあるんです」

「大きな違い？」

「はい……実は、本物の魔力の他に不思議な反応が残っていたんです。多分、人口的に産み出された魔力に近いもの……強いて言うなら疑似魔力ですね」

「疑似魔力？」

「ええ、何かしらの方法で本物の魔力の他に擬似的に作った魔力に近いものを使用していますね」

「わからないな……彼らにもカートリッジを作る機会があったらどう？」

「必要性の問題ですね。カートリッジシステムを使用せずとも長期戦が可能になるならば、疑似魔力だけで十分だと思います」

「なるほど、疑似魔力か……まあ、わからないことは後で聞けばいいわ」

「そうですね」

そう判断した二人は次の、作業に移った

壊れたデバイスの修復と、新たに作製を依頼されたデバイスの開発  
ガロードのデバイス“X”は先の戦闘で上書きされ、修復されたが、  
キラと刹那のデバイスは完全に破壊されてしまっていた

幸いとして人格データは残っていたが、武装は修理不可、そのため  
に二人は新装備のデータを用意して持ってきていた

「失礼します……シャーリーさん、もう一つの武装案を持って来ま  
した」

「キラさん？ もう武装データは貰ってますよ？」

「もしかしたら必要になるかもしれないので。一応このデータも別  
のデバイスとして造ってくれませんか？」

「……わかりました」

キラの目には隈があり、必死になっていることは明白であった

「シャーリーさん、僕達のせいで負担をかけているのは分かります  
があまり無理はしないでくださいね」

「……キラさん、別に私は無理なんかしてませんよ？」

「だが……これだけの仕事量だ、少しは俺達を頼ってくれ」

「ありがとうございますアムロさん……ですが、これは私の仕事なので」

キラとアムロはシャーリーのことを気にかけていた、自分の仕事だからと言って、体調を崩してしまつては元も子もない

「キラさんやアムロさんは、常に命の危険がある戦場で戦つています……だから、私が皆さんにできるのはデバイスを最高の状態に上げるだけなんです……」

「そんなことは……」

「それに……キラさん達に戦場があるように、ここが私の戦場であり、私の戦いなんです！」

「シャーリーさん……」

「行くぞ……キラ」

「でも……分かりました、アムロさん……シャーリーさんあなたの覚悟は分かりました、それでも僕はあなたに無理をしてほしくありません。だから、何かあったら頼ってくださいね……絶対に力になりますから」

しかし、シャーリーの覚悟を聞いてアムロとキラは黙って部屋から出て行った

「（ありがとうございます、キラさん）……さて、解析の続きをしますか！」

シャーリーは一人で作業を続けていた



「はあ……………」

自分達が解明できない技術

“疑似魔力”

その、彼女達では有り得ない技術が情報を混乱させているが、少しでも解析しなければファブニールと対等に戦うこともできない

「（構成物質も不明……………じゃあどうやって……………でもその前に大量に浴びたら後遺症が残っちゃうかも……………」

キラの前では強気な発言をしたが心の中には不安のみが漂うばかりだった

医務室ではシンが、はやてと守護騎士に囲まれ簡易的な事情聴取を受けていた

「私がこの部隊の隊長の八神はやていいいます。今から質問するけどわかる範囲で答えて下さい」

「……………はい」

「それじゃ聞くけど、君の名前は？」

「シン・アスカです……………」

「じゃあシン君、君達の組織の正式な名前はなんて言うんや?」

「わかりません。……ただ、管理局でファブニールと呼ぶので自分達もそう呼んでました」

「そうか……構成とか技術力なんかでわかる事ってある?」

「……すみません」

「いや、謝らんでもええ……最後の質問や、なんで裏切ってまでこっちに来たんや?」

「それは……アイツらのやり方について行けなくなっただからです。それに……この部隊は他の管理局のヤツらと何かが違うから……」

「そうか……よしこれで質問はおしまいや! 悪かったな起きたばっかで無理矢理に」

「いえ……」

シンは質問に的確に答えていたが常に隣を気にしていた

アスラン

「あの……まだ起きてないんですか?」

「ん?」

「その……アスランは無事なんですか?」

「ああ、隣の彼やな。シャマル、どうなん？」

「彼ならバイタルも安定しているし怪我も左腕の打撲と頭の出血以外は見当たらないから命に別状は無いけど……疲れていたのね。魔力量もかなり減っているみたいだししばらくは目を覚まさないと思うわ」

「そうですか……」

「知り合いか？」

「はい、彼は……アスランは俺の上官ですし、キラさんの友人です」

「そうか……」

未だに目を覚ましていない

「早く……目覚めるといいな」

「……………はい」

シンもキラもジークフリートの隊員もアスランが目覚めるのを待っていた

自らの望んだ正義は自由の象徴に導かれ、衝撃の名を示す力は新たな未来を切り開く

I  
E  
N  
D  
I

## 第二十五話 天使の翼

「……………ふう……………最高ね」

ここ聖王教会では茶会が開かれていた

「この、クッキーも良い焼き加減ね。後でお礼を言わなくちゃ」

騎士カリムはティーカップに注がれている紅茶を飲みながら、画面越しに話をしていた

「……………？」

「ごめんなさいね、話の腰を折っちゃって。ええ、保護した2人は今のところ怪我はしてるけど……………命に別状はないわ」

「……………」

「うーん……………流石にあなたの頼みでもそれは無理よ」

「……………？」

「だって、あなたに引き渡す前にこちらでもやることがあるの、それ……………」

「……………？」

画面越しの2人は笑顔だったが、互いに腹を探り合っているようだ

「なんでもないわ……というわけであの2人の身柄は聖王教会が預かるわよ……“はやて”」

「……カリムがそこまで言うんならしゃあないか」

「ウフフ……紅茶も飲んでしまったことだし、そろそろお開きにしましょうか？」

「そうやな……それじゃあ、またなカリム」

「ええ……またね、はやて」

紅茶を飲み干すと、それを見越すかのように二人の通信が終わった

背後には1人の男性が光景を見つめるように立っていた

「よかったのか？」

「何かしら？」

「彼女は貴女の大切な御親友だろ？」

「そうよ……だからこそ彼女との会話は止められないわ……」

「戦いか……面白いな。君の意思には従うよ」

「そうね……その気持ちを何かで表して下さる？」

「この剣に懸けて誓おう」

「フフ……期待しているわよ」

「そうだな……1つだけ頼みたい」

「何かしら？」

2人の表情は柔らかいが会話の裏では探り合いが行われていただろう

「事は全て優雅に」エレガント

その刹那、一瞬だが2人の間に静寂がはしった

「あらあら」

「……フフツ」

笑いながら話している彼等の本意は誰も知る余地はない

その頃、ヒイロと刹那は模擬戦をしていた

相手は元・機動六課FWメンバー

それぞれが完成した新武装とシステムの確認のために戦っていた

「行くよ、ヒイロ！」

「覚悟しなさいー！」

「……臨むところだ」

ヒイロはスバルとティアナの二人を相手に戦っていた

4対2ではなく2対1の環境を作り出す

単機での行動や破壊活動に特化している2人にしかできない作戦だ

「ハアッ！」

「……遅い」

「ッ！ ……スバル離れて」

「分かったよ、ティア！」

「……回避されたか」

《予測通り左右に展開……<sup>レフト</sup> Lライフルチャージ完了……<sup>ライト</sup> Rライフル  
次弾発射まで予測2 / 50》

ヒイロの手には二つの銃が抱えられていた

“ ツインバスターライフル ”

新たなヒイロの武器だ

《Rライフルチャージ完了……発射方向、右方向23 / 58。》

「了解した……行くぞ、ゼロ」



《YES…MASTER!》

「……撃て」

《FIRE》

「……ッ！ スバルじゃない？」

ヒイロはスバルを無視し、指令塔であるティアナを攻撃しようとしていた

「ティアを……撃たせるかああー！ー！ー！」

《右方に敵影……問題無し》

「了解した……」

「嘘ッ！ー！」

しかし、ヒイロはスバルの攻撃を“かわす”のではなく“受け止めた”

“ゼロシステム”

使用者に最良の未来を予測し、直接脳内に最善の行動方法を送り込む

「……だったら、もう一撃！」

《問題無し……》

「……甘い」

「そんな……また？」

「一旦、距離をとってスバル！」

「……遅い」

「キャアア……」

最強にして最凶のシステムを組み込んでいたヒイロは全てを見抜き、二人を圧倒していた

《広域射撃チャージ完了……発射体制》

「五月蠅い！！俺に命令するな……」

しかし、通常このシステムは使用者に甚大な負担をもたらしてしまう  
本来、ゼロシステムは使用者に単騎での戦闘による勝利を目的として  
作製されたシステムだ  
脳内にフィートバックされる情報は“完全な勝利”を“単体”で完  
遂するもののみに限られてしまう

《殺傷設定を解除……》

「却下だ……」

つまり、個人の人権など全く考えられていないのだ

しかしヒイロはその情報に惑わされることなく、的確に情報を捌き、二人を相手していた

「ハアア……………」

「……………フッ！」

キイイイン

一方で刹那は、エリオと鏢迫り合いの格好になっていた

刹那のデバイスは剣の形を取り戻し更に力を増していた

“GNソード改”

刹那が乗っていた最愛の機体

かつて神と崇めたガンダムと戦うために使った機体の武装を新たに再現したその武器は刹那の魔力を受けてさらに切れ味を増していた

「……………ハアッ！」

「……………クッ」

刹那はエリオの槍を吹き飛ばした

「行くぞ……………」

そう言うと刹那は剣を構えた

《All right》

ゴオオオ……バアアーン！

「なっ！」

「危ない！」

水平に構えた剣を突き出し、魔力を自身の背面で爆発させた

「終わりだ、エリオ！」

「……は、速い！（やられる……ッ！）」

刹那は爆発させた魔力の勢いでエリオに止めを刺そうとした

「取った……」

「エリオ君は……やらせない！」

「……ッ何？」

しかし、攻撃は5本の鎖によって阻まれた

“アルケミック・チェーン”

キャラの援護により、刹那の攻撃は無駄となってしまった

「少し甘く見すぎていたか……」

《油断は大敵ですよ？ マイスター》

「そつだな……」

刹那は鎖を引きちぎり、エリオと互いに距離をとった  
二人の睨み合いが続いた

「（マズいな……これではあの時と……）」

刹那は警戒を続けていた

“カートリッジシステム”

【私を本気にさせたことを後悔するのだな】

刹那がシグナムと模擬戦を行っていた時に使われたシステムを思い出していた

使用者の能力を爆発的に上昇させるこの機能は個人の技能と能力で戦う近接戦闘や単対単の戦闘で真価を発揮する

人数で負けている刹那にとっては脅威となる機能だった

「行くよ、ストラーダ！」

《All right……Cartridge Load》

エリオは刹那の予想通りにカートリッジを使った

「行きます！」

上昇した魔力をスピードに変換してエリオは詰め寄ってきた

「ハアア……ハッ！」

「……クッ！」

2人がぶつかりと辺りは轟音に包まれた

「ガハッ!？」

《魔力の爆発的増加、危険です》

刹那はそれを受け止めようと盾を構えて踏みとどまったが、エリオのスピードによって上昇した重量で弾き飛ばされてしまった

「……仕方ない、エクシア……“あれ”を使うぞ」

《実戦での使用は禁止されているはずですが?》

「模擬戦ならば問題無いだろう……」

《知りませんよ?》

「構わない……」

《わかりました》

「トランザム!」

《Yes myster!》

しかし、刹那は新たに付け足した機能を使用し、超高速のスピードで再び詰め寄った

「ウオオオ……!」

「え?」

「!?!」

詰め寄った刹那の魔力は赤く発光していた

“TRANSIAM SYSTEM”

魔力を体内で圧縮し、超高速で放出させる  
通常時の3倍の出力を発揮するこの能力はまさに“切り札”、そして“諸刃の剣”

「そんな!?!」

「エリオ君!?!」

高機動を維持しながら刹那は二人を圧倒していた

「キヤア！」

「キヤロ！？」

刹那の暴力的な魔力に耐えきれず、キヤロは吹き飛ばされてしまった

「ストラダー！」

エリオは再びカートリッジをロードし、刹那は剣を構えてぶつかつた

「甘い！！」

しかし、刹那も圧倒的なスピードで避け、勝負は振り出しに戻ってしまった

「これで最後だ……エリオ！」

「負けません！」

2人は武器を再び構え直すと地面を蹴り敵の下へ向かった

「ウオオオ……！！」

「ハアアア……！！」

「二人とも……駄目えええー！！」



しかし、魔力のぶつかり合いは少女の一声で遮られた

「……………!?!」

間一髪のところまで気付いた2人は剣を下ろし踏みとどまった

「このままだと二人とも死んじゃいます……………だから、もう止めて……………下さい」

人間は自分の能力を抑えている

その量は全力の三割、本気を出すとんでも人間は七割、つまり全力で戦うことは出来ていないのだ

しかし、二人とも自身のリミッターを外してしまっていた

「ハア……………ハア……………」

人の限界は予想以上に負担が大きい

「……………ゲホッ……………」

額には脂汗が浮かび疲弊しているようだった

「ハア……………ハア……………どうするのティア？」

「ハア……………ハア……………こっちが……………聞きたいくらいよ……………」

一方でスバルとティアナは追い詰められていた  
目の前にある、脅威が排除できないのだ  
どんなに攻撃を当てようとしてもそれを“予測していた”かのよう  
に防いでしまう

「こつちの動きを予測してるみたいね……ッ!? ……なんだ……  
簡単じゃない」

「どづいづこと?」

「いい、良く聞いてねスバル……」

「それなら!」

「……いける!! スバル!」

「うん!!」

ティアナが何度目かわからない弾幕を張るとヒイロはかわすように  
後退した

《直進……弾幕の密度増加……後退……》

「だから、甘いぞ……」

「ッ! ……今よ、スバル!」

「……何!?!」

《左方上空より敵接近……》

スバルは狙っていたかのようにヒロに詰め寄り殴りかかった

「ハアアア……！」

《問題無し》

「同じ手は通用しない……」

ブウウン……

「何？」

ヒロがスバルを斬りつけるとスバルは何もなかったかのように“霧散した”

《右方に敵影出現……回避不能……サーベル……》

「……チツ」

ヒロは予測が追い付かなかったのか攻撃がクリーンヒットし、吹き飛ばされた

『戦闘終了』

ヒロが倒れたのと終了の合図がでたのは同時だった

「どっ？ 私の攻撃」

「最後のスバルか……あれは重かった……」

「え、ちょっとヒロ！？ それってどういう意味ですか……ヒロ  
口さん！？」

「言葉通りだ……重い……それと退いてくれ……起き上がれない」

後にヒロの放った一言が問題になったことは言うまでもない

天使達は未来という空を飛ぶための力を手に入れ翼を羽撃たかせた

## 第二十六話 立ち向かう勇氣

「……………ハア……………」

「どうしたんですか？はやてちゃん」

「……………ハア……………」

「あの……………一体どうしちゃったんですかはやてちゃん？」

「ハア……………（マズいなあ……………一体どないしたらええんやろな……………）  
……………ハア……………」

はやては悩んでいた

隊の立て直しは終わり、ようやく敵に立ち向かう準備が整った今になって問題が起きてしまった

「（まさか、このタイミングで召集がかかるなんてなあ……………）」

Generationsの召還命令

本来ならば戦力としてジークフリートに協力するはずだったが、地上本部が壊滅し戦力を消耗してしまい仮本部護衛のために本部に返却することになってしまった

「（いや……………無理言って引っ張りだしたのは分かるけどまさかここまで早く返すとはなあ……………）」

戦力としては高町なのは一等空尉をはじめ陸戦、空戦の精鋭が揃っているが戦力未知数の組織に真つ向から立ち向かう程の戦力には程遠い

補給物資として残っていた巡洋艦“ツァイベル”がせめてもの救いだっただ

先の戦闘でアースラが大破し、次元航行艦が無かったジークフリートにとっては唯一の移動手段となっている

しかし、こちらの艦も戦闘の余波で中破してしまい戦闘能力が残されていなかった

修理をしようにもどこのドッグも空いてなく修理すらできない現実があった

「……………やてちゃん、はやてちゃん！」

「……………ツ！いたんか、リイン？」

「いたんか……………じゃ無いですよぉ！どうしたんですかはやてちゃん、さつきから変ですよ？」

「ああ、ちよつと考え事してたんよ……………ゴメンなリイン」

「謝らなくてもいいですよ……………それよりも考えは纏まったんですかあ？」

「……………よしっ！ー！」

はやては決断した

「決まりましたか？」

「ああ、決めたでリン……ツアイベルを改修するんや！」

「ツアイベルを改修……ですか……」

“ツアイベルの残存部品での再生”

幸いにも巡洋艦ツアイベルは前線での運用を考慮し、他の艦との部品共有率が高くなっている

現在、手元には回収したアースラの残骸や補給物資として残されていたパーツが沢山ある

「確かに改修は簡単ですけど………どこのドッグも空いていませんよ？」

「平気や、自分達でやる！」

再生も容易であるために民間のドッグを借りて使うことができれば  
すぐにでも再生する事ができた

「よっしゃ、そうと決まったら………A E社や和泉重工やらに連絡や  
！」

「はやてちゃん………和泉重工は地球の会社です………」

はやては急いで企業への連絡をすることにした

「とじろど………」

「なんですか？」

「うちの部隊に艦の修理をできる人っておったか？」

「!?!」

一瞬だけ、彼女達の世界は凍りついた

「なんか、ここも久しぶりだな……」

「確かにな……ま、いいや……行こうぜジュードー」

ガロードとジュードーはいつものジャンク屋にいた

「あれ？いつもの兄ちゃんじゃないの？」

「ああ？……あいつなら捜すなって書き置きして出ていったぜ。」

「ふーん……まあ、いいか。ところで何か入ってないの、お下げの兄ちゃん」

「おう、俺のお勧めはだな……」

彼はガロードやジュードーに商品を説明して廻った



「うーん……やっぱ、掘り出し物はそう簡単に見つかる訳ないよな……そっちは、なんか見つかったかガロード？」

「こっちも駄目だ……」

「何だよ…折角紹介したのに」

「だって……ガラクタばっか」

「ま、掘り出し物が見つかったらとっといてやるよ」

何か掘り出し物があるかもしれない

そう思って来てみたのだがそう簡単に見つかるはずもなかった

「サンキュー！！……さて、帰ろうぜガロード」

「ああ、そうだ……な……ッ！？」

諦めて帰ろうとしたときにガロードが突然振り返った

「（なんだ？今の視線は……まさか、アイツらなのか？……いや、まさかな……）」

「どうしたんだ、ガロード？」

「いや、なんでもない……行こうぜ！」

そう言うと2人は元来た道に戻っていった

と　　は人混みを歩いていていた  
春とはいえまだ肌に当たる風は冷たく二人は長袖のコートを羽織っていた

「……良いよね？」

「駄目だ　　ここで騒ぎは起こすな……」

が何かを見つけ手を出そうとしたが　　は　　を静止しそのまま歩いていった

「……分かったよ、」

は少々不服そうだったが　　に従い、付いていった

「いずれ時が巡ってくる、その時が……我々の時代だ……」

彼らの心は海より深い深淵アビスのようで……  
空より大きい業カルマを背負っていた

「……俺、どうなるのかな……」

シンは医務室にいた  
手を縛られ、金具に紐で固定されていた

逃げないために念には念を入れていたというところらしい

「（夢で聞こえたのは、ステラの声だった……）」

シンはステラの事を考えていた

「（もしかしたらこの世界なら、会えるかもしれない……）」

こちらには死んだはずの人間がいる

ならば来ているのかもしれない、逢えるのかもしれない

本当ならばここを今すぐにも抜け出したかった

「（でも……場所わかんないし……何処にいるのかなんてエスパーじゃないのを知る方法なんて無いしな……）」

しかし、未知の世界で地図もないまま動けるほどシンは短絡的でもなく、無謀にも脱走しようとするほど幼くもなかった

「ハア………ッ!！」

突然、後ろの扉が開いた

「失礼するよ」

「あなたは、確か………アムロさん？」

「ああ、良く覚えていたね………」

「ええ………まあ、あの人………キラさんから聞きましたから」

「そうか……………これで良しと」

「……………!?!」

手錠を外されシンは啞然としていた

「これから俺に自白剤でも使っんですか？先に言っときますけど本当にも知りませんよ？」

「まさか、俺もそんな簡単に物騒な物を使いたくないし、君が全て正直に答えているのは分かるしね。」

「そんな甘い根拠は何処から来るんですか？」

「……………昔からの、勘かな」

「甘いですね、この世界は……………」

「ああ、そうだな……………」

本来ならば拷問に近い尋問を受ける覚悟で臨んでいたのだが、実際に受けたのは簡単な事情聴取のみであり、こちらの組織の甘さを痛感していた

「じゃあ、ついて来てくれるかい？」

「……………あ、はい！」

ついて来いと促されシンはアムロの後ろをついていった

「いらっしゃい、シン君」

「来てくれてありがとう、シン」

デバイスルームに着いたシンはキラとシャーリーに迎えられた

「まあ、座って」

「……はい」

シンを奥に案内し椅子に座らせた

「シン君にここに来てもらったのは質問があつたからなの」

「質問……ですか？」

「ええ……じゃあ早速だけど、この画面とデバイスを見てもらえるかしら？」

シャーリーはシンに質問した

「あなたが持っていたデバイスには、不自然なくぼみが見つかったんだけど……ここには一体何が在ったの？」

「そこには、赤いクリスタルがはまってました……確か、名前はレリック？……だったと思います。」

「レリック……ですか？……そんな、でも……まさか」

答えを聞いたシャーリーは驚愕した

以前の事件ですべて回収したと思われていた遺失物ロストロギアがまだ存在していたのだ

「「……………？」」

キラとアムロはレリックの詳細を知らずにただ疑問に思っていたしかし、シャーリーの表情からそれがいかに危険な物であるかを理解していた

「ああ……そうだシン、君の拘束は現時点をもって解かせてもらおうよ」

「え……？いいんですか、だって俺は敵だったんですよ？」

「君からの情報提供に対する見返りだよ。それに……既に部隊長の許可は貰ってるからね」

「まあ、司法取引だと思えばそんなに不思議じゃないでしょ？」

「はあ……………」

「あの……アスランが起きたら伝えて下さい、俺は無事だって」

「分かった。責任を持って伝えよう。」

「あなたは手続きが終わるまでここで待機ね」

「……………はい」

この後の展開を誰が予測できただろうか……  
不幸の始まりを……  
絶望の始まりを……

は薄暗い部屋でモニター越しに世界を見つめていた

「さあ、始めようじゃないか！！主役は彼等！！脚本は私………そして……………」

は誰もいない空間で一人、狂気を振りまいていた

「この世界の運命を賭けた今世紀最大のショーを！！」

彼の一言が引き金となり、背後に無数の一つ目が光った

モノアイ

破滅は再び世界に舞い降り、混沌を招くだろう  
機神は舞い戻り世界と向き合う力を得た

世界が微笑むのは破壊か絶望か……………

I  
E  
N  
D  
I



## 第二十七話 破壊神が墜ちる日（前編）

どんな時だつて始まりは突然だ

悪意が産声を上げるのも

悪夢の光が魂を地に還すのも

そして、理不尽な破壊に誰かが立ち向かおうとするのも

そして、今回もそうだった

『Allah t』

全ては静寂を切り裂くように隊舎内に響いた一つの警報から始まった

「こ、これって……」

それがただの機体反応と魔力反応だったならば、ここまで彼らが慌てることも無かったのだろう

「嘘……こんな事なんて……」

しかし、“ソレ”の反応を見間違つはずもない

地獄の業火に焼き尽くされながらも、彼女達の心には恐怖という烙印が押されていた

「そんな……この反応は……」

「反応のあったポイントの情報収集急いで！」

「現時点での目標に大きな動きは見られません」

「管制、聞こえるか？」

「ウチとアムロさんが指揮をとります！ 管制は情報収集に集中して！」

対応に追われている管制室に代わって隊長達が指示をとばした

「エリオ、キャロ、ヒイロ、カミーユ、ジユドー、ドモンは早速現場に向かってくれ。後発で俺達も向かう」

「了解」

それが悪魔のような驚異だとしても

「まだ市街地までは来ていないな、俺達も急ぐぞはやて」

「了解しました、アムロさん」

指示を飛ばしながらも、二人は急いで出撃の準備を始めた

現場に着いた全員が戦慄した

「馬鹿な……どうしてコイツが……」

「……コイツはあの時ガロードが破壊したはずじゃ？」

「……恐らく、あの時とは別の機体だろうな、量産されていてもおかしくない……」

彼らの目前に存在するそれは、以前の戦闘で恐怖と絶望を植え付けた悪魔

ゴオオオオ

“デストロイ”

黒光りするその悪魔は目の前にいる彼らを見無視するように周囲を蹂躪しながら前進していた

さらに、周囲にはMS、GN-Xジンクスが飛翔し、全てを寄せ付けない恐怖を増幅させていた

《進行速度8km/h市街地到達まで予測2.47時間》

「無駄口を叩くなら撃つぞ……足を止める」

「そうだ、止まらないならば叩いて叩いて叩き割るだけだ……」

これ以上の侵攻は許されない

「ドモンとエリオは奴の周囲の雑魚を頼む」

「承知！」

「分かりました、カミーユさん」

「それ以外の全員は俺の合図で一斉射撃！」

「任務了解」

「分かったよカミーユさん」

「わ、分かりました」

「まだ、もう少し………よし、今だ！」

全員にカミーユが指示をとばし、彼の一声で一斉に砲撃を開始した  
撃ち込んだ弾は轟音となり、当たった衝撃で辺りは土煙に包まれた

「やった？」

「いや……あれを見る」

「馬鹿な……無傷だって……」

「ゼロ、どうなっている？」

《外装の損傷……：0 / 0.2%、内部機構への損傷……：予測0 / 0  
0.09%……進行の遅延度……：予測0 / 0.7秒》

「そんな……」

「攻撃を再開する……………」

《攻撃の継続……無意味と判断》

「無駄だとわかっていてもやるぞ！！ もう一度一斉射撃を仕掛ける！！ キャロは援護に集中するんだ！」

「は、はい！」

カミーユ達は再び銃を構え力の限り、攻撃を加え続けた

「ダメです！！ 攻撃が効いていません！」

しかしデストロイの鉄の装甲には傷一つ着くことは無く、何事もなかったように前進を続けていた

「皆さん、落ち着いて避難してください」

一方、スバルとティアナも戦闘とは別の場所で別の戦いをしていた

「慌てないでください」

現在は動きを遮られ進行速度は緩んでいるが、いつ市街地に侵入されるかがわからない

2人に与えられた重要な任務であった

「このままのペースならなんとか全員の避難ができそうだね……  
テ  
イア？」

「うん……ちょっと、ね………」

「どつゆつこと？」

しかし、簡単に避難が終わるわけがなかった

「いつまでこんなチマチマ逃げさせる気だ！」

「そうよ……早く逃げさせてよ！」

人とは強欲な生き物だ

「え？ ちょっと……皆さん落ち着いて下さい！」

「うるさい！ ……俺はまだ死にたくないんだ！」

己が生きるためであれば他者の命など一分の価値もない

「そこをどけ！」

「私が先よ！」

「せめて……この子達だけでも……！」

誰もが我先にと逃げようとしていた

「押さないで下さい！」

「いいから早く進め！」

そこには秩序など一切存在しない

「邪魔だ！」

人は死が迫ると獣になる

「引つ張るんじゃないよ、ノロマ！」

その姿は醜く酷く醜悪で

「何よ！ アンタこそ早く行きなさいよ！」

しかし生を求めようと必死だった

「（何よ……自分さえ助かればいいの？ 私達はこんな自分勝手なヤツらを助けようとしたの？ 悔しいよ……この状況をどうにもできない自分が……）」

ティアナは自分を怨みながらも人間の性に激しく怒りを感じた

「こんな一般人なんかどうでもいい……君達管理局の人間は私達を守ってさえいれば良いんだ！」

ついに、高官達の家族がパニックを起こし始めたのだ

「落ち着いて下さい！ 順番に避難して下さい！」

「早く私達の家族を一番安全な所に連れて行きたまえ」

スバルとティアナの置かれている状況は最悪だった

「早くしたまえ、これは命令だ！」

人はどうしてここまで愚かになれるのだろう

「（こんなクズ共の下で今まで……………）」

余りにも自己中心的な高官達の態度にティアナは苛立ちを隠すことができなかった

「私の避難にこんな小娘二人しか……………」

「いい加減にして下さい！！」

スバルが吼え、その一言で辺りは静まり返った

「命の重さは誰だって一緒です、自分が大切だからってそんな簡単に他人を捨てるような言葉を投げないで下さい。私はそんな人達を……………助けたくなんてありません」

その一言がどう響いたのかは誰にも分からない  
ただ、目に見えて我が儘の数は減った

「そんな……………これじゃまるであの時と同じじゃないか……………」



シンはデバイスルームでこの光景を目撃していた

【止めるんだステラ！】

【シン……好き……】

「これじゃあ……駄目だ！絶対に繰り返してたまるか！」

シンの意志は固まった

「はやく……さん、一つお願いがあります」

『どないしたんやシン君……こっちは今大変な状況なんやけど……』

「それは、分かっています。だから頼みます……俺をあそこに行かせてください！」

『なんやて？』

「無茶を言ってるかは分かっています！ だけど……俺はもう二度と繰り返したく無いんです！」

シンは通信ではやくてに出撃の許可を願った

『なるほどな……君の気持ちはよく分かったわ』

「じゃあ……」

『だけど……その頼みを聞くわけにはいかんのや……ゴメンなシン君』

「そんな……」

捕虜となっている人間をそう簡単に戦場に送り込んだりはしない

『そんな事は無いと思うけど私も沢山の命を預かっている身や……』  
本当に投降したのか

「裏切りって言うのは簡単には信じられへん……」

敵の策なのかもしれない

『すみませんはやてさん、話は聞かせて貰いました。僕からもお願いします！ 彼を……シンを行かせてあげてください』

『……っキラ君！ それは……』

『この事に対する責任は全て、僕が取りますから……お願いします』

『キラ君……』

「キラ……さん」

『よし……そこまで言っなら許可するわ』

「あ、ありがとうございます」

キラの後押しもあり、シンは出撃する事ができた

『ただし、一つ条件があります』

「え………?」

『……それは、キラ君と一緒に行くことや………分かったか?』

「はい!」

『了解!』

彼の同伴という条件で出撃は許可された

『キラさん聞こえますか?』

「はい、聞こえますよシャーリーさん」

『今回の戦闘からキラさんのデバイスは新型に変わっています………  
前のものに比べて出力その他全ての性能が大きく向上しています』

「そのことなら分かっていますよ?」

『違うんです、私が言いたいのはそのいうことじゃなくて……その……絶対に無茶だけはしないで、無事に帰ってきてください……』

「シャーリーさん……分かりました、絶対に帰って来ます。だから、あまり心配しないでください」

『はい……行ってらっしゃいキラさん』

「心配かけちゃったかな……絶対に無事に帰って来なきゃね……よし、SET UP！」

《All right!》

キラのデバイスは形状が変化していた

《お久しぶりです》

「うん、また一緒に戦おう……」

自身の願いと共に戦ったその翼、世界の全てを敵にしても平和を求め続けた自由の象徴

「フリーダム」

《私があなただの新たな翼になります》

前回の戦闘で大破したストライクの代わりにキラが用意したデバイスだ

「よし、こっちもなんとかいける！」

シンはインパルスをそのまま使用した

「シン、今のインパルスにはカートリッジシステムは搭載されていないしレリックもない、長期戦は無理だ」

「そんな……」

「聞いて、インパルスには追加で小型魔力コンテナを増設してみた  
いだから、少しは戦えると思うよ」

「はい！」

「よし、それじゃあ行こうかシン！」

「はい、キラさん」

「……キラ・ヤマト、フリーダム行きます！」

「同じくシン・アスカ、……インパルス、行きます！」

キラはシンと仲間の元へ……悪夢の下へ飛び立った

未だに戦いは続いていた

「クソ……攻撃が全然通らない」

戦況は芳しくなかった

「……………！ ジュドー後ろだ！」

「え……………ウワア！」

攻撃は弾かれ銃に狙われ続け、ついには攻撃が当たるようになってしまった

「キャアッ！」

「クツ……………キャロ！ 後ろに下がるんだ」

「は、はい……………」

「行くぞ！ シールド！」

《OK！ My Master》

カミーユはキャロを後ろに下げ、自身の体で守るようにシールドを前に出した

「……………クツ！」

「カミーユさん！」

「だ、大丈夫だ……………」

しかし、Zの小さな盾では二人を守りきることはできずに次第に攻撃が体に当たり始めていた

攻撃は雨のようにカミーユを襲い

「クツ……カアッ！」

右腕に

「……グツ」

肘に

「ガアッ……」

左肩に

「カハッ……」

胸に

「グハッ……クツ……」

最初はバラバラだった攻撃は徐々に急所に近づきはじめカミーユも苦悶の声を上げ始めた

「カミーユさん……お願い、ケリユケイオン！」

キャラはとっさにシールドを張った

「キヤ、キヤアアア！」

しかし、豪雨のような攻撃にキヤロが耐えきれず、シールドは虚しく弾け飛んだ

「キヤロー！」

「クッ……クソ……」

カミーユはキヤロの名前を叫んだが自身も動く余裕が無く、シールドを構え続けるしかなかった

『現在の戦況はこちらが圧倒的に不利です！』

『現在、武装隊の負傷者数が三桁を越えました！』

「急がなきゃ……みんなが」

「もっと急ぎましょうキラさん！」

キラとシンは焦る気持ちを押さえながらも進んでいた

《高魔力反応、上空からきます》

「……！」

しかし、突然の来訪者によって阻まれてしまった



「フフフ……何処へ行くこうというのだい？ キラ・ヤマト君、それに裏切り者のシン・アスカ君」

「あなたは……」

「ラウ・ル・クルーゼ！」

「二人とも久しぶりだね……」

「今はあなたに構っている暇は無いです！」

「そうか……だが、こちらは少し付き合ってもらわなければ困るの  
でね」

「仕方ない……先に行くんだシン！」

「だ、だけど！」

「何のために君はここまで来たんだ！」

「おやおや……敵を前にしておしゃべりとは……流石は余裕だねス  
ーパーコーディネーターは！」

クルーゼはサーベルで切りかかってきた

「クツ……早く行くんだ……シン！」

「は、はい！」

キラはサーベルで迎え撃ち、シンに先に行くように促した

シンは躊躇いながらもデストロイを倒すために現場に向かうことにした

「あなたの、あなたの目的は一体何ですか!!」

シンが見えなくなるとクルーゼにキラは聞いた

「聞いてどうする!? もう誰も止める術など持たないと言つのに……」

クルーゼはそう言うとドラグーンを展開し攻撃を開始した

「クッ……ドラグーン!」

「君に見切れるかな?」

「だけど!」

キラは縦横無尽に動き回るドラグーンに苦戦しながらもサーベルで応戦した

「凄い、僕が思った通りにうごかせる……フリーダム、凄い性能だ」

《お褒めに与り光栄です》

しかし、クルーゼは使い続けてきたデバイスに対してキラはつい先ほど手にした新型

「バラエーナ!!」

《展開まで0.8秒》

「遅いな」

性能はキラのデバイスの方が上だが慣れないデバイスでは実力差を埋めることはできなかった

「ククク……さっきまでの威勢はどうしたんだいキラ君？」

「クッ……」

「そろそろ終わらせてもらっよ」

「クッ……」

ライフルは手元から落ち

「防げるかな？」

シールドは砕け散り

「さあ、君の本気を見せてくれないか？」

徐々に、徐々に追い詰められついには壁際に来てしまった

「フフフ、まるで袋のネズミじゃないかキラ君」

クルーゼが笑みを浮かべるとドラグーンが迫ってきた

「さて……そろそろ時間稼ぎも十分だろう、死にたまえ」

一言と共にドラグーンから光線が放たれた

「殺られる!!」

虚しくも光線は一点に吸い込まれた

破壊の神々は力を振るう

己が本能のままに……

女神は愛すべき者を守る

己が意思のままに、ただひたすらに……

それが……己の本能とは誰も知らず……

— E N D —

## 第二十八話 破壊神が墜ちる日（中編）

ドラグーンから延びた光の矢はキラを捉え、周囲は粉塵に包まれた。

「フフフ……ハハハハ……スーパーコーディネーターと言っても、死に際はあつけないものだ」

クルーゼはキラの最後を見届けたかったようだが、その場にとどまると言う愚を避け戦域を離脱しようとした

「ん？ ……何？」

しかし、一筋の光によって離脱を中断せざるおえなかった

「ほっ？」

粉塵が晴れると彼がいた

「全く、なんてザマだキラ……」

若くして友と戦い、己の正義のために全てと決別した青年……

「ア、アスラン？」

彼の姿がそこにあつた

「無事か？」

アスランはキラを庇っていた

「ジャステイス、調子はどうだ？」

《問題ありません……むしろ良好です》

「よし……行くぞキラ！」

「分かった、アスラン！」

二人は互いに言葉を交わすとはば同時にクルーゼに向かって行った

「行くぞ！」

「クルーゼー！」

「フッフ……ハハハハ、これは面白い……ここに役者が全て揃うとは」

クルーゼは高笑いしながらも武器を構えて迫り来る二人に身構えた

「ウツ……こ、これは……」

シンが辿り着いたそこは地獄そのものだった

「こんな……嘘だ……」

大地は抉られ、かつては人だったと思われる肉塊からは焦げたような死臭が漂っていた

「（これが、俺達のやってきたことの結果なのか……？　こんなじゃ正義なんて……駄目だ！　今はそんなことより前に進まなきゃ）」  
頭の中にある後悔と雑念を振り切りシンは前に進んだ

「なっ………！」

しかし、進もうとした決意は招かれざる来訪者によって阻まれた

「そんな、どうしてこの機体が………」

赤く塗られたザク

『……………』

「まさか……ルナなのか？」

その血塗られたように朱い機体はシンホテイの心を抉るのには十分であった

『……………』

「そんなっ！」

ザクから極太の光が延びた

「クッ！　……ルナがここにいるワケがない………だけど」

シンは紙一重で攻撃をかわしたが見慣れた機体に攻撃を躊躇っていた

『……………』

「…………ツ！ しまった」

弱りきった意志を無情な鉄の心が見逃すはずもなくザクから追撃が加えられた

「クソツ！！」

シンがかわせるはずもなく吸い込まれるように攻撃が当たろうとした

「…………ツ！！」

しかし、その攻撃がシンに届くことは無かった

「あれ？ 俺生きてる?」

「大丈夫？ シン・アスカ君」

「は、はい……………それであなたは?」

「私？ 私は……………」

《マスター、お話はそこまでです……………再び砲撃、来ます!》

「分かったよレイジング・ハート。……………そういうわけだからここは私に任せて君は先に行つて!」



「だけど……」

「はやてちゃんから聞いたよ？ 君にはやるべき事があるでしょ？  
だから、早く！」

シールドを前に展開し彼を守った彼女は先に行くことを促しザクに  
向かっていった

「（俺のやるべきこと……、立ち止まってる暇は………ない！）」

シンは自分の意志を再確認し、再び前に進んだ

「ありがとうございます！」

「じゃあ、行くよ！」

《All right》

なのはは改めて杖を構え、朱塗りのザクと相対した

一方で無意味と分かかっていても攻撃を続けなければいけない彼達の  
状況は最悪だった

ドカアーン！

「クッ！ このままだとジリ貧だ……」

「なんか策は無いのかよカミーユさん！」

「あつたらとつくになんとかしている！」

キヤロの補助で何とか均衡状態を保っているものの、とうの昔に力  
ートリッジは底を尽き精神的にも肉体的にも限界を迎えていた

《2時方向に敵影6、破壊せよ……破壊せよ……破壊せよ……破壊せよ……》

「うるさい……黙れゼロ！」

ヒイロはシステムから雪崩れ込む膨大な破壊衝動を御しながらその  
中で勝つための戦術を探し続けていた

《破壊せよ……敵を……破壊せよ……敵の織滅を最優先とせよ……  
……》

しかし、制御しきれない情報が仇となった。

《……警告……全方位より敵機接近、総数30》

「……何だと？」

気付かぬ間に敵に囲まれ孤立してしまっていた

「クツ……ゼロ、周囲に味方はいるか？」

《検索……該当無し》

仲間やデストロイからは遠く引き剥がされ、格好の的になってしまっている

「チツ……ゼロ、打開策はあるか？」

《検索……該当項目1件……自爆を推奨》

「却下だ……バスターライフルスタンバイ」

《Roger……Rifle charge……》

「姿勢制御は頼む……」

《Roger……Mode select……Rolling buster》

「……発射」

《Fire》

キユオオーン……ドカアアーン！

ヒイロは尽きかけた魔力を振り絞りライフルをかまえ敵を薙ぎ払った

「……やったか？」

《撃墜数29……残存敵機1》

しかし、圧倒的な敵の数に全てを倒すことができずにただ魔力を使い果たしてしまった

「ここまでか……」

《行動検索……該当項目2件……自爆を推奨……又は左前方、機影が飛来……武装による牽制後に誘導……》

「何ッ!!」

ヒロが反応すると閃光が通り過ぎるのは同時だった

「……ハア……ハア……間に……合った……」

閃光の先を見てみるとそこには額に大粒の汗をかいたシンがいた

「ようやく、ここまで来たんだ……俺が絶対に止める!もう、嫌なんだ!」

シンは額に残った汗を拭くと未だに進行を続けるデストロイにサベルを向けた

「当たるか! ……食らえ!」

その刹那、デストロイから飛んでくる光をかわしサベルで斬りつけた

『……………!』

斬った箇所が良かったのかデストロイは仰け反り、傷口を露わにした

「……………!!」

しかし、傷口を見たシンは驚愕した

「そんな……………どうして君が……………」

そこには居てはいけない、存在してはいけない“ソレ”が顔を覗かせていた

「何で……………どうして……………」

金色の細い髪にまだ幼さを残した線の細い顔

そう、シンが夢にまで見た……………逢いたいと願った少女“ステラ・ル  
ーシェ”の姿がそこにはあった

「ステラ—————!!」

空虚な世界に少年の渴いた悲鳴は木霊した

世界を護るもの

運命にあらがうもの

道を切り開くもの

それぞれが踊る……………

甘美な夢の舞踏会場で

I  
E  
N  
D  
I

第二十九話 破壊神が墜ちる日（後編）

【君は死なない……俺が絶対守るから】

少年の意志は砕かれた

【イヤァー死にたくない、死ぬのはイヤァー！】

繰り返される悲劇

【シン……好き……】

愛した少女の最期

「そんな……どうして君が……ステラ」

運命はどこまで残酷なのだろう

「そんなことはどうでもいい……今度こそ助けるんだ！絶対に！！」

しかし、少年は繰り返される悲劇に逆らおうと少女の名を呼び掛けた

「ステラーー！」

何度も

「俺だ、シンだよ……目を覚ましてくれステラ！」

何度も

「目を覚ませステラ！」

「……………」

しかし、その呼び掛けに少女は答えなかった

「クッ！」

それどころか、少年を拒むかのように攻撃が激しくなるばかりだった

「止めるんだステラ！」

しかし、少年は決して諦めることなく呼び続けた

「今度こそ俺が絶対に君を助けるから！」

いつか彼女が目を覚ますことだけを祈って

「レイジング・ハート！」

《All right…… Shoot!》

『……………!』

なのははザクと戦い続けていた。



「どつ？ やったかなレイジング・ハート」

《いいえ、どうやら敵機は未だに健在のようです……来ます！》

ヒューン……バアアン！

『……………』

「…………ツ！」

砲撃が相殺される

それだけで火力は明らかに互角である

しかし、体のほうはどうだろうか

幾ら訓練をこなしたからといって無尽蔵の体力や碎けない肉体を約束されたわけではない

「…………ウツ」

《大丈夫ですか、マスター？》

「大……丈夫だよ……ツ！」

『……………』

なのはの関節は悲鳴を上げ体中の筋肉が軋んでいるがザクの鋼の機<sup>ラダ</sup>体は疲弊など感じさせずに迫ってきた

『……………』

「痛ッ！ ……反応できない……」

斧を振りかざしたザクを止める術を彼女は持たなかった

「……………え？」

しかし、彼女へ向けられた刃は目の前で止まった

《ご無事ですかマスター？》

「うん、ありがとうレイジング・ハート。それより、次に備えないと」

《いえ、どうやらこれで終わりのようです》

『……………』

ヒュー……………ガシヤアアン！

防がれた斧は刃がこぼれるように消え去り、ザクも力尽きるように落ちていった

「多分、終わったみたいだね」

《そのようです……………それではマスターは魔力の回復を》

「うん」

なのはも地面に降り、尽きかけた魔力を回復しようとした

「さて、体のほうも大きなケガは無いし行こうかレイジング・ハート」

《Yes Mas……待って下さい！何かが接近して来ます》

「まさか、敵？」

なのは自身の無事を確認するとすぐに飛び立とうとしたしかし、そこに何かが接近して来ているというレイジング・ハートの言葉に身構えた

「無事か……高町？」

「アムロさん！……はい、大丈夫です」

「そうか……なら、君はそこにある敵機を回収して後退してくれ」

「え……？ 私はまだ戦えます！」

アムロの命令になのはは抵抗した

「駄目だ、君はかなり魔力を消耗しているし体力だって限界ギリギリじゃないか」

「だけど……教え子を放って私だけ後退することはできません！」

「君の気持ちは分かるが、ここは命令に従ってくれ。その代わりに、君の教え子達は必ず俺が守る」

「アムロさん、分かりました……」

アムロが援護に向かう事を約束し、なのははそのまま離脱していった

「さて、約束はすぐに守れそうに無いな……、敵機の数は？」

《現在24機でなおも増大中》

なのはは気付くことはなかったが、周囲は敵に囲まれていた

「ハア……仕方ない、急いで片付けるぞ」

《了解！》

アムロは軽い溜め息をつきながらも敵の中に向かっていった

「ステラーー！」

シンは未だに叫び続けていた

「……………」

反応するかもわからない意志無き鋼の悪魔に

「全員、動きを止めるんだ……アイツを援護する！」

「わかったよ、カミーユさん！」

カミーユ達も少女に気付いてからは奴の動きを止めようと気を使い、

間接部等に攻撃するようになった

「（アイツはあの時の俺と同じだ……だから、あんな思いをして欲しくない）」

同じ痛みを経験したカミーユにはわかるのだろう、大切な人を失う辛さは

しかし、無情にもデストロイは止まることなく進み続けた

「駄目、止められない……」

「諦めちゃ駄目だ、キャロ！」

「分かったよエリオ君……ケリユケイオンもう一度頑張ろう」

《Yes Master!》

キャロが鎖を生成しても周囲のMSに破壊されてしまう

「やった！」

「……いや、まだだ！」

「ッだったらもう一回」

鎖がデストロイにたどり着いても鎖は細い紐のように千切られ、無駄となってしまう

「何回引き千切られたって絶対に諦めない！」

「キャラの言う通りだ、絶対に諦めない！」

「フ、子供が張り切っているのにキング・オブ・ハートの俺が諦めるわけにはいかない！」

「ドモンさん！」

しかし、この無謀な挑戦を誰も諦めていなかった

「ウオオー！」

「ハアアア！」

「ジュード、タイミングを合わせる！」

「分かったよカミーユさん」

ドモンとエリオは最前線でMSを破碎しジュードとカミーユは進行を一秒でも緩めるべく射撃を続けていた

「止まった？」

努力が実ったのかデストロイが停止した

「いや、まだだ！」

しかし目には未だに光が灯され、バランスを立て直す為に止まったことは誰の目にも明らかだった

「……………あれは!?!」

その時、シンが異変に気付いた

「……………う、うっん」

「ステラ!」

デストロイに取り込まれていたステラが目を覚ましたのだ

「……………シン? ……シン!」

ステラはシンに気が付いたのか名前を何度も呼んだ

しかし、無情にもデストロイは止まることなく再び前進を続けた

「ステラ……………もう少しだけ待っててくれ」

「シン……………分かった、ステラ待ってる」

シンは緩んだ気持ちを再び締め直しステラに近付こうとした

「ハアアア……………」

しかし、攻撃はやむことなく続いていた

「クツ……………俺はステラを助けるんだ、だから邪魔を……………邪魔をする  
なあ!」

その瞬間、シンの中で何かが弾け彼の目からハイライトが消えた

「ウオオオ………ステラーー！」

デストロイはそれを拒むようにシンに攻撃を続けたが、シンは全てをかわしステラの側に寄った

「ステラを……返せー！ー！ー！」

「シン！」

「ステラ、掴まって！」

「うん！」

サーベルでステラに絡みついたケーブルを切り裂き、ステラを引きずり出した

「ステラ！」

「シン！」

デストロイは切られたケーブルのせい、ステラが抜け落ちたせいかその場で轟音をあげながら崩れ落ちた

「ステラ……俺はもう絶対に君を離さない！」

「ステラも……絶対にシンから離れない！」

ステラとシンはお互いに存在を確かめるように抱き合っていた



「ケツ！！戦場でイチャイチャしゃがって、そんな事はあの世でやんなア裏切り者のガンダムさんよオ！！」

「……ッ！」

二人に深紅の光線が飛来した

「やらせるか！」

バシユツ……ドオオオン！

「気を抜くな……ッ何！？」

「そう慌てんな、みんな纏めて相手してやるからよオ！！」

ドドドオン！！

間一髪でカミーユが撃ち落としたが、今度はカミーユ達に光線が降り注いだ

「あ、あんたは……」

そこにいたのは赤茶色の髪の毛の粗野な顔付き

「久しぶりだなア、裏切り者さんよオ。野垂れ死んだかと思っただぜエ」

数多の戦場を己の実力のみで駆けた

「アリー・アル・サーシエス!!」

その姿が目の前にはあった

「さア、こつからは俺のワンサイドゲームだア!! 死にたい奴だけかかって来なア!!」

予定調和な運命では世界が腐る……  
不協和音楽でる運命は世界を……破壊する

— E N D —

第三十話 悪意の欠片（前編）

今思えば全てが出来過ぎていた

破壊神が現れるのも  
救世主が現れるのも

全ては彼の描いたシナリオ通りに舞台は進んでいたのかもしれない

「フリーダム、マルチロックオン・システム……スタンバイ」

《All right……Multi lock on System Standby Ready!》

「よし、行つけええー！」

キラは魔法陣を複数展開しまるでそこに砲台があるかのように弾頭を撃ち出した

「……やった？」

《いえ、どうやらまだのようです》

「フ、君はつくづく甘いな」

「……え？」

立ち込められた噴煙の中からはキラの努力をあざ笑うかのように無

数の閃光が押し寄せた

「クツ……！」

「キラ……！」

「大丈夫、アスラン」

クルーゼは攻撃が来る前に空間を離脱していたようで再びキラに攻撃を加え始めた

「フリーダム、もう一度だ！」

《All right!》

キラは再び攻撃を仕掛けるために距離をとろうとした

「だから、無駄だと言っているだろう……」

しかし、クルーゼはキラが移動する方向に銃を向け距離をとらずまといと詰め寄っていった

「クツ……こっちの攻撃が読まれているのか……」

キラも止まることなく動き続けながら砲撃を加えるが、魔力弾の出現するタイムラグを見切られ簡単に避けられ攻撃が当たり続けるだけだった

「キラ……援護する！……行くぞジャスティス！」

《All right…… Rifle Standby!》

アスランはキラの援護をしようと必死だった

「クツ……照準がブレる……」

「おや……どうしたのかなアスラン？ 君にしては狙いが甘いようだが」

「クソッ……！」

ライフルを構え狙いを定めるが目覚めたばかりの体が意識に追いつかず、ただ空を切るだけだった

「アスラン……君も変わらないな……相変わらず人の期待を裏切るのが好きなようだ」

クルーゼは未だ余裕の表情を崩していなかった

「まあいい……まずは君から墜とさせてもらおうでしょう」

「やらせるか！」

クルーゼはキラからアスランに標的を変え、攻撃を再開した

《被弾率上昇、回避に専念してください》

アスランは攻撃を盾で防ぎ攻撃しのごうとしたが、全方位から浴び

せられる弾幕を防ぎきれず全身にダメージが蓄積されていった

「なるほど、君は本調子じゃないようだね……」

「クソツ……ウワァ！」

クルーゼの攻撃にアスランも抵抗するがクルーゼが回避行動に目が慣れてきたのか次第に狙いが鋭くなり、攻撃が当たり始めた

「どうした……もう息切れしたのかい？」

「……………ツ！」

アスランはシールドを再び構え自身の体を守るだけで精一杯だった

「アスラン！」

「フッフ……君に仲間を気にする余裕があるのかい？」

クルーゼの攻撃は止まず、攻撃から庇おうとしたキラにも攻撃を加え始めた

「クツ……あなたって人は！」

攻撃の比率は次第にキラに傾きはじめ、余力のあったキラの体力を奪うように閃光が降り注いだ

「キラをやらせるか……グツ……クソツこんな時に」

「アスラン！」

「隙だらけだな……」

「……え？」

「キラアア……！」

アスランもそれに気づき必死にキラを護るために飛んだが、ダメージと精神的疲労の残った体がアスランの動きを一瞬だけ遅くした反応が遅れた僅か一瞬の隙に攻撃はキラに吸い込まれ

「フッフ……ハハハ……アハハハ、遂に落とした、スーパーコーデイナーを……アハハハ」

「嘘……だろ？ キラ……」

墜ちた

……

……

……

「ふむ……どうやら間に合ったようだな、無事か少年？」

「え……？」

墜ちたはずだった

「チイツ……全く忌々しい……」

二度目はないと思った救世主がもう一度訪れた

目の前にいたのは青い光を放つサーベルと黒光りするライフルを持った

「頼んだぞ！ フラッグ」

《Yes sar!!》

一人の男“グラハム・エーカー”だった

「さて、ここからは私に任せて貰おうか」

「しかし、あなた一人じゃ……」

「そつだ、俺達も協力する！」

「ふつ……敢えて言わせて貰う！ 君達は足手まといだ」

「……………ッ！」

「そんな！」



「早く下がりましたまえ！」

「しかし！」

「……分かりました。行こうアスラン」

「クッ……分かった」

「すまなかった！ 彼らに変わってエスコートさせて貰う！」

「いや、気にする必要は無いよグラハム……ただ、君の寿命が少し縮んだだからね」

「戯れ言を！」

二人が撤退するかしないか、そんな一瞬でクルーゼとグラハムは斬り結んだ

「ハアア……セイツ！」

「君の攻撃は素直過ぎる……故に私には届かないよ」

グラハムは左手に持った剣を構え直し、連打を加えるように切り裂いた

しかし、クルーゼもその攻撃を受け流すように左手に構えた盾から伸びた光刃で受け流した

「そうか……ならば、これはどうだ？」

グラハムがサーベルを右手に持ち換えライフルを取り出しクルーゼに撃ち込んだ

「クツ……危ないな……仕方ない。行け、ドラグーン！」

クルーゼも避けられないと判断したのか、撃ち込まれた弾をシールドで防ぎドラグーンを放出し応戦を開始した

「この誘導兵器、此方を的確に狙う!? やはり奴の技術は高い！  
！しかし……」

グラハムは狙いを定められない速さで軌道を描きドラグーンから延びた全ての攻撃をかわした

「ただ、それだけのこと……！」

グラハムは的を絞られないように左右に軌道を描きながら再びクルーゼに詰め寄った

「ハアア……！」

グラハムはその一瞬の隙を逃さず、右手に持ち変えていた剣でクルーゼの盾を切り裂いた

「チイツ……しつこい、男ほど厄介なものはないな……」

「待て！」

「君とのダンスはまたの機会にさせて貰おうか……離脱する」

クルーゼはすぐさま壊れた盾を棄てて大きく上昇して離脱した

「仕留め損ねたか……グツ……」

《リミットオーバー……大丈夫ですか？ マスター》

「なんとか……な……」

グラハムは口惜しさが残っていたようだが新デバイスの負荷に耐えきれず地面に片膝をついた

「ウオオ……」

「甘いなア！ ほらほらア！」

「クツ……」

「もっと俺を楽しませろよ……裏切り者らしく戦いなア！」

一方、シンはサーシエスと戦い続けていた

「ほらよ！ これでもくらっちまいなア！」

「……ッ！ 軌道が読めない」

彼の大剣から飛び出す魔力は無造作に乱雑に軌道を描き

「ほらほら……前だ！」

「……ッ！」

ある時はシンの行く先を阻み

「次はこっちだぜエ！」

「クソツ………無茶苦茶だ！」

ある時は本人を狙っていた

「クソツ、あんたは……そんなに戦争がしたいのかよ!!」

「ああ、したいねエ!! 俺は傭兵で」

サーシエスはファングを飛ばし

「戦争中毒で……」

刃を出したファングがシンだけではなく全員に襲いかかり

「ロクデナシな最低最悪のクソ野郎なんだよ!!」

既に悲鳴を上げていた体に更に追い討ちをかけた

「クッ……」

ヒイロは片膝を付き既に体力的な限界を迎えていた

《戦力、40%まで低下……カートリッジ残量、7%……戦闘続行不能》

「ハハツ不様だなア」

「何ツ!?!」

「そんな馬鹿みたいなシステム付けて向かってくるから!?!」

「…………ツ!?! 貴様! 貴様! 貴様アアア!?! 貴様もあいつと同じか!」

カミーユは形振り構わぬ言動にある男の姿を重ねていた

「カミーユさん落ち着いて!?!」

「貴様のような奴はクズだ!?! 生かしてはおけない!?!」

「ハツ! 面白エやれるもんならヤツてみやがれ!」

「ウオオオオ!?!」

カミーユはジュードの制止を振り切りサーシエスに向かっていった

『駄目だよカミーユ君!?!』

「…………ツ!?!」

『殺しちゃ駄目!!』

「あれは……」

通信のあつた方を向くとそこには

「私の教え子達には、指一本触れさせない!!」

「ゴメンねエリオ、キャラ……後は私達に任せて!!」

白と黒の二人の天使……高町なのはと、フェイト・T・ハラオウンがいた

「何だア、此処まできてやっと登場かよ、いい加減萎えちまいそうだったぜエ」

サーシエスはそう言いながらも新たな敵に歓喜し、二人に向かっていった

『高町一尉!! 何をやっている。俺は撤退しろと言ったはずだ!!』

アムロからなのはに通信が入った

「ごめんなさいアムロさん! でも……私だけ戦わないのは嫌なんです!!」

『だからといっ…………』

「ごめんなさい…………」

なのはは通信を無理矢理切ってサーシエスに向かっていった

「挨拶は済んだな……………さっさと逝っちまいなア、ファング！」

サーシエスは六つの槍頭を縦横無尽に空中を疾走させなのは達に迫った

「攻撃のパターンは読めてるよ！ レイジング・ハート」

《All right……………Axel shooter!》

なのはも普段から同じ様な攻撃である“アクセルシューター”を使っていたため、自身の攻撃の長所や欠点、対策なども常に考えているつもりだった

「なんだ？ そんなノロマ弾？」

「嘘……………」

しかし、サーシエスの勘と熟練した的を絞らせない攻撃はなのはの予測を上回っていた

「速い！ ………………だけど」

ファングを目で追いながらフェイトが言った

《Photon Lancer……Shoot!》

「ハッ……当たるかよオ！」

ファングの合間を縫って放たれる射撃の中で、フォトンランサー撃つが、全てかわされた

「真っ直ぐ飛ばすならタイミングを考えな!!！」

こちらの魔力弾が届く頃には、魔力の槍は逃げ仰せてしまっているマシンガンのように連射能力があるか、ティアナのクロスミラージュのように小回りが利けば異なっていたかもしれないが、フェイトはそもそも近接戦闘タイプであるし、ザンバーも大きくて取り回しがきかない

槍頭の突貫攻撃とサーシエスの魔力弾をかわしながら返す弾は、むなしく宙に消えていった

「アムロさんとは違う……きゃあああっ!!！」

二つのファングから攻撃を受けたなのは悲鳴を上げて落ちていく

「なのは!!！」

親友を気遣う視界の端に、大きな実体剣を構えて突進してくる男の姿が入った

「戦闘中に仲良しごっことは感心しねえなア!!！」



「……ッ！」

叩きつけるように振り降ろしてくるそれを、ザンバーで受け止めた  
今までの攻撃で彼女達は確信した  
彼の戦術は用兵論や戦術論のそれではなく、経験と勘で培った獣の  
闘いであると

「手前エらにも理由があるようにこっちにもあるんだよ!!！」

「ッ……近づけない」

サーシエスはそう言つと距離を取り再び射撃を開始した

「よけて!!！」

二人の間を割るように桃色の魔力が飛んできた

「なのは!!！」

「行くよレイジング・ハート!!！」

《All right!……Divaine baster》

「シューート!!！」

なのははサーシエスに接近し極太の一撃を放った

「だからア……甘いんだよオ!!！」

しかし、それをサーシエスは初めから見切っていたように足だけを空中に持ち上げかわした

「嘘ッ!!」

「ハハッ！隙だらけだなア」

サーシエスはそう言つと大剣を降りかぶった

「なのはっ!!」

《S o n i c f o a m》

「間に合え!!」

「……え？」

「なのはッ!!」

フェイトはなのはを護るために空を翔けた

「ちよいさアー!!」

サーシエスが気合いと共に振るつた凶刃は肉を切り裂く音と共になのはの命を奪う……はずだった

「ハッ……こいつは……」

「……グッ……カハッ……」

「そ、そんな……」

しかし、彼女に刃が届くことはなかった

「ハハッ、この部隊には馬鹿しかいねえのかよ！！ 仲間を庇って自分から死のうなんてなア」

「……ハアッ……ハアッ……グッ……」

「う、嘘だよね……こんなことって……」

サーシエスが振り下ろした刃は、なのはの命に届く前に割り込んだフェイトを切り裂いていた

「フェイトちゃん……しっかりしてフェイトちゃん！」

「ハアッ……ハアッ……ッ……」

なのはの目の前に立ったフェイトは腹部からおびただしい量の血を流し、意識も朦朧とした状態だった

「……のは、なの……は……」

「フェイトちゃん！」

「良か……った、なのはが無事……で」

弱々しい言葉で、なのはのことを気遣っていたフェイトだったが、その体からは次第に力が抜けていき、そのまま重力に従って自らの血に染められた大地に落ちていった



第三十一話 悪意の欠片（中編）

彼女の血が溢れ出す……

「フェイトちゃん！ フェイトちゃん！」

焼け焦げた大地を鮮血が赤黒く染め上げた

「ハハハア！こうなっちまうとエースつても無様だなア、腹切っただけでアウトだ！」

彼女の白い肌が溢れた血の池をより一層赤く演出していた

「……も……ト……を……」

「アアン？」

「許さない！ よくもフェイトちゃんを！」

なのはの表情は殺気に満ち溢れ、サーシエスを射抜いていた  
憎しみで人が殺せるならばサーシエスは既に死んでいるだろう

「良いじゃねえか！ 2人まとめて仲良く地獄に送ってやるよ！」

サーシエスは再び大剣を構えてなのはに迫り寄った

「ちよいざアーーーーー！！！」

……ムッ

「……何ッ!」

しかし、なのはに切っ先が届くことなくサーシエスの剣を光線が弾き飛ばした

「高町一尉! 何をやっている、下がるんだ!」

アムロは銃をかまえなのはに語りかけたが、眼光は鋭くサーシエスを射抜いていた

「チツ……聞いてねえぞ、あの野郎……まあいい、依頼はこなしたんだ。引き上げる」

「逃がさない! ……レイジング・ハート!」

《上官命令です》

「そんなことはどうでもいいから……早く!」

《All right……starrightbreaker standby》

なのはは去ろうとしているサーシエスに向かって自身の全魔力を込めた砲撃を放とうとしていた

「止めるんだ、高町一尉! こんな場所でそんな攻撃を放てばどうなるか考える!」

アムロはなのはを制止した

「止めないで下さい！ あの男だけは絶対に許せません！」

しかし、制止を無視してなのははチャージを続けた

「仕方ない……、止めるぞ。」

《フレンドリーファイヤですよ？》

「仕方ないだろう、今の彼女には口で言っても分からない。」

《わかりました、非殺傷設定で、威力は？》

「彼女がブラックアウトする程度に」

《わかりました、最大で》

「発射」

《fire》

アムロは顔をしかめながらも魔力を放った

《後方から射撃……直撃します》

「……え？」

彼女の意識は途切れた

パン！

隊舎の一室に頬を弾く音が響き渡った

「あ……あ……」

「君は自分が一体何をしたのか、分かっているのか？」

叩かれた張本人……高町なのはは、未だに心ここに非ずの状態だったが、自分の状態は分かっただけで、叩かれた左頬を押さえ啞然としていた

「君があの際に的確な判断を下して撤退していればあんな無様な負け方をするとはなかった……何よりも、彼女が血を流すことも無かったはずだ」

「そ、それは……」

「つまり、彼女を……フェイトを傷つけたのは君だ」

「そんな……」

「君には少し頭を冷やして貰う、本当だったら修正と言いたいくるだが、3日間の謹慎だ。その間は独房に入って貰うぞ」

アム口は冷たく、しかしいつもと変わらない口調で命令を下した



「でも……その間の指揮が……」

「問題無い、ヤマト一尉……君がその間の指揮を執ってくれ」

「わかりました」

「俺もはやてを手伝わなければならない、失礼する」

アムロは部屋を後にした

「なのはちゃん……フェイトちゃんの状態だけど………」

「シャマルさん……」

「腹部から内蔵にかけての切断と、大量出血。全快まではリハビリも含めて最短で半年以上は掛かるわ」

「そんなに……」

「それに……変な物質が治癒の邪魔をして傷が塞がらないの」

「え？」

なのはが理解するまでに数瞬の時間を必要とした

「それじゃあ……」

「ええ……もしかすると最悪傷が治らないで……」

それは、フェイトの死を意味する言葉だった、シャーリーの予測は

最悪の方向で当たってしまった

「高町……そろそろ独房に入ってもらおう……」

「シグナムさん……」

「部隊始まって以降初めての入房者か……初めて入るのが貴様ではないことを願ってはいたのだが……」

「……はい」

そこにいた全員の表情は暗かった

「アムロさん、勝手な真似はもう止めてくれませんか？一応、部長は私ですから」

「すまなかった、気を付けるよ。しかし、ああでもないとな彼女の頭も冷えないだろう？」

「それは……そうですね……せめて、一言くらい言ってください」

「分かった、これからは気をつけるよ」

アムロとはやては隊長室で報告書を纏めていた

「しかし、彼女は良いきっかけを手に入れたな」

「……ッ！ フェイトちゃんが死にかけた事をきつかけと言えるんですか!？」

はやては激怒していた、自身の幼馴染が傷つき、それをただのきつかけと呼ばれることが相当頭に來たのだろう

「君が思っている意味でいった訳じゃあ無いんだけど……。ただ……やはりこの世界は甘い、非殺傷だって考え方を変えれば犯罪者達に私を殺して下さいと言っているようなものだぞ？」

「それは極論過ぎます。非殺傷はただ罪のない民間人を巻き込まず、罪を犯した人達にも生きて償ってもらおうという管理局の考え方で  
す」

「それで……何人の局員が死んだ？ ……いや、“殺された”んだ  
い？」

「それは……」

はやては答えることができなかった

「皆には前にも行つたが、俺は別に非殺傷を否定している訳じゃない。それに無益な殺生をしないようにするのは確かに大切な考え方だと思ふ。しかし、俺達は犯罪者……それも大量殺人を行い続けた者たちを追っているんだ……そんな相手と戦うときに非殺傷設定で  
はただ自分の命を危険に晒すことになるだけだ」

「それは……それは分かつてます。でも……凶器に凶器を向けてしまつても何も変わりません」

そう言うはやては決意と覚悟に満ちていた

「そうか……君達の考えはわかったよ。高町一尉のことは全て君に任せる」

「わかりました」

「だが、当分は一人にしておいた方がいいだろう。彼女には考える時間が必要だ」

「それは、分かってます……なのはちゃんには最低でも1日は入っ  
ていて貰おうと考えていましたから……」

「分かった、そうしてやってくれ……彼女を死なせないためにもな」

「はい……」

2人の会話に険悪的な感情はなく、しかしいつも以上の事務的な態度が部屋の静寂をより一層深めていた

「ハア……」

溜息が聞こえた

独房はすべての隊舎に一応取り付けてある

しかし、それはあくまでも“一応”のものである

元が六課隊舎であるこの施設は部隊の目的が遺失物の搜索であったことはやてが独房という物を使いたくなかったということでも元々使用を考えられていなかった

そのためなのはが独房に入ること自体が異例の措置であった

「フエイトちゃん……」

なのはは未だに気にし続けていた

コッ……コッ……

「……ッ!？」

不意に足音が聞こえた

なのはが振り返ってみると……

「スバル……」

彼女の教え子の中で恐らく自分を一番慕っているであろう、スバル・ナカジマがそこに立っていた

「なのはさん……」

「ごめんね……こんな格好悪い教官せんせいで……」

「そんなこと……ないです……」

「うづん……自分でもね、分かってはいるの……あの時の自分はど  
うかしていたって……」

「でも、それはフェイトさんのことを思って……」

「違うの、私が言いたかったのはその前。」

「え………?」

「アムロさんに言われた通りに一端下がってスバル達の手伝いをし  
ていたら良かったんだ。でも………私はみんなが心配だった、もし  
かしたら死んじゃうかもかもしれないって凄く不安だった。だから……  
フェイトちゃんに無理を言っって一緒に来て貰ったの」

なのは自身の気持ちを吐き出すかのように、感情を爆発させた

「分かっています。多分……アムロさんも」

「え?」

「アムロさん、隊長室で言っていました。なのはさんには考える時  
間が必要だって」

「そう……じゃあ、アムロさんに謝らないとね」

「私も……隊長室から偶然聞こえたことを言っただけなんですけど  
ね」

「大丈夫、ありがとう」

なのはの顔は疲れきっていたが、その笑顔だけは本物だった

「さて………仕事の時間だ」

男は、顎に無精髭を蓄えた口元で不気味な笑みを浮かべ

『しくじらないでくれたまえよ、この作戦で次の一手が変わることになるのだから………』

通信の向こうからは狂気を含んだ男の声が響いていた

「分かっているさ………旦那ア、せいぜい期待していてくれよオ」

『フッフ………さあ、仕事の始まりだ。なるべく綺麗な花火を打ち上げてくれ』

「そうだな………さて、おっ始めるぞ！ 野郎どもオ！！」

しかし、そう言った彼に應える物はおらず、聞こえてきたのは無機質な機械音だけであった

「さて………エースを墜として次は夜天の王か、それともニュータイプか………どちらにしる面白くなってきたぜエ！！」

悪意で染まった彼の手はどこまでも血で赤黒く  
そして……生を求め美しく光輝く

- E N D I -



第三十二話 悪意の欠片（後編）

「……の……に……され……の……に……よ。……  
の……を……き……の……を……け……と……う……の……を……せよ」

「え？」

少女の夢に声が聞こえた

「また？ またなの!？」

「悪霊の軍団……、……の……を……せよ」

「ねえ、あなたは誰？」

再び叫んだが、答えを返す者はやはり誰もいなかった

「もう……私は独りじゃない!！」

「クソツ……また失敗か……」

「何で……」

彼女の心に声が響いた

「何通り目だ!？ 28通りだぞ!」

「私は……期待に応えたくて……」

今までとは違う冷たく拒まれるような声で

「空間認知能力は高いんだ、更に反応値と適応力を伸ばさなければ……」

「私だって頑張ったのに……」

彼女の全てを否定された

「結果が出せなければ失敗作と同じだ」

「嫌ッ！！ もう……イヤだ！！」

「俺だって嫌さ……こんな実験しか出来ないなんて……」

「私は……ただ……」

彼女は再び深い闇に落ちた

雲一つない澄み渡った空をを3体の白い影が飛んでいた

『オイオイ大丈夫か、こんな奴らだけで作戦なんて？』

3体の思考には2人の声が響いていた

『まあ、見掛けだけでは能力は判断できないだろう？ 期待してみれば分かるさ』

しかし、3体の天使はその声を愉快とも不快とも思わずに淡々と声を返した

「作戦ランク……推定B……」

「当作战における不足事項……該当なし」

「推定完了時間……40分」

『ああ、分かったから一々順番に喋んな！ 鬱陶しい』

『さあ、そろそろ着くのではないかね？』

「……作戦開始」

『フッフ……期待しているよ？』

無機質な声と共に影は散り、再び黄昏を待つ静寂が訪れた

『Allight』

「……」

遠く離れた、ジークフリート隊舎にまでその魔力は響いていた

「そ、そんな……これは……」

「どないしたんや？」

「巨大な魔力反応です！」

「それで、場所は？」

「それが……同規模の反応が3カ所同時に発生しているんです！」

「なんやてー！」

部隊が混乱するのも無理はなかった、これほどまでの高魔力が3点で“同時に”現れること事態が奇異なのだから

「一旦落ち着け……これから部隊のなかで出てもらうメンバーを3つに分けてそれぞれのポイントに行って貰う。まずAポイントは……シグナムとヒイロ」

「了解した」

「任務了解」

アムロは反応に慌てることなく部隊を割り振りそこにいた全員が従っていた

「（流石アムロさんやな……せやけど、なんかモヤモヤする……な

「なんちゃこの気持ちは」

「Bポイントにはガロードとヴィータ」

「ういっす」

「ちゃんと返事しろ」

「あいたっ!」

はやては自分の心に芽生えた感情に混乱していた

「（確かに私には、経験は足らんし、あの人にはそれがあるのは確かに理解できる）」

「Cポイントには……」

「儂が行こう」

「しかし……」

「なに、体を動かさないと鈍ってしまう。それだけだ」

「わかった。Cポイントにはあなたとドモンが行ってくれ」

「承知」

「（だけど、納得ができへん……そうか、私嫉妬しているんだ）」

はやては自らの心に生まれた感情の正体にようやく気付いた

「（確かにあの人は優秀や……それでも、これは私の部隊やる？隊長は私のはずやる？）」

彼女だつて人間だ

「（それに、あの人にウチの家族に指図する権利があるんか？）」

彼女の思いは止まらない

「（……私は何を考えとるんやるな、こんな状況なのに。せやけど……）」

今は緊急事態だと言うこともこんな事を考えている場合ではないことも理解しているつもりだった

しかし……やはり悔しい

隊長権限を使って命令を上書きしてしまおうか

アムロに最前線に出てもらって怪我でもしてしまえばみんなは自分に従ってくれるだろうか……

自分でも分かるくらいに“黒い衝動”が湧き上がってきた

しかし、考えている中で冷静な自分の姿もあった

“黒い衝動（本能）”と“冷静な自分（理性）”

どちらも間違った姿ではない  
しかし、冷静に考えてみるとどちらも間違っているのかもしれない  
人間とは愚かな生き物であった

「開けて！ 開けてよ！！」

独房からは悲痛な叫びが聞こえ続けていた

「（敵……敵が来たんだ、こんな所にいる場合じゃない……）」

なのはは焦燥感に駆られていた

「（……みんなだって、戦いに行くのに、私だって行かなきゃ行けないのに）」

偶然聞こえた声で外で騒ぎが起きているのは明白であり、仲間が戦いに出ていくのも分かりきっていたことだった

「はやてちゃん……私にも出撃させて……」

なのはは通信ではやてに連絡を入れた

『今はそれどころじゃない』

「え？」

『駄目や、なのはちゃんは待機』

「そんな……はやてちゃん……」

『これは、部隊長としての私の判断や』

しかし、返ってきた答えは“否”

『隊長は私や……私なんや』

通信は一方的に切られた

「ねえ、ここから出してよ……」

アムロに独房に入れられ、友人であるはやてにも出房を拒まれた

「誰か、誰かいないの？」

いくら人を呼んでも誰も出てこない

「出して、私をここから出してよー！」

叫んでも

「私をここから出してー！」

叫んでも

「誰か……ここから出してよ……」



悲痛な程に伝わる懇願は誰にも聴こえることなく、ただ広い通路に木霊するだけだった

この部隊には不運という言葉が一番似合うのではないだろうか

「これって……」

「どうした？」

休息など一時にしか過ぎず、脅威と言つ敵が常に襲つ

「……………この感じ……………まさか!？」

「どづして!？」

その感覚が次の敵の到来を予測していた

「嘘……………こんな早さなんて、通常の“三倍の早さ”?」  
最早言わずともわかるだろう

「俺が行く!」

「アムロさん、僕も出ます!」

この敵が誰なのか

「カミィユ……わかった」

誰が戦わなくてはいけないのか

「見せてもらおうか……管理局の魔導士の實力とやらを！」

さあ、墮天の女神の凱旋だ

謳おうじゃないか

奉ろうじゃないか

禁忌に触れたその罪を

— E N D —

第三十三話 天使再臨（前編）

ヒイロとシグナムは夕暮れの海岸線を飛んでいた

「……………」

一般に夕焼けと呼ばれる橙色をした空は次第に藍と呼ばれる夜に姿を変え、遙か下から聴こえる波の音だけが辺りの静寂をより一層際立てていた

「……………来たか!？」

すると、無言を貫いていたシグナムが突然剣を構えた

「……………敵か」

追従していたヒイロも銃を構えるとそこには

「私達は“悪霊の軍団”」

白き翼を身に纏った天使シニガミの姿があった

「これは、殺気……………」

「ゼロ……………ライフルスタンバイ」

シグナムは背中に泡立つような殺気を感じたが、ヒイロは気にすることなくライフルを構え相對していた

「検索……学習項目を確認……織滅と共に該当箇所の学習を開始します」

その天使は一言だけ幼い少女の声で告げると背中の中の羽を大筒に変えて撃ってきた

「来たか……」

2人は左右に散り

「ゼロ……撃て！」

《Roger……Shoot!!》

「ハアア……!!」

ヒロはライフルを、シグナムは剣の衝撃波を打ち込んだ

天使はその攻撃を見極めるように凝視しながらも、更に高く飛び上がり大筒から魔力弾をシグナムに向けて撃ちだした

「行くぞ、レヴァンティン！」

シグナムは振り回した鞭剣で全ての魔力弾を切り裂いた

「攻撃角度、弾速修正。第二波攻撃を仕掛けます」

天使は受け止められた攻撃を再確認し、再び撃ちだした

「無駄だ！」

「いや、かわせ！」

「何……！？ ガッ！」

シグナムは再び鞭剣を振り回したが、攻撃を受け流しきれずに左肩に魔力弾が当たり、持っていた鞘を落としてしまった

「追撃を開始します」

《射撃姿勢》

「任務了解！」

天使がシグナムに攻撃を仕掛けようとしたが、ヒイロとゼロがその隙を見逃すはずもなくライフルを撃ち込んだ

「……ッ！ 回避不能」

「やったか……？」

「いや、浅い……」

かわされると思って放った一撃だったが

「……………ッ！？」

その機体は吸い込まれるようにその一撃を受け止め爆風に巻き込まれた

「これは死ではない。肉体の一部が、損失しただけ……」

少女の声は波の音にかき消され、呆気なさや虚しさだけがそこに残っていた

「着いて来い……ドモン！」

「はい！ 師匠！」

かつて高速道路と呼ばれていた瓦礫の上を疾り抜ける2人の姿があった

「（ふむ、それにしても、このデバイスという機械。まるで、違和感を感じん……さすがなものだ）」

その1人、東方不敗は管理局からデバイスを受け取っていた

「（それにしても、名前がクーロンか……フツ）」

その名は“クーロン”

見た目はただの籠手だが、彼の人間離れた圧倒的な能力を押しさえ込む役目を果たしている

「（確か部隊長殿の話だと、これは儂のためのリミッターらしいが……）」

つまり、実質彼は己の肉体のみで戦わなくてはいけなくなっていた

「（特に……問題はないの……）」

まあ、彼にとっては些細なことではしかないのだが

「……師匠」

「うむ、来たか」

ふと眼前に白い機影が見えた

「私達は個にして全」

それだけを告げると翼を大剣に変化させ詰め寄ってきた

「あなた方を記録させていただきませ……」

「フンツ……甘いわ……！」

東方不敗は当たることを恐れずに剣を受け止め

「タアリヤ……！」

ドモンが彼の背後から飛びかかり、蹴りを喰らわせようとした

しかし……

「あなたの攻撃は既に“覚えました”」

天使は無機質な一言を告げると意図も容易くドモンの蹴りを片手で受け止めそのまま投げ飛ばした

「クッ……だが！」

しかし、受け身をすかさずにとり、今度は懐に入ろうとした

「無駄です、あなたの攻撃は既に“覚えています”」

しかし、天使は東方不敗の攻撃を受け止めながらも攻撃をさばき続けた

「貴方達の格闘戦のデータは貴重です、学習を続けさせていただきます」

そう言うと天使は2人の攻撃を受け止め、大剣を振り回した

「流派東方不敗は一子相伝！ 貴様に渡す筋合いは無い！」

「キングオブハートの名に賭けて！ 貴様を倒す！」

「貴方の攻撃は隙が多い。私を倒すには不十分です」

ドモンは天使に連撃を加えたが、全てを弾かれ最後の1撃を受け止められてしまった

「しかし！ その一瞬が貴様の隙となる！」

受け止めた格好のまま身動きがとれなくなった敵に東方不敗が叫んだ



「行くぞ！ 十二王方牌イ大車併！」

その名の通りの12の光弾が全身を襲い機体は砕け散った

「私が欠けても障害にはならない、むしろ私達は前進する」

「流派、東方不敗はア」

「王者の風よオ！」

勝利を手にした師弟はその声をを気にせず叫んでいた

岩肌を露出させた山岳地帯をヴィータとガロードは移動していた

「来たみたいだぜ、ヴィータ」

「ヴィータさんだ！ 言われなくても見えてる」

既に夜に覆われた空に1つだけ、どの星よりも輝く“天使”の姿があった

「データベース照合……識別……高火力所持者と判断、攻撃パターンの学習後すみやかに織滅行動に移行します」

その天使は一息でそれを告げると右手に持った大剣を翼に戻しさらに高く飛翔し、自身の肉体を弾丸のようにぶつけてきた

「うわ……危ねえ!!」

ガロードは反射的に飛び退いたが

「まったく……アイゼン!!」

ヴィータはグラーフアイゼンを起動し攻撃を受け止めた

「該当データ、鉄槌の騎士。危険度ランクB……収集項目、17件。

」

天使は攻撃が通らないことを悟とすぐに後退し、2人から距離をとるように飛び上がった

「どうすんだよ、ヴィータ?」

「ヴィータさんだ! いい加減覚えろ」

距離をとられた2人だったがすぐに追いかけずに一度集まり、体勢を立て直した

「さて、反撃開始だ」

「反撃って、何か作戦でもあるのかよ?」

「簡単だ。アイツをブツ潰す!」

「ええっ!? ちょ……ヴィータ?」

ヴィータはアイゼンにカートリッジを入れ直すとガロードの制止を

振り切り天使に突っ込んでいった

「このっ、潰れる！」

「回避不能、防御行動に移行します」

アイゼンをぶつけたヴィータだったが、天使に大剣で受け止められ拮抗状態になってしまった

「項目修正……“鉄槌の騎士”の危険度……ランクAに上昇、射撃戦に移行します」

「なっ！」

ヴィータは受け止められたことに若干動揺したようだったがシールドを展開し、攻撃から身を守るうとした

ドドドドオオオン！！

「クソっ、防ぎきれねえ」

しかし、撃ち込まれた弾丸の量に強度がた

「……なッ！」

「嘘だろ！？」

露出したその腕を見て、2人は驚愕した  
露わになったのは、まだ少女と言っても良いような透明な素肌だった

「……再生開始」

しかし、二人が驚かされたのは次に起きた現象だった

「マジかよ……」

「うへえ、ありえねえ……」

露わになった腕部装甲が一瞬のうちに“再生した”

「離脱します」

「チツ……しまった……」

動揺を隠せなかったのか、二人の動きに若干の躊躇いが生じた

「コボレタカケラの役割を果たさせるために……」

その隙を天使が見逃すはずもなく撤退していった

言葉だけではわからなかっただろう

彼女の声には怒りが含まれていたのを

アムロとカミーユはビルとビルの合間を縫うようにして飛んでいた  
星々が瞬くなか、摩天楼の明かりが2人を照らし、行く先を道標の  
ように示していた

「この感じは」

「左上か！」

2人は何かを感じたように飛び退いた

「クツ！」

「シールド！」

その刹那、二人がいた空間を光線が交差しビルのガラスに当たり、砕けた破片が降り注いだ

「シャアー!!！」

アムロが叫びながら上を向くとそこには

「久しぶりだな、いや……”また会ったな”アムロ」

13年の歳月の中、時には仲間として

「あなたはこんな所で何やっているんですか!？」

「カミーユ、やはり来ていたか……」

時には敵として

「なぜ今頃になって俺達の目の前に現れた!！」

「互いのMSが無い現状で、戦うのならばこつもなる!……」

戦いの中で覚醒を促し有った2人は三度再開した

「そんな子供みたいな理屈、それでも大人ですか!？」

「カミーユ、君にはわかるまい」

「わかりたくもない! もう一度、修正してやる!！」

カミーユは“怒り”という感情に身を任せ、そのままライフルの引き金をひいた

「当たらなければどうという事はない!」

しかし、シャアは攻撃の隙間を読み切り回避した

「カートリッジ!！」

「させるか、ファンネル!！」

カミーユは残弾を警戒しカートリッジを交換しようとしたがその攻撃の隙間をファンネルに狙われた

ドオオオン!!

「何ッ!？」

しかし、ファンネルの攻撃は別方向からの攻撃に阻まれた

「フィンファンネル!！」

「アムロか!？」

アムロはフィンファンネルを収納し、サーベルに持ち換えシヤアに接近した

「流石だアムロ、それでこそ私のライバルだ」

シヤアも片手にサーベルを持ち、アムロの攻撃を受け止めた

ヒュウウウウン!

「チイイツ!」

カミーユがライフルを巨大な大銃／＼ハイパーメガランチャー／＼に持ち換えシヤアを狙い撃つように何発も撃ち込んだ

「冗談ではない! カミーユ、私の邪魔をするな!」

「あなたって人は! 戦争ですよ、そうやって私事で何やってるんだ!」

「ええい、これは私とアムロの問題だ。邪魔をするんじゃない」

「カミーユ、奴の言葉に乗せられるな……クウツ!」

アムロのサーベルがシヤアのサーベルに力負けして徐々に食い込まれるように押し返されていった

「しかしカミーユ、邪魔をしないでくれ! シヤアとの決着は俺がつける!」

「アムロ、貴様こそエゴを表しているではないか」

「貴様には言われたくはない!!」

「やっぱり、許せないな……大人って」

カミーユは舌打ちしながらそう言いつつも、二人の戦いに介入することができない自分を嘆いていた

女神に知らせよ

弱さは罪だ

しかし……

強さは悪だと……

— E N D —



第三十四話 天使再臨（中編）（前書き）

最後に少しお知らせがあります。

第三十四話 天使再臨（中編）

「シャアッ!!」

「アムロ!!」

2人の戦いは熾烈という二文字で表すのも生易しいほどに激しかった

「ファンネル！」

「墜ちろッ!!」

“赤い彗星”と“白い流星”は互いに軌跡を描き  
時には近付き

時には離れ

拮抗を保ちながらも戦い続けていた

2人とも元々いた位置からは遠く離れ港湾部にまで来てしまっていた

「離れすぎたか……」

「フッ……アムロ、私の勝ちだ！」

「馬鹿を言うな、決着はまだついていない」

「この状態に持ち込んだ。だから私の“勝ち”なんだよ」

シャアの一言にアムロは納得できていなかった

「何ッ!?!」

《マスター》

「どうした? 戦闘中だぞ!」

《連絡がとれません、私達は孤立しました》

「まさか、シャアッ!」

「貴様は孤立した、カミーユは1人で無事なのか?」

カミーユの孤立にアムロは焦りを覚え、シャアは勝利を確信していた

「学習中断……エリアを移動し、共有項目を確認します」

2人の戦いも仕組まれた愚かなものであったのか

「さて、私も行きましょう。このままでは間に合わなくなってしまいます」

その声の色を伺うことは誰にもできず、ただ魅入ることしかできなかった

「全く……あの人は!!」

カミーユは離れていった2人に追い付こうと飛んでいた

「クソツ……よりによってこんなところで……」

全速力であれば彼のZが圧倒的に早いのだが、その高機動はビル群の中ではかえってデメリットにしかならなかった  
上空を飛んでもいいのだが、どこから敵が狙っているのかもわからない

カミーユは自身の苦手な場所を飛ぶことを余儀なくされていたのだ

「クソツ……早くアムロさんに追い付かなくては」

『それは困ります』

カミーユが現在の状況に悪態をつくると突然、彼の頭に声が響いた

「なんだ!? どこにいる」

『貴方の上に“私達”はいます』

「お、お前は……」

カミーユは警戒しながらその“気配”のあった方を向くと

「私達は貴方より上位の存在」

「ヒトの遙か上を行き」

「神に近づくと“悪霊の軍団”」

「そして、全にして一いちの存在」

四体の白い天使が舞っていた

「あなたは沈むのです、灼熱と硫黄の池に」

その内の一体は他の個体と違い二対の羽を広げ三体を統率するように前に出ている

「（なんだ……このブレたような感覚は……）」

カミーユは目の前にいる四体の天使から感じる気配に困惑していた

「邪魔だ！ 退かないのなら撃つ！」

「貴方が戦うのは私達ではありません」

「何ッ!？」

「何故なら貴方の良く知る存在が相手なのだから」

その一言を聞いてカミーユが飛び退くのと、一筋の閃光が過ぎ去るのは同時だった

「貴様は!？」

「久しいな、カミーユ」

「ハマーン・カーン！」

閃光をよけたカミーユの目の前にはかつて自分達を苦しめたジオンの悪霊、ハマーン・カーンの姿があった

「……………」

なのはは独房の隅でうずくまっていた

彼女は既に声を出す気力もないのか、力無く壁にもたれ掛かっていた

「私……私……」

精神的にすり減っていた彼女のか細い声は言葉にならず、声だけが静かに響いていた

「助けなくちゃ、みんなを。でも……」

すると、独房の向こうに広がる闇から

「ならば君は示さねばならない」

静かで、しかしよく通る男性の音が響いた

「えッ！ 誰？」

なのはは突然聞こえた声に戸惑いながらも、その声に警戒していた

「助けたいのだろう？ ならば君自身が動き、示さなくては誰も振

り向いてはくれない」

「でも、私は……」

すると、その声はなのはの警戒をよそに、唐突に語り始めた

「かつて……人の血が通わない戦争があった」

「え？」

「いや、語弊があったな。機械に全てを任せた戦争だ」

そこまで言つとその声はなのはに唐突に問いかけた

「血を流さず、誰かが止めるまで争いを終わらせることのない。この戦争を君はどう思う？」

「誰も血を流さない。とても理想的だと思います」

「だがしかし、誰も戦争の悲惨さがわからない。これでは戦争が繰り返される。それでも君は肯定するのか？」

「私は、血を見たくありません。戦争は嫌ですけど、人が傷つくのはもつと嫌です。誰も傷つかないのならそれでも……」

「ふむ、やはり君も血を拒むか……」

しかし、ボロボロの精神状態の彼女は彼の哲学的な言葉に戸惑いながらも、受け答えをするのがやっとだった

「何が言いたいんですか？ 私は……ッ!？」

そこまで言って彼女は気がついた、独房の鍵が開いていることに

「さあ、行きなさい。これで貴女を縛るものは何もない」

「でも……私は……」

「助けたいのだろうか？」

「それは……」

そこまで言つとなのはは言葉を切った

「確かに、人は迷う生き物だ。だが、君は行動する前に後悔などできるのかい？」

「……ッ!？」

「ならば、もう一度問おうか。君は仲間を助けたいのだろうか？」

「……はいッ!！」

なのはは先ほどまでの声の弱さはなく力強い声が蘇った

「行くがいい、籠の中の鳥よ。」

「いくよ、レイジングハート！」

なのはは、右手に持っていたレイジングハートを起動してバリアジ



ヤケツトを纏うと独房を出て行った

「これで彼女を縛る鎖はなくなった。後は彼らに任せよう……」

なのはを助けたその男は満足げにその場を立ち去った

「このお！」

「甘いな！」

アムロとシャアの戦いは続いていた

シャアがサーベルを2本に持ち替え切り込むとアムロは後退し、ライフルを撃ち込む

練達された経験に打ちつけられたその技術は誰も寄せ付けることはなかった

攻撃を見えているかいないかの紙一重でかわす

どれだけ冷静な対処をしてもできる芸当ではない

“人の革新”を成し遂げた2人だからこそできる戦い方だ

しかし、一瞬の動きで勝敗が決する

人間の反射はどこまでも鍛えることはできるが、反射に対応する肉体にはいずれ限界を迎える

縦の動きに弱い人間の目がシャアを視界から隠し、一瞬の隙が生まれてしまった

「フ、甘いな……アムロ！」

バシュツ……！！

「しまった……」

そして、シャアの撃ったライフルの弾を盾で防いだことがアムロにとって最悪の選択だった

「クソッ……シャア!!」

「私の勝ちだなアムロ」

気が付けば周囲を6機のファンネルに囲まれ、目の前にはシャアのライフルが向けられていた

夜の湾岸にシャアの紅い魔力光が妖しく光っていた

しかし、アムロも負ける気は無いようで一瞬の機会を逃すまいと伺っていた

左手に盾を構え右手に銃を持ち、躊躇いなど見せることなく鋭い眼光を覗かせていた

だが、結末はアムロの予想と違う未来を示した

「何だ!? なにが起こった?」

桃色の光弾が紅く染まったファンネルを打ち消した

「そこかっ!」

《D v a i n b u s t e r》

「チイツ!!」

攻撃のあった方向にシャアが射撃を開始したが、極太の砲撃により  
阻まれた

砲撃の来た方を2人が見るとそこには

「貴様は!?!」

「何でここにいる!?!」

「ハア……ハア……スターライト01、高町なのは。アムロさん、  
これより援護します!」

白いバリアジャケットを身に纏った高町なのはの姿があった

白き翼は勝利への道標  
不屈の心はこの胸に

勝利を導く織光の使徒  
破滅の光は彼の為に

— E N D —

第三十四話 天使再臨（中編）（後書き）

どうも、アル・トライアです。

ここまで読んでいただけたみなさんにちょっとお知らせがあります。

これから一月か二月くらい本編の更新を止めたいと思います。  
更新が滞っているからといって別に書くのを止めたわけではありませんので安心してください。

ご意見、感想等はなるべく見たときに返信したいと思います。

絶対に帰ってきますので待っていてください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4674s/>

---

魔導戦記リリカルなのはWARS—GENERATION

2011年9月29日19時44分発行